

東京大学 文学部

FACULTY OF LETTERS  
PROSPECTUS

進学ガイダンス

2026



# PROSPECTUS 2026

東京大学文学部 進学ガイダンス

## 文学部で何を学ぶか、いかに学ぶか

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

村本 由紀子



### 何を学ぶか：まずは「好きなこと」を大切に考える

研究者は往々にして、「好きなことがそのまま仕事になった」と口にしますが、文学部の教員からもしばしば、そのような幸福な発言が聞かれます。

「史料を読むのに夢中です。ほぼ毎日、新しい史料を見ては、時が経つのを忘れていきます」（日本史学）。「考古学の研究は、（中略）とにかく根気が求められます。長丁場の発掘調査は体力を削ります。それをやり続けられるのは、単純に楽しいから、そしてやりがいがあるからという理由にほかなりません」（考古学）。「子供の頃から中国の古いものが大好きで、結局それを生業にしてみました」（中国語学）。「（夢中になっているのは）活字の世界です。五十年経ってもそこから抜け出られません。本を不意に手に取って、読みはじめるとやめられない」（フランス文学）。「史料や資料に基づいて、ある事柄について推理を働かせ、さらに調べを進めていく作業（中略）は、寝食を忘れるほど楽しいもので、一生を賭けて悔いがないと思えるプロジェクトも多くあります」（社会学）。等々…。

上記はいずれも、文学部ウェブサイトの特集コンテンツ『文学部のひと』（<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/personage/>）で紹介されている教員の言葉です。文学部教員の多くが、研究テーマはもとより、その探究のプロセスにも夢中になって、一心に研究に取り組んでいます。

文学部に進学した学生のみなさんは、教員がどんなことにどんなふうに夢中になっているのかを、授業を通じて直接に教わり、あるいは研究者としての姿を目にする中で感じ取りながら、やがてその醍醐味を共有していくことになるでしょう。あちこちで説明されている通り、文学部には27もの専修課程があります。「役にたつ」「ためになる」といった不確かな評判はいったん脇に置いて、まずは好奇心の赴くままに、自身が夢中になれるような学問分野の扉をノックしてみることをお勧めします。

## いかに学ぶか：好きなことの先に「普遍的な問い」を見出す

まずは「好き」を大切に、と書きましたが、好きなことを好きなように学ぶ、ただそれだけで、文学部での学びが完結するわけではありません。掲げた問いを自分だけのものに留めず、研究上の問い(リサーチ・クエスチョン)に昇華させること。その問いに対する探究を、個人的な満足のためだけでなく、学術的・社会的貢献をも目指しながら実践すること。授業や卒業論文指導を通じて、徐々にその力を身につけていきましょう。

個々の研究における問いは、多くの場合「微視的 (micro)」です。ある時代・ある地域で一つの事象が生じた理由、一人の作家がある作品に込めた思いなど、個別的で局所的な問いに、しばしば焦点が当てられます。しかし、それらの問いに答えを得るには、対象そのものに対する微視的探究を超えて、対象を取り巻く時代背景や社会構造など、多層的な環境の特質とその歴史的变化に目を向けることが求められます。異なる時代、異なる地域との比較検討も必要です。このとき、自らの問いと、別の時代や地域に関心を持っている他者の問いとが重なり合います。

その他者は、同じ学問分野の仲間かもしれませんし、別の学問分野で学ぶ人かもしれません。たとえば、私の専門は社会心理学ですが、「ある社会に生きる人々がある共通の心理・行動傾向を示すのはなぜか」という問いについて考える際には、歴史学や宗教学、社会学、文化人類学、地理学などの知見にも大いに助けられます。探究の裾野を広げ、「巨視的 (macro)」な視点を持つことで、個別具体的な関心に根差した問いが徐々に相対化され、普遍性を帯びてきます。すなわち、一つの社会の人々の生き方についての探究が、やがて、人間の心と社会環境との持続可能な相互構成過程に関する新たな示唆をもたらしてくれるのです。

文学部での学びの過程には、ゼミや研究会など、自分の問いを他者の問いとすり合わせ、互いの視点を交差させる機会が多くあります。知的刺激に満ちたそれらの経験を通じて、自身の「好き」から生まれた小さな問いが、「人間とはいかなる存在か、人間と環境はいかに関わり合うか」といった大きな問いに繋がっている、と感じられる瞬間が訪れるかもしれません。その時にこそ、文学部での学びが(単なる実用性とは異なる次元で)「役にたつ」という確かな実感を得ることができるはずです。今、私たちの生きるこの社会が抱える諸問題に対して、文学部の学問がどのように、そしてどこまで貢献しうるのか、是非確かめにいらしてください。

## 目 次

文学部で何を学ぶか、いかに学ぶか			1
(東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 村本 由紀子)			
文学部の機構			4
文学部とはどういうところか			5
専修課程等紹介			
(人文学科)			
哲学	18	日本語日本文学(国語学)	76
中国思想文化学	22	日本語日本文学(国文学)	80
インド哲学仏教学	26	中国語中国文学	86
倫理学	30	インド語インド文学	90
宗教学宗教史学	33	英語英米文学	93
美学芸術学	39	ドイツ語ドイツ文学	97
イスラム学	44	フランス語フランス文学	101
日本史学	49	スラヴ語スラヴ文学	106
東洋史学	53	イタリア語イタリア文学	111
西洋史学	58	現代文芸論	115
考古学	62	西洋古典学	122
美術史学	67	心理学	126
言語学	72	社会心理学	131
		社会学	134
(大学院独立研究専攻)			
文化資源学	142	韓国朝鮮文化	147
(次世代人文学開発センター)	152		
特別教育プログラム			
死生学・応用倫理教育プログラム			159
原典を読む			162
アカデミック・ライティング			163
私の選択 文学部教員によるエッセイ			
歩きだしてしまっただ角		八尾 史	168
抗いがたい魅力につかまってしまった話		木下 華子	171
流されながらの選択		松田 陽	174
文学部情報館			179
多様化する文学部の研究フィールド			187

# 文学部の機構

## 文学部

### 人文学科

哲学  
 中国思想文化学  
 インド哲学仏教学  
 倫理学  
 宗教学 宗教史学  
 美学 芸術学  
 イスラム学  
 日本史学  
 東洋史学  
 西洋史学  
 考古学  
 美術史学  
 言語学  
 日本語日本文学(国語学)  
 日本語日本文学(国文学)  
 中国語中国文学  
 インド語インド文学  
 英語英米文学  
 ドイツ語ドイツ文学  
 フランス語フランス文学  
 スラヴ語スラヴ文学  
 イタリア語イタリア文学  
 現代文芸論  
 西洋古典学  
 心理學  
 社会心理学  
 社会学

専修課程

### 関連施設

北海文化研究常呂実習施設  
 次世代人文学開発センター  
 死生学・応用倫理センター  
 視聴覚教育センター  
 情報メディア室  
 国際交流室  
 日本語教室  
 文学部図書室

### 学部にて専修課程をもたない 大学院専門分野

死生学 応用倫理  
 文化資源学  
 文化経営学  
 韓国朝鮮歴史文化  
 韓国朝鮮言語社会

# 文学部とはどういうところか

## 文学部 古い伝統と新しい魅力と

文学部でなにを学ぶか。すでにある程度はご存じかもしれません。

哲学、宗教学、日本史学、考古学、言語学、英米文学、フランス文学、心理学、社会学——こうした多くの学問分野の名前はすでに馴染み深いものでしょう。そのうちのいくつかについてなら、教養課程の講義や参考書をとおして、概要くらいは学んでいることでしょう。

左ページの表にあるように、文学部には**27の専修課程**があり、それぞれ伝統的な、あるいは新たな学問分野をその名称に掲げています。多くはすでに明治の頃に創設され、以来、おのおのの領域で、日本の人文・社会科学をリードする役割をはたしてきています。

それでは、文学部で、いま、どのような授業が行われているのでしょうか。これまでに文学部に接する機会がなかった学生さんは、左ページの表といままでの知識に照らしあわせ、文学部とは伝統的な学問を昔ながらのかた苦しい方法で学ぶところだと考えるかもしれません。しかし、それは認識不足というものです。

文学部の授業はおどろくほど多様で、毎年800近い講義や演習が開講されています。「『一』『真』『善』からみる西洋倫理思想史」「近現代ドイツの戦争と社会」「『日本書紀』巻一を読む」「組織・職業・政策の社会学」「死後観念の比較研究」「日本・東洋陶磁器研究」など、授業題目を手あたり次第に取り出してみただけでも、文学部の学問領域の気の遠くなるほどの広さがおわかりになるとと思います。さらに、大学院人文社会系研究科では、文学部の有する豊かな知見を積極的に社会に向けて開き、生かしてゆくために、学内の諸研究機関を学際的につなぎ、学外の文化行政機関や文化施設などとも連携を進めています。近年では文化資源学、韓国朝鮮文化という新しい研究専攻を開設し、2022年度には基礎文化研究専攻に新たに死生学応用倫理専門分野を開設しました。これらは学部学生を持たない大学院だけの専門分野ですが、文学部のどの専修課程からも進学することができますし、いくつかの授業は学部・大学院共通科目として文学部にも開講されています。さらに人文知の新た

文学部とはどういうところか

なかたちを探る先端的研究組織として「次世代人文学開発センター」が創設され、ユニークな研究を展開しています。

文学部の各専修課程は、それぞれが確固たる基盤の上に立ちながらも、伝統的な学問の枠組みに縛られることなく、学問の新しい動向を見定め、その成果を授業に反映させています。今日、さまざまな新しい学問分野が生まれていますが、文学部はつねに豊かな発想の源泉となっています。

## 文学部のしくみ

まず、文学部の組織について説明しましょう。

文学部は近年まで思想文化学科・歴史文化学科・言語文化学科・行動文化学科に属する専修課程から構成されていましたが、2016年度に学部改組を行い、**人文学科一学科制度**の下にあらたに出發しました。

最も基本となる単位が**専修課程**です。しばしば「**研究室**」とも呼ばれる専修課程は、それぞれ、学問領域も伝統も気風も大きく異なります。文学部では、各専修課程の独自性が可能なかぎり尊重されてきました。したがって、文学部は27の専修課程に分かれているというよりも、27の専修課程が集まって文学部を構成しているといったほうが、イメージとして適当かもしれません。

文学部・大学院人文社会系研究科には、北海文化研究常呂実習施設、次世代人文学開発センター、死生学・応用倫理センター、視聴覚教育センター、情報メディア室、国際交流室、日本語教室、文学部図書室といった関連施設があります。これらの施設は専修課程とは違った観点から多様な授業を提供したり、皆さんの勉学を支援したりします。情報メディア室では、教育・研究で使用する情報システムやネットワークの構築・運用・管理を行っていますし、視聴覚教育センターでは研究・教育において視聴覚機器や視聴覚資料が活用できるよう設備整備や利用サポートを行っています。文学部で営まれている学問は、長い伝統に従うばかりではなく、新しい研究のための情報や手段を貪欲に取り込んでいるのです。

さて、文学部に進学するということは、正確に言うなら、いずれかの専修課程に進学することを意味します。次に、その専修課程について説明しましょう。

## 専修課程とはなにか

専修課程は教員（教授、准教授、講師、助教等）と学生（大学院学生、学部学生、

研究生)によって構成されます。厳密に言えば、学部(文学部)と大学院(人文社会系研究科)は別組織ですが、文学部の各専修課程は大学院の各専門分野と不可分の関係にあるので、この両者をひっくるめた、いわゆる研究室ということばが広く使われています。たとえば文学部の西洋史学専修課程と、大学院の西洋史学専門分野をあわせて、西洋史学研究室と呼ぶのはその一例です。研究室の規模はさまざま、大きいところでは教員・学生の総数が100名を超えることがありますし、総数が10名ほどのこぢんまりとした研究室もあります。

研究室ということばにはもう1つ別の意味があって、それは文字どおり、教員と学生がともに研究を進める部屋を指します。

毎年5月、教養学部前期課程学生向けに「文学部ガイダンス」、「オープンハウス」が開催されます。文学部の紹介冊子を見たり、文学部の教員や学生の話の聞いたり、ぜひ一度本郷キャンパスを訪ねてみてください。

文学部、特に法文2号館の建物は複雑怪奇で、教室、演習室、研究室の事務室、教員の個人研究室、会議室、さらにはいったい何に使われているのか、いつもひっそりと扉を閉ざした小部屋などが、迷宮のように並んでいます。

ところどころにあらわれる階段を上り、また降り、幾度か廊下を曲がるうちに、慣れないあなたは自分がいったいどのあたりにいるのか、方向の感覚を失うことになるでしょう。それでもいくつか、「哲学研究室」「美学藝術学研究室」などといった昔からの看板をみつけたら、どこでもよい、思い切って中をのぞいてみてください。扉を開けると、まずは壁一面に書物のつまった本棚が目につくはずです。さらに書類戸棚やついたての奥に、いくつかの部屋の扉が開いているのが見えることでしょう。これが、文学部に進学したら毎日のように通う、研究室というところなのです。

## 研究室とはどのようなところか

研究室ごとに呼び方はまちまちでしょうが、どんな場合でも入ってすぐのところ、辞書室あるいは参考図書室という大きな部屋があって、授業の下調べや発表の準備をするには欠かせない書物が並んでいます。

これは、各研究室が、その創設以来何十年にもわたって揃えてきた基本的な参考書の一大コレクションであり、なかには、第二次大戦中にミカン箱につめられて田舎に疎開したというような、数奇な運命を閲した書物もまじっています。また、Amazon などには見当たらない、珍しい新着の外国書が含まれているかもしれません。どの辞書が必要か、どの書物が便利か、——そうした知識は一朝一夕にして得

られるものではなく、少し大きくなりますが、やはり研究室の歴史の積み重ねの中で蓄えられてきたのです。あなたは、諸先生、諸先輩が苦心して揃えたノウハウの成果を自由に利用できるし、また、大いに利用しなくてはなりません。こうした参考書の使い方に慣れること、——これが、あなたの文学部における勉強の第一歩となることでしょう。

ところで、研究室の中に特別に演習室を設けている専修課程も少なくありません。演習は講義と違い、小規模で親密な雰囲気の中で進められます。文学部は伝統的に演習を重視してきました。あなたはいくつかの演習に参加して勉強することになるでしょうが、これは、専門研究の手ほどきを受ける場であり、同時に、発表を通じて自己の能力を高め、アピールする場でもあります。わずかに数人の仲間とともに受ける演習の授業から、生涯の友情が生まれることもあります。もっとも、予習を怠って身のおきどころのない時間を過ごすこともあるかもしれません。

文学部の各研究室はそれぞれの分野において日本の人文社会学研究で中心的な位置を占めています。多くの研究室は関連した学会の運営に携わり、研究室のOB、OGたちは全国各地で研究の第一線に立ち、海外の研究者や留学生との活発な交流が行われています。こうしたネットワークを通じて入手できる研究情報は、多くの場合、日本で最新かつ最良のものであって、東京大学文学部で学ぶことの最大の魅力とメリットはこの点にあるといってもよいくらいです。講演会やセミナーは頻繁に開かれていますから、ぜひ積極的に参加してください。

どの専修課程に進むか。どの研究室の扉をたたくか。それは、あなたの勉学と生活の両面に深く関わる問題です。あなたの一生の何がしかが、そこで決まるかもしれません。ですから、教養課程における成績の平均点や目先の流行だけにとらわれず、ぜひ、じっくりと考えてください。学問は自身の人生そのもののありようと関わるものであって、決して偏差値的な世界ではないのです。

この『PROSPECTUS』では、それぞれの専修課程の紹介にもっとも多くページをさいてあります。その説明でも足りない場合は、巻末の「さらに詳しく知るために」、「専修課程への問い合わせ」などのページを活用したり、文学部のホームページ (<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/>) を検索したりして、どうか心ゆくまで情報を集めてください。

## 助教 研究室のジェネラル・マネジャー

ところで、あなたが文学部に進学して研究室に足を踏み入れた時、そこであなた

を誰よりも先に、おそらく気さくな笑顔で迎えてくれる人（あるいはブスツとして  
いるかもしれませんが、実はとてもいい人だったりします）、そう、「助教」のことを  
を忘れるわけにはいきません。

それぞれの研究室は、読書会や研究会の世話、研究室紀要の編集、購入図書の選  
定、蔵書のインスペクション、研修旅行の手配、学生の身上または研究上の相談  
ごとへの対応など、驚くほど多くの、専門的な知識を必要とする仕事を抱えていま  
す。文学部において助教は、教授や准教授と共同で授業を担当することがありますが  
、主に、このような微妙で複雑な仕事を処理しながら、研究室が円滑に運営され  
るように絶えず気を配っているのです。まさに、研究室のジェネラル・マネジャー  
なのです。

助教の年齢はおおむね二十代後半から三十代前半。あなたにとっては兄貴分にも  
姉貴分にもあたる年ごろです。研究室を下見する機会があったら、あなたもこの助  
教の人たちに研究室の様子を聞いてみたらどうでしょう。昨今、多くの大学では助  
教の定員が削減されて従来の研究室のあり方を維持するのが難しくなるような状  
況が生じていますが、文学部では今でも多くの助教が活躍して、豊かな知的交流の  
場としての研究室を保っているのです。

## 多彩な授業 4つのタイプ

文学部では毎年 800 近い講義や演習が開講されます。授業の担当者は、専任の教  
員も非常勤講師も、それぞれの分野を代表する一流の研究者であって、その教員が、  
あるいはそれぞれの分野の基本的・伝統的な問題を、あるいは現在取り組んでいる  
研究の最新の成果をあなたに伝えるのです。それらの講義や演習は4つのタイプに  
分類できます。

第一は**各専修課程の枠組みの中で行われる授業**で、いずれも高度の専門研究の上  
に立ったものですが、新しい学問の動向をも見定めて、その成果を折りにつけ取り  
入れていることは、この『**PROSPECTUS**』や **UTAS** のシラバスをご覧ください一  
目瞭然です。もちろん、他の専修課程の授業にも原則的には出席することができます。  
それぞれの専修課程が、どのような方針で講義や演習を編成しているのかにつ  
いては、専修課程紹介のページを参照してください。

第二は「**共通科目群**」です。これには「**アカデミック・ライティング**」と「**多分  
野講義**」が含まれます。

「**アカデミック・ライティング**」の教育プログラムは、しっかりとした学術論文  
を外国語で発信するために必要な知識を身につけてもらうための授業です。今後、

文学部とはどういうところか

みなさんが研究者として、あるいは社会人として、世界に向けてきっちりとした主張をするための貴重な手立てとなってくれることは間違いありません。

「多分野講義」は学問が学際的な性格を急速に強めている最近の状況に対応するために設けられたもので、複数の専修課程にまたがり、さまざまな専門分野を横断する内容の問題を取り扱う講義と考えればよいでしょう。「**"Explaining" Japanese Religion: A Critical Approach**」「メディア間翻訳・翻案研究：文学テキストの映像化・舞台化」といった講義が用意されています。

第三は、「**人文学フロンティア教育プログラム**」です。これには、「死生学・応用倫理教育プログラム」と、文化資源学研究専攻が開講する学部・大学院共通科目の一部、次世代人文学開発センターが開講する科目の一部が含まれます。

「死生学・応用倫理教育プログラム」は死生学と応用倫理に関する学際的教育を構築するために開設されました。生死をめぐる問題は、どんな時代の、どんな地域の人々にとっても、抜き差しならぬ課題でありつづき、時代を超え、地域に限定されることのない普遍的な問いです。しかしそれは一方で、けっして観念的、抽象的な問題として提起されてきたのではなく、いつでも特定の時と場所に限定された、具体的な問題として現れてきたのも事実です。この現代という時と場所にあって生死の問題は、主題としては遺伝子操作の問題から、安楽死や尊厳死、臓器移植、さらには異なった世界観の間に生まれる軋轢として、また次元としてはミクロな分子レベルから、身体、地域、さらには地球、近隣宇宙というマクロな次元までのさまざまな問題と密接に絡み合っ現れてきています。それは古代の思想、宗教、哲学が潜在的な形で問いとしてきたものが、具体的な、目に見える形の、個別の問いに姿を変えたものにほかなりません。文学部は、各方面から第一線の先生たちを招いて、古代の問題と現代の問題とを同時に見つめていく大切な試みを始めています。2022年度から、大学院の基礎文化研究専攻において死生学応用倫理専門分野も開設されています。みなさんの積極的な参加を期待しています。

第四は「**共通講義**」です。これには、「一般講義」「外国語」「原典を読む」のほか、文化資源学研究専攻・韓国朝鮮文化研究専攻が開講する学部・大学院共通科目の一部、次世代人文学開発センターが開講する科目の一部が含まれます。

「一般講義」はそれぞれの専修課程の枠組みには収まりきらないが、それでも多くの学生にとって必要と判断されるテーマが取り上げられ、学部外から専門家を招いて講義されます。「情報メディア論」「文化人類学」「地理学」「博物館資料論」「精神療法」「電算機応用」「書道」「漢文学」「法律学」「地誌」などが開講されます。

「外国語」は外国語の運用能力を身につけるための授業です。何といっても文献解読が研究の出発点となる文学部では、外国語の運用能力を身につけることがぜひ

とも必要です。しかしそうはいつでも、教養課程で語学の授業をさぼった、文学部に進学してはじめて語学の重要性を悟った、あるいは専修課程の授業に接して、新しい外国語の知識が必要になった、というような学生が、現実には少なくありません。そのため文学部では、英語、ドイツ語、フランス語をはじめとして、中国語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ヒンディー語、韓国朝鮮語、アラビア語、ペルシア語、ギリシャ語、ラテン語、チベット語という外国語のメニューを組んでいます。専修課程の授業での必要にせまられた人たちが受講するのですから、その取り組み方も必死で、短期間で大きな効果をあげているようです。

「原典を読む」は文献を原文で読みたいと望む全学の学生を対象に、言語・文学を専門とする教員が味読の手ほどきをするものです。

## カリキュラム 専門性と学際性

文学部を卒業するためには76単位を取得することが必要ですが、その内容は専修課程によって異なります。詳しくはそれぞれの専修課程紹介のページを参照していただきたいのですが、概していえば、ほぼ半数程度の単位を必修科目で満たすことを要求し、残りの半数を学生の自由な裁量にゆだねている専修課程が多いようです。たとえば『文学部便覧』の専修課程必修科目の欄から、哲学専修課程の必修科目をみてみましょう。

もちろん、実際の履修については専修課程からの具体的な指導があることでしょうが、76単位のうち、右の表に示された内訳で44単位は必修科目を修める必要があります。しかし、必修科目といっても、必ずしもその専修課程の授業に限られるわけではなく、関連した専修課程の授業も、その専修課程の必修科目として認める場合があります。たとえば哲

必修科目	単位数
哲学概論	4
西洋哲学史概説第1部	4
西洋哲学史概説第2部	4
哲学特殊講義	12
哲学演習	8
卒業論文(卒業論文指導を含む)	12
	44

学専修課程は、倫理学専修課程や宗教学宗教史学専修課程などのいくつかの授業を「哲学特殊講義」の単位の中に入れていのです。

こうした措置は、ほとんどの専修課程によって取られています。実際には自分の専修課程の授業だけで手一杯で、他の専修課程の授業にはとても手が出せないことになるかもしれません。しかし、原理上は、半数近くの単位を他の専修課程の授業で取ることが認められているのです。文学部の学生の履修科目選択の自由度は、他学部の学生に比べてかなり高いといえます。

おそらく来年の4月、あなたは文学部の800にのぼる授業を前に、どの講義を聴講し、どの演習に参加するか、頭を抱えて悩むことになるでしょう。それは、学問のデパートともいべき多様な授業内容を誇る文学部の学生のみならず、そして奨励されている贅沢な悩みなのです。いま、いろいろなところで、インターディシプリナリティ（学際性）などということが叫ばれていますが、こうした言葉の流行するはるか以前から、文学部では、あなたの先輩たちが、一方で高度な専門性を身につけながら、他方では一見専門から離れた多様な授業を履修することによって、インターディシプリナリーな活動を実践してきたのです。学際性というものは、しばしばイメージされるように、いろいろな分野の専門家が集まって交流すれば達成されるなどという安易なものではありません。様々な学問領域の間の重なり方やずれ方を一人一人が身をもって体験し、結びあわせる過程を通して、自らの専門領域での問題関心や視野を広げてゆくこと。学際性とはそのように個人の中で、あくまでも専門性との関わりの中で現実化されてこそ力を発揮するものなのです。文学部のカリキュラムはそういう積極的なチャレンジ精神をもって自らの可能性を広げてゆこうとする人の期待に応えられるだけの多様な可能性を提供しているのです。

たとえば、あなたがヨーロッパ中世に興味を抱いて、西洋史学専修課程に進学を考えているとしましょう。あなたは、まっさきに便覧の西洋史学専修課程の項目を開いてみることでしょう。そこには西洋のさまざまな地域と時代を扱った授業が並んでいて、履修する科目を選び分けるのに楽しく迷うこととなりますが、それだけではないのです。

日本史学や東洋史学の中にも中世史の授業がある。言語や文学を専門とする専修課程も、それぞれヨーロッパ各国の中世語や中世文学の授業を提供している。美術史学の中世関係の授業も、文化史的な知識を得るためには欠かせないところだし、さらに思想を専門とする専修課程の講義にも出て、ヨーロッパ中世思想を理解する手がかりを得たい。——と、こんな具合に、研究の夢は四方八方へと広がります。そして、そのプログラムを自由に組み立てるのは、ほかならぬあなたなのです。

## 卒業論文 知の受信者から発信者へ

文学部における学生生活を締めくくるのは、**卒業論文**です。それはあなたの学業の総決算でもあります。

卒業論文を完成させるということは、決して簡単なことではありません。論文のテーマをさがし、そのテーマに関連する先行の研究を調べる。必要な文献資料を読んだり、あるいは実地の調査や実験を行ったり、集まったデータを分析・検討した

上で、思いをめぐらし、工夫をこらし、何らかの結論をもった、かなりの分量がある論文にまとめあげなくてはならないのです。量的変化は質的变化をともしません。今までにレポート程度のものしか書いたことのないあなたには、あるいは溜め息の出ることかもしれません。

しかし、心配することはありません。先輩たちの多くが、立派な卒業論文を書いて卒業していきました。文学部に進学したばかりの頃には教員をハラハラさせた頼りなげな学生が、1年、2年と演習で鍛えられるうちに実力を身につけ、そして堂々たる卒業論文を完成させる。こうした例を、多くの教員が経験しています。文学部の雰囲気に関心する過程で、あなたはきっと変貌を遂げるのです。

卒業論文を書くということは、知の受信者から知の発信者へと立場を変えることを意味します。たしかに、多くの時間とエネルギーとを費やして1つの問題に取り組むのは、辛く苦しいことでしょう。しかし、その結果として得られる喜び——そう、何ものかを発見し、何ごとかを表現しえたという喜びは、他のどんなものにも代えがたい喜びであって、数ヶ月におよぶあなたの呻吟を補って余りあることでしょう。

この喜びにとりつかれた学生は、大学院への進学をめざすことになるかもしれません。しかし、卒業論文を最初で最後の論文とする人にとっても、ひとつ大きな論文を完成させたという自信の効果は計り知れないのです。今まで受け身の形で接するばかりであった書物、取り組んでねじふせる対象でしかなかった思想が、実に身近な懐かしい存在になってしまうのはどうしたことでしょう。それがどのように書かれたものなのか、どのように積み上げられたものなのか——あなたは背後から書物や思想に接する視点を手に入れるのです。卒業後にいかなる進路をとるにせよ、この新しい視点は、あなたにとって大きな力となることでしょう。

## 卒業後の進路

最後に、文学部卒業後の進路について触れておきましょう。2つの誤った「神話」を捨て去っていただくことが必要です。

まず、文学部出身者は**就職に不利**だという「神話」。——もちろん、就職するためには、それなりの苦労はあるでしょう。卒業論文を抱えながらの就職活動もなかなか大変です。しかし、文学部の学問は社会で役立たないから就職に不利だというようなことがささやかれていたのははるか昔のことです。現在ではむしろ、さまざまな企業において仕事の多様化やソフト化が進む中で多くの新しい職種が生まれ、文学部の学生がかえって歓迎されるというケースも増えています。今求められている

のは他人では代替のきかない個々人の個性的な能力なのであり、そのような能力を養成する場として文学部は恰好の場だとも言えるのではないのでしょうか。最近の就職状況の詳細については、巻末に掲載されている卒業生の進路状況のページをご覧ください。

次に、文学部卒業生の大部分が**大学院に進学**するという「神話」。——たしかに、東大の文科系諸学部の中で、文学部は大学院進学者の比率が群を抜いて高いですし、これまでに日本の人文・社会科学の担い手となる多くの人材が輩出した文学部としては、これからも大学院に進学して研究者への道を歩む人材を育てることが大きな使命であることは間違いありません。しかしだからといって、大学院に行かない者が日陰者扱いされたり、疎んじられたりするということだけは決してありません。実際、大学院進学者は卒業生のうちの20%ほどで、多くの人は社会に巣立っていくのです。

たしかに文学部の学問は実学的な性格が乏しいですから、社会に出た卒業生がすぐに、文学部で学んだことが直接に役立ったと感じるようなことはあまり多くないかもしれません。哲学を専攻し、カントの『純粹理性批判』をテーマに研究したために、会社で得意先との交渉が円滑に進んだなどということはまずないでしょう。しかし、そこで身につけた、テキストを一語もゆるがせにせず綿密に読み、わずかな引っかかりを手がかりにそこに込められた奥深い含意を引き出してくる能力、そして今度は、それを大きな視野のうちにおさめることによって、名探偵さながらに時代や文化の全体像を解き明かしてゆく能力、そういう鋭い分析力や幅広い視点をそなえることによって、社会に出たとき、あなたの目に映る景色は確実に変わるでしょう。そしてそういう、他人には見えない景色がみえるからこそ、あなたはかけがえのない人材として社会で活躍できるのです。文学部を卒業した若者が社会に出てそのような形で新しい世界を開拓してゆく、そういう姿を見ることもわれわれ教員の大きな楽しみなのであり、多くの教員がそのために心を砕いて授業に臨んでいるのだということをどうか忘れないでください。

# 専修課程等紹介

研究の対象と方法、教員の専門領域、授業内容、  
研究室の様子、就職と大学院進学、等々

教員、学生数は2026年4月1日現在



---

# 人文学科

---



## 哲学

### ◇教員◇

教授 鈴木泉、納富信留、古荘真敬

准教授 乗立雄輝

助教 鴻浩介

### ◇学生◇

学部 30名 修士課程 12名 博士課程 15名

1877年の東京大学設立以来、一貫した歴史をもつ哲学科は、1910年、「哲学」、「史学」、「文学」の三学科中「哲学科」に属する「哲学」専修学科として今日にいたる基礎を固めた。草創期には井上哲次郎、ケーベルなどの教授陣を擁し、西田幾多郎、田辺元、九鬼周造らを輩出した。戦後も多くの哲学者、研究者を産み出し、今日に至るまで我が国の哲学・思想研究の世界に大きな一角を占め続けている。1963年の類制度創設以降は、**第一類（文化学）**中の、そして1995年から2015年までは、**思想文化学科**中の、さらに現在では**人文学科**中の「哲学専修課程」として、文学部の研究・教育組織の一翼を担っている。また、哲学専修課程は、大学院の組織としては、1953年、人文科学研究科のなかの哲学専攻課程として発足し、1995年からは、人文社会系研究科における基礎文化研究専攻内の思想文化コースに属する哲学専門分野となり、西洋哲学の歴史的研究および哲学の体系的なおこなっている。2026年4月現在、教授3名・准教授1名・助教1名の陣容であり、哲学の幅広い領域をカバーするスタッフ構成となっている。なお、毎年3～5名の非常勤講師をも迎え、一方では長い歴史をもつ西洋哲学史の全体にわたり、また他方では哲学の諸分野にはほぼ均等な比重をもたせた形で、授業を行っている。また、外国人研究者がしばしば訪れて、特別講義や講演会、セミナーなどが開催され、海外の今日的な研究にじかに触れる機会も豊富に持つことができる。さらに、哲学研究室の教育・研究活動は、死生学・応用倫理センターの授業や研究活動と連携しており、それらを通じて先端的な文脈での実践哲学を学ぶこともできるようになっている。

哲学専修課程のカリキュラムは、講義と演習に大別され、講義は、哲学概論、西洋哲学史概説第1部、同第2部、哲学特殊講義からなっている。

**哲学概論**は、西洋哲学史上繰り返し論じられてきた重要テーマを取り上げつつ、

哲学的営為の実際を展開してみせる。

**西洋哲学史概説第1部**は、古代中世哲学史の概説であり、**同第2部**は、近現代哲学史の概説であるが、本専修課程では、古代から現代までの概説的な哲学史の知識は、学生諸君が各人でしかるべき書物等をとおして、自発的に我がものとするを期待している。したがって、実際の講義は多くの場合、そうした概説書では読むことのできない、最新の専門的な知見に基づく生き生きとした哲学の通時的営みが、論じられる。

**哲学特殊講義**は、各担当教員が、自らの目下の研究テーマをめぐって、自らの哲学的営為の現場を繙いて見せるものである。

**哲学演習**は、古代から現代にいたる哲学史上の代表的諸著作を、原典で講読する。

次に、各教員の紹介をしよう。

**鈴木泉 教授**は、西欧近世哲学ならびに現代フランス哲学を研究のフィールドとしている。様々な意匠をとって現れる根拠への拘束から離脱し、存在の多様な声に開かれた〈内在性の哲学〉を独自に体系化する作業を進めつつある。具体的には、(1) ドゥンス・スコトゥスからスピノザに至る中世後期から近世にかけての哲学史を素材とする、超越なき〈内在性の哲学〉を可能にする〈存在の一義性〉の系譜学の跡付け、そのモデルケースとしての「スピノザ/ライブニッツ問題」の解明、(2) 現代における〈内在性の哲学〉の範型としてのドゥルーズ哲学の解凍とその展開、(3) 〈内在性の哲学〉を開かれた場において提示することを目指して、分析的形而上学の議論や日本（語）の哲学との突き合わせ、を進めている。また、以上とは別に、日本最古の哲学系の学会である「哲学会」とその学会誌『哲学雑誌』を素材とした近代日本哲学の形成に関する共同研究を進めている。編者の一人を務める『スピノザ全集』（岩波書店、全六巻＋別巻）が刊行中である。演習では、デカルト・スピノザ・ライブニッツなどの古典的テキストの精読を通して哲学のテキストを読解する技法を教授すること、をそれぞれ目指している。

**納富信留 教授**は、西洋古代哲学が専門で、古代ギリシア世界における「哲学（フィロソフィア）の誕生」をテーマとしている。具体的には、前6世紀初めから前5世紀の初期ギリシア哲学、前5世紀後半のソフィスト思潮とソクラテス、及び、前4世紀のプラトン、アリストテレスらの古典期哲学を中心に研究している。また、日本における西洋哲学の受容も近年のテーマである。近年は哲学諸領域を統合する「世界哲学」のプロジェクトに関わり、『世界哲学史』（ちくま新書、全8巻＋別巻）の共同編集を行った。演習では、古典ギリシア語のテキストを読み解きながら、ダイナミックな知的潮流のなかで「哲学」という営みが成立する様を明らかにする。国際プラトン学会（元会長）、国際哲学学会連合（実行委員）など海外での研究活動

が多い。著書に*The Unity of Plato's Sophist* (Cambridge University Press)、『ギリシア哲学史』(筑摩書房)、『哲学の誕生』(ちくま学芸文庫)、『ソフィストとは誰か?』(ちくま学芸文庫)、『プラトン 理想国の現在』(慶應義塾大学出版会)、『プラトンとの哲学 一対話篇をよむ』(岩波新書)など、翻訳に、プラトン『ソクラテスの弁明』『パイドン』(光文社古典新訳文庫)などがある。

**古荘真敬 教授**は、ハイデガー哲学の研究から出発して、19世紀半ばから20世紀の欧米および日本において展開された生の哲学、実存哲学、現象学とその周辺テキストの解釈を試みながら、人間の実存の本質構造に関する現象学的探究を行っている。具体的には、言語、感情と理解、行為、時間意識、共同存在、芸術、宗教といった諸現象をめぐるカント以後の哲学者たちの思索において、いかにいわゆる超越論哲学と生の哲学という二つの思考形式が必然的に絡み合いながら展開されているかを解きほぐしながら、人間の生命と言葉との連関の意味を明らかにすることが試みられている。そうした歩みを通じて、いまいちど「生の意味」を問い直す現象学的実存論を提起することが目標である。演習においては、主としてドイツ語で書かれた近現代哲学のテキストを精読しながら、古典的テキストの精緻な読解と学生各自の哲学的探究を両立させる授業を模索している。

**乗立雄輝 准教授**は、英語圏の哲学、特に19世紀後半から20世紀前半にかけてアメリカ合衆国で展開されたプラグマティズムと形而上学を中心とする思潮を専門としている。主として取り組む哲学者はパース、ジェイムズ、ホワイトヘッドであるが、彼らの経験主義的な形而上学の理解と探究に努め、そこに立脚しながら、それらの哲学的意義の考察、現代の形而上学との接続、さらに、哲学的宇宙論の可能性を拓くことを試みている。また、パースの共同体論を出発点として、知識と社会との関係を問うことも課題としている。講義においては、経験論を中心とした近現代哲学がはらむ諸問題と可能性を考察する。演習においては、パース、ジェイムズ、ホワイトヘッドらの営為が、中世後期から近世・近代の哲学的伝統をいかに批判的に継承しているのか、また、それらが現代の哲学者たちの思考とどのような関係を結びうるのかを考察していく。

文学部を卒業するために必要な単位は76単位だが、哲学専修課程では、そのうちの44単位を必修科目としている。さきに挙げた、哲学概論、西洋哲学史概説第1部、同第2部の各4単位と、哲学特殊講義から12単位、哲学演習から8単位、それに卒業論文12単位である。哲学演習は、必修8単位のうち最低限3 Semesterにわたって2単位ずつ以上とるように定めているが、それはここにおいて、欠かすことのできない先哲との対話がテキストをとおして行われるからである。

こうした哲学演習に積極的に参加しうるために、英語、ドイツ語、フランス語、

それに、ギリシア語、ラテン語を学習していることが望まれる。また本専修課程進学志望者は、さらに前期課程において基礎科目の「哲学」「倫理」、総合科目「現代哲学」「記号論理学」の諸講義を受講しておくことが望ましい。

なお、必修科目のうち、**卒業論文**は、自らが哲学を学ぶことにおいて、徹底的に遂行した思索の証となるものとして、とりわけ重要なものである。その内容は、西洋哲学の歴史的研究、体系的研究のいずれに関するものでもよく、まず学生が自分で論題を設定し、次に教員の承認を得て、論文を作成する。分量は400字詰め原稿用紙に換算して100枚以内（40,000字以内）である。毎年、卒業年度の7月はじめの頃に卒論ガイダンスの機会を設け、教員が適切な助言・指導等を行っている。

卒業後の進路は、哲学専門分野、他領域、他研究科を含めた大学院への進学、新しい分野への学士入学など、学業を続ける学生と、就職する卒業生に分かれ、後者が幾分、多い。哲学専修課程の卒業生の就職状況は（大方の予想に大いに反して）大変良好である。就職先は、報道、出版、広告、商社、銀行、メーカー、官公庁などの他に、最近ではシステム・エンジニアなど、コンピューター関連会社も多い。

## 文学部の扉 ポスターアーカイブ



### 思考のアトリエ 「あそび」を通してみる文学部

第一回目となる企画では、「あそび」をキーワードに「文学」「演劇」「観光」を主題とする3つの研究を取り上げ、文学部の研究における視点や思考の軌跡を体験することを試みる

主催：人文社会系研究科文化資源学研究専攻  
協力：国文学研究室  
英文学研究室  
スラヴ文学研究室  
期間：2025. 3. 3～3. 21

## 中国思想文化学

### ◇教員◇

教授 陳捷、横手裕、小島毅

助教 頼思好

### ◇学生◇

学部 5名 修士課程 5名 博士課程 22名

### (1) 中国思想文化学とはなにか

「中国思想文化学」という専修課程の名称に、とまどう人がいるかもしれない。高等学校の科目名から内容の想像がつく他の専修課程と比べて、この名称はたしかに少しわかりにくい。だが、このわかりにくい名称は、わたしたちの専修課程が志している学問の新鮮さの証しである。

この専修課程の前身は「中国哲学」を称していた。「哲学」に代えるに、「思想文化」ということばを使うようになったのは、哲学を重要な構成要素としつつ、それ以外の領域をも研究方法に取り込むことをめざしたからである。つまり、哲学・倫理学・宗教学・美学といった、他の専修課程の学問方法のみならず、経学のような中国古来の方法や、文化人類学や科学史など文学部の外にある学問も含めて、およそ考え得るありとあらゆる手法を動員して中国（その影響を受けた東アジアも含む）の人々の思惟を理解していこうというのが、改称の目的である。したがって、研究対象も狭い意味での思想文献にはかぎられない。もちろん、儒教・道教の教説についての研究は、この専修課程の重要なテーマであり、授業でも中心的にとりあげられる。しかし、それだけにかぎらず、いわば無名の人々が、世界について、人生について、どんなふう考えて日常生活を送っていたのか、また送っているのかを解明することも、中国の文化を理解するには大事なことである。いや、単に対象の理解のためだけではない。わたしたち自身の、ものの考え方や人生観を根本から問い直すことにつながる題材が、そこかしこに転がっている。

要は、研究する主体であるわたしたちが、どんな素材を見つけだしてくるかの問題なのだ。その点で、この専修課程では他人（教員を含む）から与えられた情報を、マニュアルどおりに処理・加工していけばよい結果が出るということはまずない。肝心なのは各自の問題意識である。中国や東アジアの思想文化について何か興味を感じた

とき、その興味を深め学問として深化させていくのは、自分自身なのだ。

## (2) 授業と専任教員

しかし、勝手な思いつきで自己流に展開したものは学問ではない。そこにはおのずから、長年にわたって蓄積されてきた知見や研究上のルールがある。それを伝授するのが授業の役割だ。

文学部を卒業するために必要な単位の総数は76単位だが、本専修課程では、そのうち42単位について、本専修課程の指定する科目を履修することを学生に求め、残る34単位については、学生に大幅な自由裁量を認めている。指定する42単位にしても、中国文学や東洋史など、研究対象を共有する他の専修課程が開講している科目から取ることもでき、カリキュラムの自由度はきわめて高い。これは、なるべく多様な分野の学問に触れて広い視野をもってほしいからである。

カリキュラムの中で、もっとも必修的な性格が強いのは、**演習**への参加である。演習を通じて、文献資料を正確に解読する能力、様々な参考書を使いこなす能力、そして自己の研究成果を人前で発表する能力を身につけてもらう。演習では、古典中国語（漢文）とともに現代中国語が不可欠で、その点では、教養学部の第二外国語（もしくは第三外国語）で中国語をあらかじめ履修しておくことが望ましい。しかし中国語未修で進学した人でも、本人にやる気さえあれば、追いつくことは十分に可能である。

他方、**講義**の方は概論・概説と特殊講義に分かれている。概論・概説（中国思想文化学概論と中国思想文化史概説）は、中国思想の構造や歴史を広い視野から展開する講義であり、特殊講義は、ある限定されたテーマについて、深く掘り下げた分析を行う講義である。学外からの講師陣も多士済々で、2026年度には3名の非常勤講師を委嘱し、近年新たに地中から出土した文献資料を用いた研究方法、近代中国における進化論の受容、風水思想の原典資料の講読といったことに関する授業を開講している。諸君が進学してくる2027年度以降も、さまざまなディシプリンの専門家を招いて、多彩な授業を開講するつもりである。

次に、本専修課程の現在の専任教員とその授業の内容を紹介しよう。

近現代の学術思想と書誌学を専門とする**陳捷 教授**は、中国の北京大学の出身。清末から民国にかけての古典文献をめぐる日中間の学術交流を中心に研究を重ねている。また清末民初のみならず、書誌学の歴史全般に強い関心を持つ。さらに日中二国に限らず、韓国朝鮮や琉球などの東アジア諸国も幅広く考察の対象としている。

道家道教思想を専門とする**横手裕 教授**は、異端視や迷信視から学術的研究が遅れていた道教の歴史と思想を、古典読解を中心に文献学的手法で着実に明らかにしてゆこ

うと取り組んでいる。儒仏道の三教を均等に学び、三教交渉のダイナミズムと中国の精神世界の構造を理解させること、そして近年では伝統医学の研究にも努めている。

儒教思想と礼教文化を専門とする小島毅教授は、「思想史」「政治史」「社会史」等といった従来のディシプリン枠を相対化する方法を模索中。演習では、入門書・概説書でおなじみの儒教史像を打破する試みを進めている。数年前に公式の所属は次世代人文学開発センターへと移ったが、わが研究室の学生への指導を引き続き熱心に行っている。

### (3) 研究室の様子

最初にあげた数値が示すとおり、他研究室に比して学部学生は多いとは言えない。そのため、「中国思想文化学研究室」として大学院（組織上は「アジア文化専攻」のなかの「東アジア思想文化専門分野」）と実質的に一体化しており、授業でも一緒になることが多い。学部学生にとっては、大学院生の先輩たちが勉強や生活についての身近な相談相手となっており、修学環境としては寧ろ理想的規模である。また、大学院等には東アジア各地からの留学生も現在22名が在籍しており、日本で生まれ育った者にとってはいろいろと刺激になる知見が得られる。

共同研究室は、2003年に全面改築された赤門地区総合研究棟7階（713室）にあり、学部学生もリファレンス・ツールの完備する明るく広々としたこの部屋を拠点にして、自由に勉強することができる。共同研究室のパソコン群には『四庫全書』のデータベースが収められているから、学生は中国史上最大の叢書である『四庫全書』を、あたかも自分の蔵書であるかのように利用することが可能である。他にも同じく大型叢書の『四部叢刊』をはじめ、各種『道蔵』、各種『大蔵経』、各種史料など、中国思想や中国学を研究する上で欠かせない主要なデータベース類はほとんどがインストールされていてすぐに使える状態になっている。また、東京大学文学部の漢籍を一括収蔵する文学部漢籍コーナーは同じ建物の6階にあり、東洋文化研究所図書室は徒歩2分の位置にあり、さらに駒込の東洋文庫もバスで10分の場所にあるから、中国を研究する学生にとっては、文献利用の点でも、日本で最も恵まれた環境と言える。

### (4) 卒業論文および卒業後の進路について

学生生活は人によりさまざまであるが、おおむね3年生の段階では広く学ぶとともに、読解力などの基礎能力を修得し、4年生になる頃から卒業論文を意識しつつ、次第に関心の焦点を絞り込んでいく。7月上旬に開催される卒業論文構想発表会の頃には、ほぼ論文の狙いが明らかとなり、あとは書くだけということになる。教員も先輩も、論文の作成に対してはアドバイスを惜しまないだろう。

**卒業論文**をあまり深刻に考える必要はない。わずか2年間の勉強の成果にはおのずから限界があることは重々承知、教員も卒業論文に「完成品」を望んではない。だが、いかに未熟な作品であっても、その人でなければ書けない何かキラリと輝いていることが期待されている。これまで、この期待はほとんど裏切られたことがない。

**卒業後の進路**は多様である。東アジアの国々との結びつきがますます強まっている近年、この専修課程の卒業生は、確かに企業から求められる存在となってきている。就職が良好すぎてか、大学院への内部進学者が以前より減っているのが、むしろ教員側の悩みの種となっているぐらいである。

**大学院**に進学した場合、すぐれた修士論文が書ければ博士課程への道が開ける。博士課程に進んでからは、数年間外国（中国・台湾・米国など）に留学する者が多い。留学成果を活かしつつ、博士論文を執筆して学生生活を締めくくるのが近年のパターンである。博士課程修了者の研究職ポストへの就職実績は、周囲の厳しい状況に比べれば、かなり良いと言ってよい。

学部卒業で社会に出るつもりでせよ、研究者になりたいと思っているにせよ、あるいはまだ見当もつかないにせよ、中国や東アジアの思想や文化に興味があり、主体的に勉強してみたいと思っているならば、まずは一度、赤門総合研究棟の私たちの共同研究室（713室）に遊びに来てみてほしい。

## インド哲学仏教学

### ◇教員◇

教授 高橋晃一、加藤隆宏      准教授 八尾史  
講師 Thomas Newhall      助教 佐久間祐惟

### ◇学生◇

学部 7名    修士課程 7名    博士課程 6名

(大学院学生数は、インド文学・インド哲学・仏教学専門分野としての総数)

インドの思想文化は、3000年にわたる長い歴史を通じて、きわめて多様な哲学的・宗教的な文化・文献を蓄積し、その豊かさと奥深さをもって、アジアはもちろん、西欧の人びとをも魅了しつづけてきた。なかでも、インドからアジア各地に広まった仏教は、東南アジア、東アジア、さらにチベットにおいて、今日も力強い生命を保ち、多くの人々の生きる指針となっている。洋の東西の知を架橋する、この思想文化に触れることは、現代の人びとが直面する諸問題に、新鮮で貴重な知見を与えてくれる。

インド哲学仏教学専修課程（略称：印哲あるいは印哲仏）は、こうしたインドの思想文化と、インドに起源をもちアジアの諸地域に展開した仏教の思想文化の、教育と研究を目的とする。その研究対象は、インドの古代から近代の思想文化に及び、仏教に関しては、インドはもちろん、他のアジア諸地域（東南アジア・東アジア・チベット）にまでわたる。きわめて広い研究領域をもつことは、本専修課程の特徴であり、大きな魅力の一つである。

インド思想ならびに仏教は長い歴史を持ち、広大な諸地域へと多様な展開をとげてきたので、その研究方法は多様であり、歴史学、考古学、人類学あるいは比較思想など、さまざまな切り込みが可能である。ただ、いずれの方法を取るにしても、それらに共通する基礎となるのは、文献の研究である。長大な歴史を通じて、人びとはつねに伝承された文献にみずからの現在を照らし、その理解をふたたび文献へと映し出していった。本専修課程では、思想の過程が深く刻まれた原典の解読に重点を置き、その基礎力の養成を目標とする。一見、迂遠とも思われるこの道筋は、その後のさまざまな研究の可能性を開く、最も確実なアプローチである。

奥ゆきの深い原典を読みこなすためには、語学力と思索力の双方が必要となる。

インド思想や仏教思想は、諸言語のなかで最も完成度の高い言語と見なされる**サンスクリット語**によって、その主要な原典が記されている。言語の完成度は思想の完成度に連動しており、中国や日本の仏教も、サンスクリット語によって思想の原型がかたちづくられている。原典の解説を通し、洋の東西の知の底流にある思想を解明することは、現代の諸問題をとらえるうえでの確固たる基盤の形成につながる。本専修課程がサンスクリット語の学習を尊重する所以である。

本専修課程に進学を希望する学生は、教養課程で哲学的なものの考え方に習熟するとともに、あわせて諸外国語（英語・ドイツ語・フランス語・中国語など）に積極的に挑んできてほしい。サンスクリット語文法は本郷でも開講されているが、駒場で学んでいれば、それだけ早く原典に向きあい、より深い世界を味わうことができるようになるだろう。

本専修課程は、起源を明治43年（1910年）に遡り、百年を超える歴史をもつ。この間、常に新しい問題意識に立って伝統を刷新しながら、日本の、ひいては世界の学界・思想界に大きな貢献をなしてきた。専修課程の名称として、長い間、創設当時の「印度哲学」を用いてきたが、平成6年（1994年）に、専修課程の内容をより見えやすくする目的で、「インド哲学仏教学」に改められた。

ここで本専修課程の専任教員とその専門、及び講義の内容を紹介しよう。

**高橋晃一 教授**はインド仏教の哲学思想を担当する。その主たる研究領域は大乗仏教の唯識思想で、特にその成立過程の解明を進めている。主著『『菩薩地』「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への思想展開』のほか、『唯識と瑜伽行（シリーズ大乗仏教7）』では「初期瑜伽行派」の章を担当している。また、2021年に『阿毘達磨集論』の伝承：インドからチベットへ、そして過去から未来へ』を出版した。さらに、2024年に、一般向けの概説書として『心と実存 唯識』を刊行した。2025年度は、演習では後期の仏教哲学文献である『タットヴァサングラハ』のサンスクリット原典を講読したほか、唯識派と双璧をなす中観派の基本文献である『中論』の輪読を行った。また、「**仏教概論**」では、インド仏教思想を理解するための基礎的な知識について解説した。

**加藤隆宏 教授**はインド哲学（仏教以外）を担当する。その主たる研究領域はヴェーダーンタ派の思想で、同派において聖典とされるウパニシャッド文献、『ブラフマ・スートラ』、『バガヴァッド・ギーター』に対する註釈文献などの分析を通じて、現代にまで脈々と受け継がれるヴェーダーンタ思想の展開について研究を進めている。講義では3000年におよぶインド思想を通時的に概観する「**インド哲学史概説**」を担当する。また、演習では、ニヤーヤ学派の根本経典『ニヤーヤ・スートラ』とその註釈『ニヤーヤ・パーシュヤ』、サーンキヤ学派の根本経典『サーンキヤ・カーリカー』とガウダパーダによる註釈『ガウダパーダ註解』などを

読み、インド哲学の基本教説および諸問題について学んでいる。また、註釈文献の取扱い方などについても解説する。その他、2026年度も引き続き「**サンスクリット語初級II**」(後期、駒場)を担当する。

**八尾史 准教授**はインド仏教(経・律)を担当する。仏教出家者集団の生活規則を集成した聖典「律蔵」を主な研究領域としており、特に經典、仏伝や説話類を大量に含みインド内外に広く伝播した「根本説一切有部律」とよばれる律蔵を扱ってきた。出家者たちの現実生活の諸問題に対処する律蔵と、個人の苦とそれからの解放を説く「経蔵」とがどのような相互関係のもとに成立してきたかに関心がある。学部の演習では、スリランカ、東南アジアの上座部仏教圏に仏典の言語として伝わったインドの言語であるパーリ語の文献を扱う。前半で文法を解説し、後半は經典を輪読する。また駒場ではSセメスターの「**比較思想**」で他宗教との比較を通していわゆる初期仏典の思想を紹介し、Aセメスターの「**インド哲学概論**」で大乗仏典までを含むインドの仏教聖典とそれらを取りまく仏教・仏教外の諸文献とその思想を解説する。

**Thomas Newhal | 講師**は、中国・日本仏教を担当する。2026年度の学部の演習では、戒律関係文献を講読し、インドで成立した戒律文献が東アジアで翻訳され、伝播していった過程を考察する。また「**比較仏教論**」では、仏教徒が長い歴史のなかで「心」をいかに理解してきたかについて、理論と実践への影響という点から解説する。

以上のほかに、非常勤講師の先生方が、サンスクリット語、チベット語、漢語にもとづく多彩な講義を開講している。2025年度は馬場紀寿教授(東洋文化研究所)が「初期仏教研究」(大学院と共通)、柳幹康准教授(東洋文化研究所)が「中国仏典講読」(大学院と共通)、片岡啓講師が「インド哲学の諸問題」(大学院と共通)、西沢史仁講師が「チベット仏教文献講読」(大学院と共通)、大鹿眞央講師が「日本密教文献講読」(大学院と共通)を担当した。

なお、梶原三恵子教授(インド語インド文学専修課程)が担当するサンスクリット語文法は、本専修課程の学生のほとんどが履修する。その単位は「サンスクリット語文法」または本専修課程の特殊講義の単位にあてることができる。また、「外国語」として開講されている「チベット語(1):口語文法」「チベット語(2):文語文法」および「ヒンディー語(1)(2)」も、大乗仏教やインド哲学の研究を深める上で聴講してほしい。



演習室の本棚

本専修課程の必修単位は44単位で、インド哲学概論・インド哲学史概説・仏教概論・比較仏教論から8単位、サンスクリット語文法4単位、特殊講義12単位、演習8単位、及び卒業論文または特別演習12単位である。その他、選択が32単位で、計76単位が卒業のために必要な単位である。単位取得に当って、例えば、教養課程でサンスクリット語文法を終えた学生は、改めてその授業を取らず、サンスクリット語を用いた演習によって代用できるなど、意欲ある学生のためにさまざまな配慮がなされている。また、選択履修の32単位分は本専修課程の開講科目に限定せず、文学部で開講されている多彩な科目を、各人の興味・関心に沿って、積極的に履修し、幅広い教養を身につけることも大いに歓迎される。

本専修課程では、卒業に当って、**卒業論文**のほか、**特別演習**を選択することができる。その場合、学生はサンスクリット文献（『アビダルマ・コーシャ・パーシュヤ』『バガヴァッド・ギーター』など）や漢文文献（『大乘起信論』『八宗綱要』など）、あるいはインド思想（史）・仏教思想（史）に関わる重要な文献・研究書から、3課題（各4単位）を選んで独習し、学年末に試験を受け、合格しなければならない。大学院に進学を希望する学生は、特別演習で原典解読の基礎力を養い、進学後、修士論文の研究課題に沿った原典の読解に着手することが通例となっている。一方、卒業論文に取り組む学生も、2年間の勉学の集大成として、各自で課題を見出し、有意義な研究成果を上げ、論文として提出している。

本専修課程は、教養学部から進学する学生のほかに、他専修課程、他学部、あるいは他大学を卒業してから学士入学する学生も含まれ、多彩である。

卒業後は大学院に進学する学生が多いが、教職や一般企業に就職する学生もいる。最近では官公庁、マスコミ、コンサルタント会社、出版社、メーカー等に就職する学生や、芥川賞を受賞した小説家も出ている。大学院はインド語インド文学専修課程と共同で、インド文学・インド哲学・仏教学専門分野を組織している。大学院の学生は若手研究者として評価されている者も多く、学部学生の学習を丁寧に補助してくれている。また大学院には、外国からの留学生も多く、文学部の中でも最も国際色が豊かな研究室の一つである。

大学院生に比して一学年の学部生の数は比較的小人数ではあり、学生同士、あるいは教員と学生の関係は緊密である。毎年春には、著名寺院の見学などを含む研修旅行を行ない、また年に数回の研究例会では、先輩たちの意欲に満ちた研究発表を聞くこともできる。

あらゆる面で昏迷の深い現代だからこそ、もう一度、人間精神の根本に立ち返り、インド思想や仏教の哲人たちの奥深いことばに静かに耳を傾けながら、現代に生きる意味をともに考え、語りあおうではないか。

## 倫理学

### ◇教員◇

准教授 中野裕考、古田徹也、板東洋介

助教 加藤喜市

### ◇学生◇

学部 28名 修士課程 7名 博士課程 5名

「倫理学」という学問に、人が抱くイメージや期待にはおそらくさまざまなものがあるだろう。日常の行為の善悪について研究するというのを思い浮かべる人もあるであろうし、また、ソクラテスの生に重なるような「よき生」の追求を思い描く人もあるだろう。自らの人生についての問いを直接重ねようとする人もあるだろうし、また、今日的な社会問題への積極的な発言を期待する人もいよう。倫理学専修課程に進学してくる学生諸君の思いも、そのようにきわめて多様なものであろう。

しかし、それが文学部のなかで、しかも思想系の学問分野の中での倫理学研究となると、そのありかたも限定されてくる。文学部の学問が原典テキストの精密な読解を身上とするように、倫理学専修課程の学問も、倫理学についての原典テキスト、就中古典のテキストの読解をその基本とすることになる。その点では思想史研究が中心となるのであり、現実的課題との関わりは間接的なものにとどまるということになるだろう。そのことはしかし、倫理という言葉に対する各人各様の思いを否定するものでは決してない。むしろ古典の読解にこそ、それぞれの思いが最も豊かな奥行きをもって現実化する場面があるというのが、われわれの確信である。

したがって、倫理学専修課程は、独断と空理空論を控えるという最低限の謙虚さを要求される以外は、きわめて自由な雰囲気には満ちている。かつてこの研究室の主任教員であった**和辻哲郎**は、日本近代において特筆すべき倫理学の体系を築き上げたが、それは、西洋思想と東洋思想の融合および規範学としての倫理学と事実の学としての諸学の融合を目指したものである。さらに、和辻は、倫理学以外に広く人文科学一般の分野でめざましい成果を上げたことで知られているが、この多様な学問領野に開かれているという性格は、今日においてなお生きていると言えるのであ

る。学生の研究対象の選択も各人の大幅な自由に任されており、実際、これまでの卒業生の研究テーマも、洋の東西を問わず、また古代から現代に至るまで、まことに多彩である。

倫理学専修課程の講義・演習の対象領域は、西洋の倫理思想と日本のそれとに二大別される。倫理学がいち早く自覚的な形態をとった西洋の思想伝統を学ぶことは、日本倫理思想史を専攻しようとする学生にとっても欠かすことはできない。一方、西洋の倫理学に関心を持つ者にとっても、自らが背負う伝統との対話は必要である。相異なる領域への幅広い目配りが求められるのが当専修課程の特色である。

以下、教員の紹介を兼ねて、令和7年度に倫理学専修課程が実施した全授業を列挙する。

**中野裕考 准教授**は、内から外へ、外から内へという両方向からアプローチしつつ西洋近代思想の限界を突破すべく、一方では16世紀末スペインのフランシスコ・スアレスから18世紀後半のイマヌエル・カントに至るドイツのスコラ哲学をたどり、他方ではラテンアメリカにおける哲学受容史および先住民言語や口承伝統に基づく思想研究の可能性を探求している。「**西洋倫理思想史概説Ⅰ、Ⅱ**」では、「在るもの」「一」「真」「善」といったいわゆる超越範疇が、古代から現代にわたって西洋の知の基底に滞留している様子を描いた。「倫理学演習」では、スアレス『形而上学討論集』『第一討論』や、カント『人倫の形而上学の基礎づけ』第三章を、それぞれラテン語、ドイツ語原典で精読した。これにより長期的な視野から、しかし精密に事態を捉える訓練を行なった。

**古田徹也 准教授**は、「言語」「心」「行為」の各概念を手掛かりにして、主に英語圏とドイツ語圏の現代哲学・倫理学を研究している。主に関心を向けているのはルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの哲学である。「**倫理学概論**」では、倫理学の基本概念と基本問題をめぐって、古今の思考を跡づけることを通じて、倫理学的思考のありようを捉える講義をおこなった。また、「倫理学演習」では、ウィトゲンシュタインの名著『哲学探究』を精読するほか、現代の英語圏の倫理学における基本文献を批判的に検討し、西洋倫理思想に本格的に足を踏み入れるための知識と思考能力を受講生が養うことを企図した。さらに「**倫理学特殊講義**」（※加藤喜市助教との連名講義）では、倫理思想史全体の鍵となるいくつかの概念および思想家について概観し、倫理学という学問に入門する手引きとした。

**板東洋介 准教授**は、とくに「型」や言語の問題に注目しながら日本倫理思想史を研究している。近年はとりわけ日本近世の儒教や国学、神道思想を主要な研究対象としている。「**東洋倫理思想史概説**」では、生の意味をめぐる近年の議論を補助線としつつ、古代から近現代にいたる日本倫理思想史を通観する講義を行なった。また「倫理学演習」では、代表的な民俗学者である折口信夫の「妣が国へ・常世へ」「大嘗祭の本義」「死者の書」などの代表的なテキストを講読したほか、近世儒教の重要テキストである伊藤仁斎の『童子問』の逐条的・逐語的な精読を行なった。また「**倫理学特殊講義**」では、密教や国学の言語論を手がかりとしつつ、日本語そのものをもつ思想性について思想史的な観点から講じた。

その他、令和7年度の非常勤講師による講義の題目は以下の通りである（肩書きは令和7年度当時のもの）。

吉田真樹講師 (静岡県立大学)	倫理学特殊講義(Ⅱ)「物語の倫理」
佐々木雄大講師 (日本女子大学)	倫理学特殊講義(Ⅲ)「20世紀フランス思想を バタイユを視軸にして読む」
上野太祐講師 (神田外語大学)	日本の思想と宗教「倫理想としての能」

このように、倫理学専修課程は、一方では古典的学問研究を尊重しつつも、他方では、哲学、社会科学、宗教学、日本思想等の諸学問に開かれた幅広い内容を持つ学問を目指しているという点で、思想系学科のなかでも特徴を示していると言える。そのことは、当専修課程を卒業し、その後研究者の道に入った先輩の学問にも明らかである。そのような条件をどう生かすかは、学生諸君の自発的研究に期待されている。

なお、卒業生の進路について言えば、当専修課程を卒業した後、大学院への進学を希望する者、官公庁・民間企業に就職する者等、さまざまである。就職先も、公務員、マスコミ、出版社、金融、広告代理店、製造業等、きわめて多彩である。

# 宗教学宗教学史学

## ◇教員◇

教 授 藤原聖子、西村明  
准教授 富澤かな、渡辺優  
講 師 李美奈

## ◇学生◇

学部 32名 修士課程 16名 博士課程 20名

## (1) 宗教学を学ぶとどうなるか

昨年までは「宗教学を学ぶとどんないいことがありますか？」と生成系A I と対話しながらイントロを作ったのだが、新鮮味が低下したので、今年はあえて「宗教学を専攻しようと思うのですが、何かデメリットはありますか？」と聞いてみた。

### Geminiの回答：

大学で宗教学を専攻しようという選択、非常に知的でエキサイティングですね！「人間とは何か」という根源的な問いに、歴史、心理、社会、哲学など多角的な視点からアプローチできるのはこの学問ならではの魅力です。

ただ、現実的な「デメリット」や「覚悟しておくべき点」も確かに存在します。進路を決める前に知っておきたいポイントをいくつか整理しました。

### 1. キャリア形成への「直接的な道」が見えにくい

宗教学は「実学（すぐに仕事に役立つ学問）」とは対極に位置することが多いです。

- 資格との結びつきが薄い：法学部なら司法試験、医学部なら医師免許といった「直結する資格」がほぼありません。
- 民間企業への説明コスト：就職活動の際、「なぜ宗教学を選んだのか」「そこで得た能力をどう仕事に活かすのか」を、宗教に馴染みの薄い採用担当者にも納得できるように言語化する力（メタ認知能力）が求められます。

### 2. 圧倒的な「言語・古典」のハードル

研究を深めようとすると、日本語の文献だけでは全く足りなくなります。

- 多言語の習得：仏教ならサンスクリット語やチベット語、キリスト教ならヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語、イスラームならアラビア語……といった古典語の習得が求められる場合があります。

- 膨大な読書量：聖典だけでなく、それに対する数千年の注釈の歴史を読み解くため、図書館に籠もる時間は他の学部より長くなりがちです。

### 3. 「信仰」と「学問」のギャップ

ここが最も誤解されやすいポイントかもしれません。

- 信仰を深める場ではない：宗教学は「特定の宗教を信じるための修行」ではなく、宗教という現象を客観的に分析する「科学」に近い立ち位置です。
- 価値観の揺らぎ：自分の信じていることや大切にしている価値観を、歴史的・社会的な文脈で「解剖」されることもあるため、精神的なタフさが必要になる場面もあります。

### 4. 周囲からの「偏見」や「誤解」

残念ながら、現代日本においては宗教に対してネガティブなイメージを持つ人も少なくありません。

- 「怪しい」と思われるリスク：専攻を伝えた際に「出家するの？」「変な勧誘に遭ってるの？」といった無理解な反応をされることがあります。これを受け流す、あるいは丁寧に説明する忍耐力が必要です。

鋭い指摘に冷や汗も出るが、AIが宗教学という分野を認知していることがわかり、少し嬉しくもある。というのも神学（回答内の表現を使えば「信仰を深める」ための学）と同じようなものと誤解されることは実際に多いからだ。

1の実学ではないという点には疑問を持つ人もいるかもしれない。パレスチナ問題やアメリカやイランの政治に関わる時事的問題を理解するのに、宗教の知識は不可欠ではないか、宗教学は社会に役立つのではないかと。それはその通りなのだが、4にあるような、宗教は怪しいと思っている人たちに背景知識を提供すると、「トランプ（or イラン）がヤバイのは、背後にヤバイ宗教があるからなんだ！」と早合点を強化してしまうおそれもある。

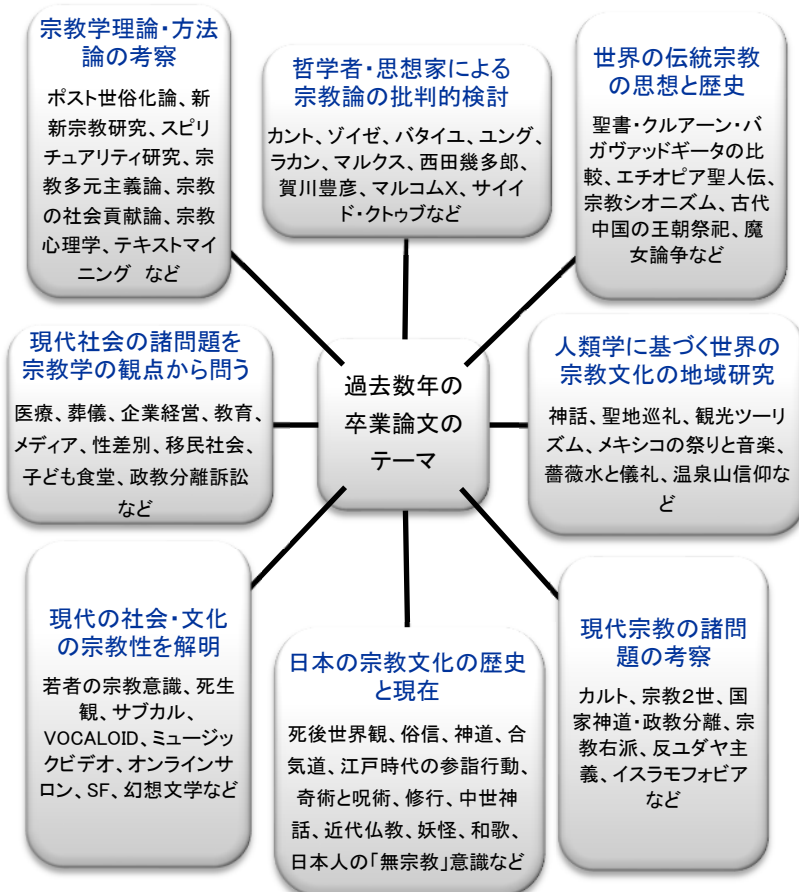
そのようなわけで、宗教が社会的に話題になるのも私たちにとっては痛しかゆしだが、実は宗教へのこうした反応自体も研究対象となる。したがって、これらのデメリットを裏返してみれば、異なる価値観を持つ他者を深く理解する力や対立する二者の言い分をメタな視点から整理する力を鍛えるという専攻の特徴が浮かび上がる。というのも、既存のルールをただ学ぶよりも「人間はなぜそのルールを作ったのか（その根本にある信念は何か）」を掘り下げ、誤解や偏見を生みがちな問題を客観的にとらえることを学ぶ専攻だからだ。そういった力はこれからの流動的なビジネスや国際的なシーンでも汎用性があるということなら自信をもって言える。

なお、2にある古典語の習得は本専修課程では必須ではなく、現代日本について研究を深めることもできる。学生の自由度が高く選択肢が多いというのが特徴だ。

## (2) 学生の関心

本専修課程に集まる学生の問題関心は多彩である。それも研究の分野や方法論が多様なだけでなく、学問的な好奇心の方向、自分の生き方にまで関わる多様性である。それは卒業論文のテーマにもよく表れている。

研究の方法論でいえば、哲学・歴史学・文献学・心理学・人類学・民俗学・社会学などにわたり、問題関心の点からは思想と宗教の関係・地域文化を特色づける宗教的要因・現代人にとっての宗教の意義などが主要なものになっている。近年は、日本人の死生観、医療・被災地現場での宗教的ケアなど、死生学との関連領域のテーマも増えている。



### (3) 専修課程の特質

人類の誕生以来、人間のいるところはどこでも、常に人間と共に存在してきたと考えられるのが宗教である。宗教は人間の価値観や文化形成と密接に関わっているために、古今東西、宗教的世界観や信念に結びつかない・由来しない法秩序や儀礼体系、風俗習慣はほとんど存在しないほどである。当専修課程は、そうした極めて広範かつ多様な領域を相手に、「宗教」とは何かという問題を、様々な視点と多様な方法によって研究する場所である。

学問は客観的であることを目指さなければならない。とはいえ、人間の生死を意味づける宗教を学問の対象として扱うのであるから、単に対象を突き放して観察すれば済む問題ではなく、他者の理解、他者との絶えざる対話が必要となる。また、宗教は世俗を超越する志向性を有するゆえに、人を魅了すると同時に、その外側の社会にとり、非常に危険なものになる場合がある。しかしそのような宗教はまた、社会と無関係というわけでもない。社会の何らかの問題に対して警鐘を鳴らしていたり、あるいは社会の負の部分を出し出す合わせ鏡であったりするのである。つまり、正統的宗教であろうと、異端的宗教であろうと、それを知ることは私たち自身を知ることにつながる。宗教学を学ぶにあたっては、批判的精神を失わず、また自己満足や独善に陥ることのないよう、見識を磨いてほしい。

### (4) 教員の紹介と授業内容

他の専修課程との違いとして挙げられるのは、(平成27年度より)指導教員を定めてはいるが、いわゆる「ゼミ制」ではなく、基本的に全教員が全学生を平等に指導していることである。学生の側からすれば、その時々に関心にあわせて、自由に授業、指導者を選ぶことができる。

**藤原 聖子**：学部では宗教を理解するとはどういうことかという方法論的関心から出発し、西洋近代的な枠組みに基づく宗教学の理論を比較研究のためにどう組み直すか、変化する現代の宗教の諸相をどうとらえるかに取り組んできた。本年度は特別研究期間のため授業を出さないが、通常は、現代宗教現象を読み解くための諸理論を事例につき合わせながら磨いていく講義と演習、従来の世界宗教史叙述を根本的に見直す講義、映像作品を現代の神話に見立てて宗教学の主要理論により解釈することを目的とした講義と演習などを開講している。

**西村 明**：卒論以来、他者への暴力と宗教の関わりに関心を抱いてきた。大学院進学以降は、非常時の犠牲者の慰霊を中心テーマとしている。そこから、より広い戦争と宗教の関わりについても関心の射程となる。本年度は、講義では民間信仰と

現代人の宗教性についての概論と日本宗教史の概説、演習では、ベトナム戦争の戦死者慰霊をめぐる文献講読や宗教学の調査法を取り上げ、内定者向けには宗教学の基礎を学び、ゼミ発表の助走をする演習を開講する。

**富澤 かな**：近代インド周辺の宗教性やオリエンタリズムの問題を、特に言説と慰霊表現に着目して研究している。関心の焦点は宗教と東洋（インド）と死である。まともに見えるかと思うが、これらはみな、近現代において世界と日常から疎外されてきたものである。そこに見られる、人間が自／他を分かち・結ぶ思考と行動のあり方に関心を持っている。本年度は、Sセメスターは食と生を、Aセメスターは共有をテーマに、インドを入口にした講義と演習を行う。

**渡辺 優**：「他者学」としての宗教学に惹かれ、信じる者の言葉を共感的かつ批判的に吟味することの醍醐味を知り、宗教思想研究へと向かう。近世西欧キリスト教圏に輩出した神秘主義文献の考究を軸に、「神秘主義」を再定義し、別様の「宗教」思想として現代に語りなおすことを試みている。本年度は、宗教学の諸問題を扱う概論、古代から現代までの西洋神秘主義思想史を通覧する特殊講義を担当するほか、演習では、神秘主義の近現代的展開に関する複数の論文、リクール、ニーチェ、セルトーのテキストを講読する。

**李 美奈**：「ユダヤ」の在り方がどのように構築されるかに関心を持っている。建築学と宗教学の2つの大学院で、近世イタリア・ユダヤ社会の空間や思想を対象として、自己と他者を分ける境界線やその間での応答に着目し、そこで形成されるユダヤ教の姿を研究してきた。本年度は、講義ではユダヤ史の概要を扱うが、各時代について研究されてきた問いや歴史観の背景にも踏み込む。演習ではヘブライ語聖書を中心に、ユダヤ教やその他多様な宗教・分野で展開された解釈の歴史を学ぶ。

この他、毎年、3～4名の非常勤講師を招いている。

## （5）卒業論文と卒論ゼミ

学生は各自の問題関心に沿って履修科目を選択し、各自の研究を進めることになるが、専修課程に進学後、新しい問題に目覚める場合も多い。だから焦って早くから自分の興味の幅を狭める必要はない。期待されるのは自分でよく考え、見極めていく姿勢であり、先人の業績を批判的に継承しつつ新たな問いを発していく目的意識と気概である。そのための挑戦の場となるのが「卒論ゼミ」であり、その成果となるのが卒業論文である。

卒論ゼミは毎年Aセメスターに開講する。その趣旨は、複数の教員の出席のもと、4年生は卒業論文の内容に関する研究発表を行ない、それを元に出席者全員で質疑応答を行なうことで、卒業論文の質的な向上をはかる点にあり、また3年生にとっては自分の問題関心に沿った研究あるいは重要文献の紹介を行ない、将来の卒業論文執筆に向けた準備を整える点にある。

卒論については、この全体の演習のほか、希望者に対する個別指導体制も充実を図っている。卒論執筆は就活と関係ないという思い込みがよくあるが、実際には、卒論ほど問題発見・解決力、コミュニケーション力が総合的に問われる課題はない。また、論文の書き方に関する指導書は数多いが、自ら書いてみて、それに対して他人から指摘を受けてはじめてわかることも多い。一人ひとりにカスタマイズした指導により、納得のいく卒論を書きあげられるようサポートしている。

## (6) 研究室について

宗教学研究室は迷路のような法文2号館の3階にある。ここには宗教学関係の事典や入門書がそろい、プリンター、スキャンも可能なコピー機があって、学習や発表の準備にはとても便利だ。相談役の教務補佐員、事務補佐員が常駐している。非常勤講師の控室でもあり、大学院生も頻繁に出入りする。昭和初期から愛用されてきた、木製の大テーブルを囲んでの、学問的な語りや雑談、就活の情報交換、有志の勉強会などに利用されている。

研究室の恒例行事は研究会、忘年会、予餞会など多々あるが、最も重要なのは1泊2日の研究室旅行である。学部生・院生・教員の親睦をはかりつつ、様々な宗教施設を見学するもので、3年生の歓迎会の意味もある。

## (7) 卒業後の進路

就職先は、公務員・コンサル・情報通信・金融など、文学部全体の傾向とほぼ同じである。在籍中に宗教学独自の資格「宗教文化士」を取得することもできる。世界の宗教の歴史と現状について一定の理解に到達した者に認定される。研究者を目指す場合は宗教学専攻の修士課程に進学することが多いが、関心にあわせて他の専攻や他大学の院に進むケースもある。

## 美学芸術学

### ◇教員◇

教 授 吉田寛

准教授 桑原俊介

専任講師 橋爪恵子 助 教 柴田康太郎

### ◇学生◇

学部 83名 修士課程 19名 博士課程 15名

美学芸術学専修課程は、その名が示すとおり、美や芸術に関する研究を行うところです。しかしその内容は、対象も方法もきわめて多岐にわたっています。提出される卒業論文のタイトルをちょっと眺めてみただけでも、カントやベルクソンの思想といった、美学の「王道」ともいえるテーマの研究に加えて、音楽や映画といった個別の芸術ジャンルにかかわる作家研究や作品研究など、相当に多様です。とりわけ最近では、「美学(aesthetics)」をその語源に即して「感性論」として捉え返す試みが盛んになってきています。そうした感性のあり方に関わる基礎研究はもとより、そのような視点をふまえた、現代の文化をめぐる「感性文化論」的な研究が急速に増えており、都市環境やインターネット・メディアなど、その射程は狭義の「芸術」の枠をはるかにこえた多彩な広がりを見せています。はじめてみた人はいはい、この研究室は単なる「好き者」の集まる同好会のようなものにはすぎないと思われるかもしれません。しかしそうではありません。学問としての厳格さを守りながら、他方で、芸術のみならず、文化のアクチュアルな状況と関わる多様なテーマの共存を許容している、このわれわれの専修課程のあり方には、それなりの歴史的・思想的背景があります。

この専修課程が哲学、倫理学、宗教学等と同じA群に属していることからわかるように元来、美学は美という価値について、また芸術学は芸術という人間の営みの本質について探求する哲学として展開されている学問です。ただ単に個別的な芸術作品の歴史や内容について関心をもつだけでなく、美や芸術をめぐる現象の根源にまでさかのぼってその本質や根底にある構造を解明しようとする問題意識が、この美学芸術学という学問領域を支えているのです。この学問を学ぶということは、そういう問題意識を共有するということであり、一見趣味的な対象を扱っていても、それはたとえば、ただ単に芝居の見どころを解説するとか、音楽の歴史を調べたり

するということとは違う視点から対象をみようとする姿勢が背後にあるのです。

そういう意味で、美学芸術学専修課程に進学してくる学生には、美や芸術に関わる体験を当然の如くにただ漫然と積み重ねているのではなく、そのようなごく当然にみえる体験の中で、当たり前のように受け入れてしまっている事柄自体に疑問を抱いて、その根拠をあらためて問い直してみるような態度が求められます。

しかしそのことは、個別的な問題はいつでもよく、本質を問うことだけが重要だというようなことでは全くありません。もともと、美的体験や芸術体験といったものは個人的な体験の色彩が強く、なかなか一般論に解消して論じにくいことから、具体的な事例から出発して思索を深めるという方向をとることはある種の必然でもあったのですが、とりわけ最近では、他の分野同様、美学や芸術学という学問も大きな転機にさしかかっており、そのため具体的・個別的な考察と連動した形で問題を捉えるような態度が強く要請されるようになってきているからです。

早い話が、芸術というような概念自体、このような具体的・個別的な考察を欠いては正しく捉えることはできません。芸術という概念の歴史を調べてみれば、われわれが今日使っているような意味でのこの概念が成立し、「**芸術家**」と呼ばれるような社会集団が生まれてくるのは、実はそれほど古いことではなく、18世紀以降、どんなに古く見積もってもルネサンス以降のことであるということがわかります。しかしそれもあくまでも理論の上での話であり、18世紀になっても、場合によっては19世紀にはいっても、芸術は現実には必ずしも今日考えられるような自律的な存在として機能したわけではありませんでした。モーツァルトはもちろん今日われわれが「**芸術家**」として認識するような一面をそなえていた部分もありますが、注文主の希望に応じて仕事をする「**職人**」に近いような部分もかなり強くもっています。

だから「**芸術**」などという概念は取るに足らないなどと言っているのではありません。むしろ、「**芸術の終焉**」などということが取り沙汰される今日でも「**芸術**」は巨大化しています。過去の芸術の枠組みを解体しようとしているかのようにみえる現代の芸術も相変わらず「**芸術**」として機能し続けていますし、それぞれの文化の中では本来「**芸術**」と呼ばれていなかったような様々な民俗芸能や民芸品などが、今日では「**芸術**」との関わりのもとの語られています。そういう状況を考えたとき、それらを無反省的に一括して「**芸術**」という名前ですべて括ってしまい、あたかもその本質が一義的に規定できるかのような形でものを考えることがいかに危険であるか

がわかるでしょう。同じ芸術という名でよばれている対象でも、それらが芸術と呼ばれるにいたる過程は千差万別であり、その過程には当の対象を取り巻く社会状況や経済的要因をはじめとする、様々な要素が関わっているのです。それゆえわれわれは、当の対象が芸術であるという自明の前提から出発するのではなく、その当のものが「**芸術**」として機能するに際して、どのようなメカニズムや論理が働いたのかということをも個別的なケースに即して具体的に見極める必要があります。われわれの専修課程が理論的な考察を中心にすえながらも、とりわけ芸術の現代的な状況に関わる個別的・具体的な問題意識や研究を重視しているのは、そのような理由によっているのです。

このことはまた今、美学や芸術学という学問がその内部の論理に閉じこもることなく、歴史学、社会学、文化人類学等の様々な隣接分野とも連動した学際的な研究を展開することを求められているということを示してもいます。その意味で、美学芸術学に進学してくる学生は、ただ芸術が好きで芸術についてよく知りたいということこそをこえて、その種の人文・社会科学的な問題意識の上に立って、むしろその延長上で芸術を対象に考えてみるというような心構えがもとめられるとも言えましょう。

しかしそのことは決して、先人たちが積み上げてきた伝統的な美や芸術についての思考の歴史をないがしろにしていいということではありません。たしかに現代のわれわれを取り巻く美や芸術に関わる様々な新しい状況は、これまでの美学や芸術学だけではなかなか捉えきれないところがあることは事実でしょう。しかしだからといって、自分の学問的な基盤を何もたずに無手勝流でいったのでは、いたずらに対象の新しさに振り回されるだけで、何も得ることはできないでしょう。「**芸術**」と呼ばれるものが多様化し、新しい状況が生じているという認識自体、伝統的な「**芸術**」の概念をしっかりと押さえているからこそ可能なのです。美学や芸術学の先人たちの知見を踏まえて、そういう**覗き眼鏡**を通してみると、同じ世界が違って見えるようになる、そのことにこそ、われわれの専修課程の存在意義があるのです。一見したところ新しく現代的であると思われたことがらが決してそうではなく、過去にも論じられた問題であったり、またその延長上にあたりることがわかることもあります（人間なんて、そんなに簡単に「**進歩**」するものではないのです）。

そんなわけで、われわれの専修課程ではその**覗き眼鏡**の性能をみがくために、古典的なテキストを精読し、それを厳密に研究する訓練をすることに重きを置いています。美や芸術という概念が、さしあたって西洋の文化に深く根ざした形で出てき

たものであるという事実を踏まえるならば、そのためには西洋語のテキストを読むことが不可欠となります。英語に加えて少なくとももう一つは得意な言語を作っておくことが必要でしょう（ちなみに、大学院進学のための試験にも2カ国語が課せられています）。ギリシャ語やラテン語も修得するのは大変ですが、それらを修得して古代・中世から伝わる様々な文献を読みこなすようになれば、**覗き眼鏡**の性能が格段に上がることは間違いのないところです。

ここで**教員スタッフの専門と授業**について紹介しておきましょう。

**吉田寛 教授**は、現代のメディア環境下における人間の感性のあり方やその変容を、認知科学や工学といった関連諸科学とも連携しつつ、哲学的に探究しており、最近ではとくにデジタルゲーム（コンピュータゲーム、ビデオゲーム）を主な研究対象としています。

**桑原俊介 准教授**は、西洋美学や解釈学に関わる概念史研究、さらには西洋中世から近世にかけての虚構存在の存在論的ステイタスを、形而上学・様相論理学・認識論・詩学・技術論などに即して問い直す哲学史研究に従事しています。

**橋爪恵子 専任講師**は、文学理論を中心として芸術のジャンルに関する思想史研究、および分析哲学や身体論の議論を取り入れつつ、芸術の定義と意義を改めて問い直す研究を行っています。

これら3人のスタッフを中心に**多様なカリキュラム**が組まれています。美学や芸術学の**概論**やそれぞれの専門に応じた**特殊講義**などの講義科目が開講されるのはもちろんですが、とりわけ重要なのは、原典講読、演習など、学生の参加を前提に成り立つ科目です。**原典講読**としては、フランス語、ドイツ語、英語の原典講読の科目が開講されていますが、これらは外国語の訓練になる以上に、本や論文をクリティカルに読むという、研究にとってもっとも基本的な姿勢を身につけるためのものです。原典講読が学問的に「読む」ことの鍛錬の場であるとするならば、**演習**は学問的に「書く」技術を修得する場であり、これは各学年で指定されたコマを履修することが義務づけられています。実際的な技術というよりは、ものの考え方や論の立て方を主眼としたものですから、レポートや卒業論文を書くという具体的な場面で応用できる以上に、ものの見方や考え方を養うという効果の方が大きいかもしれません。また、とりわけ個別芸術学は多様な分野を包含しているため、他大学から演劇学、美術学、音楽学、文芸学、建築学、映画学等諸分野の専門家を非常勤講師として招いています。カバーしなければならないジャンルが多岐にわたっているため、個々の領域について毎年各ジャンルの講義を全て開講するわけにはいかないのですが、可能な限り多彩な領域を、また古典の世界から現代の状況に至るまで、

多くの問題意識をカバーできるようなカリキュラムになるよう、心がけています。

卒業には40,000字程度の**卒業論文**を書かなければなりません。論文のテーマは、広い意味での美や芸術に関わっておりさえすればどのようなテーマを選んでもいいのですが、どのようなテーマを選ぶにしても、ただ一生懸命勉強してレポートをまとめたというようなことではなく、自分自身の問題意識を磨き、自分で問題設定を行った上で、その問題に論理的に迫ってゆくことがもとめられます。もちろん最終的には自分自身が頼りですが、そういう問題の立て方にしても、論理の展開の仕方や資料の有効な使い方にしても、講義や演習はもちろんのこと、研究室でのとりわけ大学院生たちとの日常的な交流（時には雑談）からヒントを得る部分が結構多いように思います。それもまた教育のうち、とわれわれは考えています。

**卒業後の進路**も様々です。この専修課程で学んだ美学・芸術学の知識を狭い意味で文字どおりに生かすということになると、大学院に進学して研究者になる以外には、なかなかそれを有効に生かす就職先はないというのが正直なところですが、それでも、古くは評論家の亀井勝一郎や前衛的ビデオ・アーティストとして世界的に知られるナム・ジュン・パイク、作曲家の柴田南雄、映画界やテレビ界を席卷した松本俊夫、中嶋貞夫、倉本聡、久世光彦、鴨下信一ら、さらに最近では小林恭二、中路啓太といった作家、作曲家の笠松泰洋、映画監督の井坂聡、濱口竜介など、芸術の「現場」にも一味違った人材を数多く送り出していることは、この専修課程の特色でしょう。また新聞社や放送局といったジャーナリズムの世界にも、毎年のように就職しています。もちろん、現実には、芸術とは直接に縁のない世界に職を得る人も多く、そういう場合にはたしかに、狭い意味での美学や芸術学の知識自体が直接的に役立つというようなシチュエーションはあまりないかもしれませんが、それでも、この専修課程で養った**覗き眼鏡**を通して世界を見る見方、というよりもそのようにして世界を見るということ自体を学んだことが有効に生かされるような場面が必ずや訪れると、われわれは信じています。

## イスラム学

### ◇教員◇

教授 菊地達也

准教授 松山洋平

助教 矢口直英

### ◇学生◇

学部 5名 修士課程 6名 博士課程 5名

### (1) イスラム学とは何か？

イスラム世界を指して、人は時に「中洋」と呼ぶ。東洋とも西洋とも異なる独自の文明をもった世界という意味である。日本は古来、中国、インドから多くを学び明治以降は西洋から多くの文物を摂取して国の近代化に努めてきた。大学教育がそのなかで主導的な役割を果たしてきたことはいうまでもない。しかし、その間、「中洋」への日本人の主体的学問的関心はほとんど欠落したままであったし、ましてや思想的な出会いや対決は皆無であった。それは、日本人とイスラム文明との直接的接触がそれまでなかったこと、また近代において日本人が学んだ科学技術文明は、イスラム世界ではなく、近代西欧において開花したこと、などの理由による。

では今現在の状況はどうか。かつてと比べれば、イスラム世界は随分と身近になってきた。イスラム原理主義、イスラム金融、アラブの春、ハラール認証など日常生活で耳にしたことがあるはずである。しかしその身近さは皮相的なものにすぎないのではないか、前述の思想的対峙はなされているのか、と反省する必要がある。イスラム教というものが世界情勢において前面に出てきて、イスラム教徒人口も増大している今、イスラム教とは何かを問う学問的営為が要請されるのである。祈りをささげる敬虔な信者を目にするのもあろう。しかしその姿に感銘をうけるだけでは不十分である。祈りをささげる際に唱えられるクルアーン（コーラン）には連綿と続けられてきた解釈の歴史があり、あるときには異端すれすれの解釈が加えられることがあった。祈りをささげる信者がこのような歴史の重みを背負っているのだというところまで想いを馳せなければならない。そのような想像力から学問的営為は出発する。

我々日本人の多くはイスラム教徒ではない。この事実は結構、重い。何がしかイスラム教の教理があるとして、それを絶対的な真理として非イスラム教徒は受け取

ることができないし、イスラム教なるものの未来に関し何が理想的なのかを決定する立場にもない（逆に今現在のイスラム教の在り方が間違っていると指摘する立場にもない）。せいぜいなしうることは、イスラム教を信奉する人々が何をどのように考えているのかを彼らに寄り添いながら思考していくことだけである。神から与えられたと彼らが考える真理をまったくのでたらめだと突き放すのではなく、また全面的に受け入れるのでもない、中間的な立場に立つことになる。日本で行うイスラム研究はそのように微妙な立脚点に立っているのである。

ではそのような立場でいかにして学問的営為が成り立つのであろうか。学問的営為はつまるところ問いである。我々が問いを発する場は神を所与のものとする場ではない。あくまで今現在われわれが生活している空間内で発せられる問いである。神を所与のものとする思想空間はあくまで問いの対象であって、問いの場ではない。多くの現代人はすでに神が所与のものとしてある空間にはいない。しかし神が所与のものとしてある空間がいかにして成り立っているのかを考えることはできる。それを考え、問いを発することは、我々が今ある空間をより豊かにすることにもつながっていく。イスラム学専修課程ではそのような立場でイスラム教を研究する。

「**イスラム教**」とは何か、もう少し広くとって「**イスラム思想文化**」とは何であるか、その領域を画定することは難しい。クルアーンやハディース（預言者の言行録）を中心とした一元論的思想文化であると考えられがちであるが、それは誤りであって、もっと大きな広がりをもつ領域である。便宜的にイスラム研究は文学部の一部門に押し込められているが、イブン・スィナー、ピールーニー、イブン・ハイサム



アラビア語書籍の本棚

などの活動を見ても分るように医学、天文学、数学など科学の分野も包摂しているし、法学もイスラム教にとって重要な位置を占めている。結局、総合大学の学問分野のほとんどが研究対象として視野に入ってくるのである。これはイスラム研究の一つの醍醐味であろう。

イスラム世界が何であるかの定義も難しいが、ヒジュラ暦（イスラム暦）が用いられている、もしくは用いられてきた地域がイスラム世界である、という定義もある。もしこの定義を使うとするならば、イスラム世界とは数限りないほど多種多様な言語が使われている地域ということになる。クルアーンの言語であるアラビア語

だけではなく、ペルシア語、トルコ語、ウルドゥー語、中国語、マレー語などもイスラム世界の言語なのである。同様にイスラム教は宗教という点からみると単なる一宗教であり、研究対象として極めて幅の狭いものに見えてしまうが、その内部には莫大な領域が潜んでいるのである。

## (2) 研究室での学び

一口に「イスラム学」といっても、その学問的営為の具体的内容は広くかつ深い。それだけに研究の方法も多岐にわたり、一定かつ共通のものがあるわけではない。したがって文献学的研究のみならず、哲学、宗教（史）学、倫理学、美学、比較思想の立場からイスラム教を研究することができるし、法史学、比較法学の立場からイスラム法を研究することもできる。近年提出された卒業論文の題目を見てもそのことがわかる。

年度	題 目
2024	「カーディー裁判における既判力の根拠：マムルーク朝の司法環境とカラーフィーの理論」 「チュニジアの民主化革命の発生から進展に至る社会的、宗教的、政治的背景」 「マーリク派法学における奴隷解放の規定」
2021	「現代イスラム社会における食肉を避ける食生活の出現」
2019	「イブン・タイミーヤのシーア派批判：イマーム論の観点から」 「アイユーブ朝末期のスルタン・サーリフの事績と制度改革、及びその影響」 「聖戦の具体的方法論：サイイド・クトゥブの思想とその発展」 「トルコの宗教教育における諸問題の検討」
2018	「ムスリム同胞団保守派：包摂—穏健化仮説の検証」 「中国ムスリムの「和諧思想」についての研究」 「現代エジプトの俗人説教師アムル・ハーレドの思想に関する考察：ハーレドの言説を分析しながら」
2017	「近代エジプトにおける一夫多妻についての見解：マラク・ヒフニー・ナースィフの『女性論』を例に」 「英国若者ムスリムの社会統合とメディア利用」 「イブン・トゥファイルの『ヤクザーンの子ハイイの物語』における文章形式とその影響」
2016	「『四典要会』における馬徳新の来世思想」 「アンリ・コルバンにおける Imaginal と Imagination について」
2015	「イスラーム急進派思想の源泉：統治論とジハード論を手掛かりに」 「ジャッサーズの法理論：マスラハ論とキヤース論の検討を中心に」 「ムスリム社会における幽霊観：現代中東地域における事例を中心に」

イスラム学専修課程では古典文献をしっかりと読むことを主眼におく。イスラム思想研究においては、たとえ中世期を研究対象とせずに現代のある地域のフィールドワークに力点をおくにしても、古典文献の基礎知識がないと薄っぺらなものに

なってしまうからである。したがって演習は主にアラビア語文献講読である。単に文献が読めるというレベルを目指すのではなく、問題点の抽出、その解決方法へいかにたどり着くのかといったところまで含めての文献講読である。このように文献を深く扱うなら、どうしても領域的には狭くなってしまいます。それを補うのが特殊講義である。イスラム学専修課程の専任教員は3名であるが、それに加え、他大学や他学部から講師を招き、さまざまな分野に対応できるよう配慮している。参考までに、本年度の授業担当者を以下に列挙しておこう。

<p><b>菊地 達也</b> (専任教員)</p>	<p>イスマール派、ドゥルーズ派といったイスラム少数派をフィールドとする。彼らもつ哲学的な側面を分析するとともに、イスラム世界でどのような地位を占めていたのかにも留意し、イスラム教における少数派のあり方を研究。</p>
<p><b>松山 洋平</b> (専任教員)</p>	<p>神学・法学を中心としたスンナ派思想を専門としている。古典的な教説の分析だけでなく、現代のイスラム教徒が古典的教説をどのように理解するのかという問題にも関心がある。その他、日本におけるイスラム教の表象にも着目している。</p>
<p><b>矢口 直英</b> (専任教員)</p>	<p>前近代イスラム世界の医学史を専門としている。医学思想の変遷が中心的課題だが、前近代の医療倫理や医療実践について、また中世の自然学にも関心がある。ほかに、ギリシア語文献のシリア語・アラビア語への翻訳も研究対象である。</p>
<p><b>池内 恵</b></p>	<p>イスラム政治思想を中心にアラブ世界の近現代の思想史研究を行っている。思想発展と政治・社会とのつながりを重視し、中東地域研究・国際政治学のなかにイスラム思想史研究を組み込もうとしている。</p>
<p><b>井上 貴恵</b></p>	<p>スーフィズム (イスラム神秘主義) が専門。特にイラン地域のスーフィズムの思想的展開について興味がある。またスーフィズム思想とペルシア語圏、トルコ語圏のスーフィー教団との関連に関しても研究を進めている。</p>
<p><b>中西 悠喜</b></p>	<p>12世紀以降の哲学・魔術・占星術の歴史が専門。とりわけ前イスラム期中東で発展した異教の知と実践が、イスラム信仰を基準に正当化 / 周縁化されていくプロセスに関心がある。共同研究では、同時代のヨーロッパとの影響関係も調査している。</p>
<p><b>松本 隆志</b></p>	<p>初期イスラム史を専門とする。特にウマイヤ朝～アッバース朝史に関するアラビア語史料について、各史料が内包する固有の歴史の語り方を研究している。また、近年は初期イスラム史研究言説の歴史についても検討している。</p>
<p><b>榮谷 温子</b></p>	<p>アラビア語学が専門。正則アラビア語やアラビア語の諸方言について研究してきたが、日本語母語話者に対するアラビア語教育についても分析を進めている。</p>

演習ではアラビア語を主に使うが、自分で研究を進めていく上で、また卒業論文で使用するテキストに関して特にアラビア語を選択する必要はなく、他のイスラム世界の言語を選択することも可能である。ペルシア語やトルコ語に特に惹かれるならばそれでもかまわない。原典を読み、理解を論文レベルにまで高めるのはそう容易いことではない。また、たまたま選択したテキストが難しいものであることもあ  
るが、必要であれば教員や大学院生が読解の手助けをしてくれるので、それほど心配しなくてもよい。また教養課程でアラビア語を学んでいないとイスラム学専修課程に進学できないというわけでもない。三年次でアラビア語を基礎から始め、立派に論文を仕上げた卒業した者も多い。学問以外でも、少人数研究室の利である学生、院生、研究者との親密な交流も期待できる。



研究室の風景

### (3) 卒業後の進路

大学院に進学し、なかには海外で博士号を取得する者もいるが、イスラム学専修課程修了後の進路は就職が多い。就職先としては官庁やマスコミが比較的多く、一般企業に進む者もいる。卒業して就職するならイスラム学専修課程で学ぶ内容はその後の人生に直接役に立つことではないだろう。しかしこれまでほとんど知らなかったことを主体的に学んでいき、またその知識を深めていく過程を経験することは何らかの役に立つはずである。逆にいうとそのような経験ができるのは学生時代しかないかもしれない。

# 日本史学

## ◇教員◇

教授 鈴木淳、高橋典幸、牧原成征、三枝暁子

准教授 村和明、稲田奈津子

助教 杉田建斗

## ◇学生◇

学部 52名 修士課程 22名 博士課程 34名

### (1) 日本史学の特質

日本史学は、日本列島およびその周辺の過去の歴史について、多様な側面から総合的に考究しようとする専門分野である。研究の基礎は、古文書・記録・史書・年代記などの文献史料を、正確に読み、内容を批判的に検討し、そこから歴史の文脈や展開を明らかにする論点を引き出すことにあり、その上に立ってあらたな歴史像を構成することがめざされる。したがって、当研究室の教育・研究システムも、そうした歴史研究の力量を養成することを中心に組み立てられている。

演習では、古代・中世・近世・近現代の各時代の歴史理解にとって不可欠の文献史料を原文に即して解読する、あるいは、それらの史料を使って書かれた先学の優れた研究・論文（外国語で書かれたものを含む）を批判的に検討する、といったことが中心的な内容となる。講義では、各教員が行っている先端的な研究の内容をかみくだいて話すことになるが、その場合でも、**<史料をしていかに歴史を語るか>**を軸とする講義が多い。

一方、日本史学が対象とする歴史資料は、文献のみではなく、絵画や文学を始めとする芸術作品、発掘調査の成果としての遺跡や遺物、習俗や民俗行事、地図や地名などと、広がりを見せている。それらをめぐっては、専門的には、美術史学・国文学・考古学・民俗学・建築史学・歴史地理学などの諸学問領域があるが、日本史学の側からも、これらの歴史資料を再検討し、あらたな歴史像の提示や問題提起を行うようになってきている。

当研究室の学生も、文献史料に対する専門的能力をしっかりと踏まえた上で、できる限り広範な歴史資料を対象として取り上げる姿勢が望まれる。

## (2) 教員の自己紹介

現在の当研究室の専任教員は6名、助教1名である。時代ごとの専門性を考慮して、古代・中世・近世・近現代に2名ずつという構成であったが、現在は古代、近代が1名となっている。時代区分はあくまで便宜的なものであり、時代の枠を超えて積極的に発言しあう気風がある。

**鈴木淳**は、**明治期の社会経済史**が専門である。課程博士論文を書籍とした『明治の機械工業』（ミネルヴァ書房）がある。その後、機械を中心とした新技術の導入、活用を軸として日本近代史を展望しようと試みており、駒場での授業内容を基にした『日本の近代15 新技術の社会史』（中央公論新社）、『日本の歴史20 維新の構想と展開』（講談社）を執筆した。他に『関東大震災』（講談社学術文庫）、編著に『工部省とその時代』（山川出版社）、『経済の維新と殖産興業』（ミネルヴァ書房）などがある。近年は本学の百五十年史編纂にも取り組んでいる。演習では、夏学期に論文を読んで日本近代史の学術論文のあり方を学び、冬学期には学生が史料に基づいた研究発表をする。

**高橋典幸**は、**中世史**を専攻している。武家政権の組織、とくに鎌倉幕府の御家人制に注目し、軍事制度の側面からその特質にアプローチしているが、近年は社会的・地域的側面にも関心を向け、続く室町幕府の成立過程・特質も検討課題としている。講義ではその成果もふまえて武家社会について広く論じ、かつ古文書学についても概説する。演習では鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』を講読し、史料読解の基礎の習得をめざす。著書に『鎌倉幕府軍制と御家人制』（吉川弘文館）等がある。

**牧原成征**は、**近世史**を専攻している。身分制・土地制度・商品流通などを研究テーマとし、百姓・町人・武士・奉公人・かわた身分など、当時の人々のあり方や、彼らが形づくった社会と国家の特質について追究している。講義ではそれらの一端を提示・紹介し、演習では報告者が任意の地域をとりあげて、そこで見られる諸問題について史料を読み解き、論点を展開・総合してゆく方法を考える。著書に『近世の土地制度と在地社会』（東京大学出版会）、『日本近世の秩序形成 村落・都市・身分』（同）等がある。

**三枝暁子**は、**中世史**を専攻している。主に京都の寺社史料を素材として、寺院社会および都市社会の構造について分析をすすめている。具体的には、中世の「寺社勢力」を代表する位置にあった比叡山延暦寺、およびその末社の史料を分析しながら、13世紀以降に進展する寺社の領主支配や集団編成等について検討している。講義では、その成果をふまえて、都市に現出する諸集団の社会的位置づけについて論じる。また演習では、『北野社家日記』を読み解きながら、15世紀後半の都市社会について考える。著書に『比叡山と室町幕府一寺社と武家の京都支配—』（東京大学出版会）等がある。

**村和明**は、**近世史**を専攻している。特に天皇・朝廷、豪商三井家を主な分析対象とし、権力構造の変遷や大組織の制度化の過程、これらと密接に関連する史料論について考えている。著書に『近世の朝廷制度と朝幕関係』（東京大学出版会）がある。講義では、具

体的な史料や先行研究に即して、広義の政治史の発想・手法を概説する。演習では、政治史史料の正確な読解を目指す。

**稲田奈津子**は、**古代史**を専攻する。中国・朝鮮との比較の視点から、葬送儀礼や金石文を中心に検討しており、近年はジェンダー史にも関心を寄せている。著書に『日本古代の喪葬儀礼と律令制』（吉川弘文館）、共編著に『黄泉の国との契約書—東アジアの買地券』（勉誠出版）、『東アジアの後宮』（勉誠出版）等がある。講義では儀礼史研究の一端を論じ、演習では撰開期の史料読解を通じて平安貴族社会を読み解いていく。

また、以上の専任教員以外にも、史料編纂所や他学部・他大学の教員の方を講師として招き、特徴ある魅力的な講義を開講していただいている。

### （3）研究室と史料編纂所

研究室は、法文2号館の1-4階に「散在」しているが、その中核は1階東南の隅にある。ここには助教と副手がおり、また学生・大学院生から教員まで、全構成員の「溜まり場」となっている。研究室はきわめて開放的であり、教員はもちろん、助教や先輩の大学院生からも懇切な指導や助言を受けることができる。

研究室図書は、日本・世界においてもっとも充実した規模の日本史関連図書を所蔵している。ただし、法文2号館1・2・4階研究室や文学部2・3号館図書室、史料編纂所1階日本史学研究室などに分散配置されており、求める時代・分野の図書のありかを知るには多少の「慣れ」が必要である。



研究室の書棚

授業以外にも、ゼミ旅行や史料調査、各種の研究会・勉強会などが活発に行われており、これらを介して多様な学習の機会を得ることができる。研究室全体の行事としては、4月の進入学生歓迎会、5月の卒論相談会やインスペクション（研究室蔵書の点検）、2月の卒業論文口述試験後の予餞会などがあり、ソフトボール大会を開催することもある。研究室メンバーの研究成果を発表する媒体として、史料の調査・研究を中心とする論文・翻刻・解説などで構成される『東京大学日本史学研究室紀要』（年1回刊）が、研究室の編集により刊行されている。

また、当研究室と歴史的に関係の深い部局として、東京大学史料編纂所がある。史料編纂所は、『大日本史料』『大日本古文書』などの史料集の編纂や広範な史料情報の集積・再編成・公開事業を行っている研究機関で、古代から近代初頭に至る膨大な史料を原本・影写本・写真版その他の形で所蔵している。当研究室の学生は、所定の手続きを行って、これらの史料を閲覧することができる。同所はまた、多くの優れた日本史研究

者を擁しており、当研究室の教員と相談の上で、同所の教員から指導を仰ぐこともできる。

#### (4) 進学から卒業まで

本研究室は、文学部での専門教育への導入として、**教養学部2年次**に「**日本史学研究入門**」という講義2つを毎年開いている。日本史学への進学希望者は、ぜひ受講して欲しい。

**3年**に進学すると、**高度の専門教育**を受けることになる。はじめから時代や分野を狭く限定せずに、他専攻の講義を受けたり複数のゼミに参加したりするなど、できるだけ幅広い学習の場をもつよう心がけてほしい。4年次には卒業論文作成に多くのエネルギーを投入することになるので、3年の間に多くの単位を取得しておくといい。

**4年**になると、**卒業論文の作成**が最重要課題となる。例年5月に研究室の卒論相談会が開かれ、このころを目途に専攻分野やテーマを確定し、研究計画を作成することになる。研究テーマの選定にあたっては、日本史学の範囲内で各自の自由が尊重される。演習などで日ごろから教員や先輩に接触して学習を積み重ねていけば、それほど無理なく自分のテーマを見つけることができよう。

卒論研究は、ほとんどの学生にとってはじめての、そしてもしかしたら人生において一度限りの、学術論文作成の機会となる。日本の歴史に埋もれた無限といってもよい研究対象＝史料・歴史資料と格闘し、先行研究との対話をくりかえし、自分だけの固有の論点を発見し、それを説得力ある論文に結晶させることができるかどうか、そこでは試される。こうした経験は、卒業後すぐ就職して社会に巣立つ学生にとっても、かけがえのない財産になるはずである。

卒業後も専門研究を続けたい学生は、試験を経て大学院に進学し、研究者や専門家などへの途をめざすことになる。例年、卒業生の多くは就職の途を選ぶ。就職先はマスコミ・出版・公務員・銀行・メーカー・コンサルタントなど多様であり、文学部全体の傾向と変わらない。

## 東洋史学

### ◇教員◇

教 授 佐川英治、吉澤誠一郎、守川知子  
准教授 島田竜登  
助 教 上出徳太郎

### ◇学生◇

学部 26名 修士課程 6名 博士課程 18名

東洋史学(アジア史)のおもしろさ、それはアジア社会がもつヴァイタリティー、それと表裏の急激な社会変化、そして今後の世界を変えていく可能性にある。

アジアの魅力は、アジア社会に一步でも足を踏み込んだ経験をもつ者であれば直ぐに感ずるであろう。喧噪と雑然さと色彩と匂いのあふれる街路、水と光と草原と雪と陽射しの極限から極限までのスペクトル、伝統と現代との整理のつかない混雑・・・そのいずれもが、人をアジア社会に引き寄せ、好奇心を煽り、不安感を増幅させ、そして知的冒険心をかき立てる。

東洋史学が対象とするこのようなアジア社会は、落ち着き安定したヨーロッパ社会とは異質なものである。したがって、その社会へのアプローチも、定まったものがあるわけではない。後に個別に紹介するように、佐川英治教授は中国古代文明とその東アジアへの影響について調査や研究を行っている。吉澤誠一郎教授は、近代中国を世界史のなかに位置付けることをめざし、都市や国際関係など多方面からの接近を試みている。また、島田竜登准教授はインドのスーラトや東南アジアのジャカルタなど、かつての国際貿易都市を調査し、南・東南アジアと世界がどのように結び付いていたのかを考察する。守川知子教授は、西アジアや中央アジアの聖者廟や墓地を中心に、宗教と社会の関係を捉え直そうとする。これらのフィールドに、スタッフはしばしば足を運び、場合によっては学生を引き連れて行く。まずアジア社会の中に入り、体験を積み、アジアを見る目を養っていくという方法の重要性を、東洋史学専修課程が認識しているからである。

もちろん、東京大学東洋史学専修課程が研究対象としているのは、激しい変化の中にあるアジアの現代だけではない。そこには、「史記の世界」から「コーランの世界」にいたるまでの多様な文明世界の、古代から現代にいたる歴史が含まれている。東アジア文明の担い手となった中国・朝鮮、いくつもの騎馬民族国家が興亡した中

中央アジア、仏教・ヒンドゥー・イスラーム文化が入り組む南アジア・東南アジア、そして古代オリエン特文明とイスラーム文明が交錯する西アジア、さらに地中海・イスラーム文明と緊密な交渉を保ってきた北アフリカ・イベリア半島……。これらの地域は、約5,000年にわたる長い歴史を持ち、膨大な人口と広大な領域を有している。この地域に生きる人々の生活と文化を知ることなしには、世界を理解することはできないはずである。

近代以降の歴史学は、「西洋」＝ヨーロッパを中心にして歴史の理論を組み立て、世界史の展開を理解しようとしてきた。実際、上述の多様な地域を「オリエン特」ないし「東方」として一括しようとする発想自体、ヨーロッパ社会の自己認識と表裏をなす西洋起源の考え方である。その意味では、「東洋史学」という枠組みは自明のものではない。「ヨーロッパの眼」でアジアの歴史を見ることは、単にヨーロッパのアジア観を歪めてきただけでなく、アジアのアジア観を歪めてきた。そうした見方に、大きな疑問を突きつけてきているのが近年非常に盛んになってきたグローバル・ヒストリーの潮流であるが、同じく東洋史学専修課程もそうした見方に安住していない。

では、どのような方法と態度がアジア研究、とりわけ東洋史学研究に必要なのだろうか。そこには、安心して頼れるような確立した「東洋史学研究の方法」があるわけではない。先に紹介したように、フィールドワークをはじめ、それぞれの研究者がそれぞれの方法を模索しており、そこに東洋史の面白さがあるともいえよう。

ただし、東京大学東洋史学専修課程には、長年の伝統が築きあげてきた幾つかの重要な特色がある。第一は、**方法的・理論的関心の強さ**である。本研究室の歴代の教員は、さまざまな隣接学問分野の成果を積極的に吸収し、自らの方法と視角を明示し、相互の批判をも含めて、学界の論争のなかで重要な一翼を担ってきた。したがって、本専修課程に進学する学生にも、方法や理論への強い関心をもつことが要求されるであろう。第二は、「**史料を正確に、厳密に読む**」という**実証的研究態度**である。先人の研究に安易によりかからず、史料や対象と直接に接しつつ研究方法の妥当性を常に吟味してゆくという態度が不可欠だと考えている。したがって、史料を正確に読むために、中国語、朝鮮語、ベトナム語やインドネシア語などの東南アジア諸語、ヒンディー語、タミル語などの南アジア諸語、アラビア語やペルシア語、トルコ語などの西アジア、中央アジア諸語などを習得することが推奨される。ヨーロッパ人の旅行記・伝記・報告書などや既存の研究を批判的に利用するために、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語などの読解力も必要であろう。もちろん、文学部にはこれらの言語を習得する授業が設けられている。したがって、各人の興味にしたがって必要な言語を学ぶことができる。第三は、**研究対象にタブーを設けていない**という点である。歴史学にはふさわしくないと勝手に思いこまれてきた、例

えば絵画、服飾、音楽、食のようなテーマであっても、それを対象として選ぶことを妨げることはなく、むしろ新しいテーマに積極的に挑む学生をおおいに歓迎する。もちろん、「人と物と思想の東西交流」やアフリカやオセアニアの歴史も東洋史の研究対象となる。また、現スタッフでは対応できない場合には、そのテーマにふさわしい研究者を紹介できる力量とつながりを東洋史学専修課程は有している。

東洋史学専修課程では、**卒業論文の作成**が重視される。それは、学生生活に全力を傾けて一つのテーマを追究した知的経験が、その後の人生に必要であり、また役立つと信ずるからである。東洋史学専修課程の教育の目的は、必ずしも、東洋史に関する広い知識を集積することのみにあるのではない。むしろ、歴史的情報にじかに接して自分のものの見方を自力で練り上げてゆく、そうした知的態度、知的誠実さを身につけることが重要であると考え。他人から与えられた器をそのまま使うのではなく、自分で鉱石を掘り出し、自分の工夫した方法で精錬し、鑄造していこう。その結果できた器が、たとえ先人のものと似たりよったりであっても、あるいは先人のそれより不格好であっても、その体験はきっと貴重な感動を与えてくれるにちがいないし、東洋史学専修課程は、そうした態度を高く評価する。

東洋史で卒業論文を書くのは難しいと思うかもしれない。しかし、卒業論文の評価の基準は単純である。自分で生の史料、情報に接し、既存の研究を批判的に検討することによって自分の頭で考え、そこから得られた観察を明晰な言葉で論理的にまとめているかどうか、という点が問われるだけである。真摯に取り組めば、必ず評価されるし、評価されてきた。また、進学時には進学生全員と先輩、教員が参加する研修旅行があり、卒論相談会も随時開催され、そうした学生の悩みに応える機会が設定されている。さらに、東洋史学専修課程のホームページでは、論文作成のためのマニュアルも提供している (<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~toyoshi/>)。

東洋史学専修課程の卒業生は、毎年三分の一前後が大学院へ進学するが、他の多くは企業に就職している。就職先は、大手の製造業、金融、商社、出版、マスコミなど、多様である。公務員を目指す者も少なくない。

大学院では、「アジア史」専門分野として、アジアからさらには世界全体を見渡しようとするような専門家の育成を目指す教育が行われている。

次に、**各教員について紹介**しておこう。スタッフは、中国史2名、南・東南アジア史1名、西・中央アジア史1名であるが、他に、韓国朝鮮文化研究室から1名が学部授業を兼担し、加えて毎年、学内外から数名の講師を招き、アジア全域をカバーしている。いずれも、それぞれ独自の領域で、既存の枠組にとらわれない歴史像を描き出そうとしてきた専門家ばかりである。東洋史学専修課程進学を志す学生諸君には、このような教員の研究の積み重ねと現在の興味とがにじみ出た講義や

演習から何かをつかみ取ってもらいたい。

各教員の研究の内容を西から順に紹介する。

**守川知子 教授**は、前近代および近代の西アジア史・中央アジア史、特にイラクやイランのシーア派聖地への巡礼や、ペルシア語の歴史叙述・学術史、アルメニア人などの宗教マイノリティ、文化交流といった社会史や文化史を専門としている。イスラームに限定されない西アジアの多様な宗教・言語環境に関心を持ち、近年では、近世期の旅行記や回想録といった一人称の叙述史料を用いた研究を行っている。主著に、『シーア派聖地参詣の研究』（京都大学学術出版会、2007年）、編著に『移動と交流の近世アジア史』（北海道大学出版会、2016年）、『都市からひもとく西アジア—歴史・社会・文化』（勉誠出版、2021年）、共編著に*Vestiges of the Razavi Shrine, Āthār al-Razavīya: a Catalogue of Endowments and Deeds to the Shrine of Imam Riza in Mashhad* (Tokyo: The Toyo Bunko, 2017)がある。

**島田竜登 准教授**は南アジア史・東南アジア史を担当している。16世紀から20世紀前半の経済史・貿易史が専門であり、とくにオランダ東インド会社文書などオランダ語史料を駆使して南アジア史や東南アジア史、さらには日本から東アフリカに至る海域アジアの諸相を明らかにし、そのアジア史的、世界史的な位置付けを試みている。近年では、バタヴィア（現ジャカルタ）やアユタヤなどのかつての国際貿易都市における異文化交流の歴史にも関心がある。著書としては、*The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the Eighteenth Century* (Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, 2006)がある。また、『アジア経済史研究入門』（共編、名古屋大学出版会、2015年）、『歴史に刻印されたメガシティ』（共編、東京大学出版会、2016年）、『グローバル経済史』（共著、放送大学教育振興会、2018年）、『1683年 近世世界の変容』（編著、山川出版社、2018年）、『1789年 自由を求める時代』（編著、山川出版社、2018年）などもある。さらに、歴史学の方法にも関心を寄せており、「歴史学はすでに「国境」をこえつつある—グローバル・ヒストリーと近代史研究のための覚書—」（『パブリック・ヒストリー』8、2011年）といった業績もある。くわえて、放送大学客員准教授として、「グローバル経済史」というテレビ講義を2024年度まで担当した。

**佐川英治 教授**は、中国古代史を専門とする。秦漢統一国家の成立から隋唐世界帝国が誕生するまでの中国と東アジアの歴史に関心をもつ。近年は、漢代の軍事制度、古代の碑文習慣、『三国志』の研究、北魏史、東アジアの都城の設計、東部ユーラシアの歴史などに取り組んでいる。主著に『中国古代都城の設計と思想』（勉誠出版、2016年）、『378年 失われた古代帝国の秩序』（共著、山川出版社、2018年）、『ビジュアル大図鑑 中国の歴史』（監修、東京書籍、2022年）、『君主号と歴史世界』（編著、山川出版社、2023年）、『ユーラシアのなかの中国史』（共著、放送大学教育振興

会、2026年)がある。

**吉澤誠一郎 教授**は、清代史・中国近現代史を担当している。主な研究領域は19世紀から20世紀前半の中国政治史、社会史、経済史、思想史であるが、とくに近代都市社会の形成を民衆運動、ナショナリズムなどの問題と関連づけながら描き出している。最近では、19世紀のアジア史を全体として鳥瞰する歴史叙述の方式、中国における近代歴史学の形成と日本との関係などについても研究を進めている。主著として、『天津の近代—清末都市における政治文化と社会統合』（名古屋大学出版会、2002年）、『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国をみる』（岩波書店、2003年）、『清朝と近代世界』（岩波新書、2010年）、『愛国とボイコット—近代中国の地域的文脈と対日関係』（名古屋大学出版会、2021年）がある。

東洋史学専修課程に進学しようとする学生諸君は、これらのスタッフによる講義や演習、先輩や同級生との討論などを通じ、歴史学には様々な方法があり、様々なものの見方があるのだ、ということに実感をもって気付いてほしい。対象地域を深く研究することは、同時に、自分のものの見方を確立してゆく過程でもある。多様な視角、多様な方法、相互の対話を楽しみつつ、新鮮な感覚とたくましい意欲をもって、自分の個性的なアプローチを追求することを期待したい。

また、学部時代は、受け身の学習から抜け出し、研究上で自らの問題を見つけ出すとともに、これからの長い人生についての重要な選択を迫られる大切な時期でもある。コーチ役・助言者としての教員、先輩、同級生の集まる研究室での交流は、互いに大きな刺激をもたらすであろう。研究室には、アジア各地からの留学生も少なくない。本郷への進学後は、積極的に研究室に顔を出し、新しい学生生活の拠点としてほしい。



香港特別行政区 南丫島の天后廟  
(2024年3月吉澤誠一郎教授撮影)



スウェーデン東インド会社の元の建物・ヨーテボリ市  
(2011年7月吉澤誠一郎教授撮影)

## 西洋史学

### ◇教員◇

教 授 長井伸仁、勝田俊輔、池田嘉郎、佐藤昇  
准 教 授 北村陽子、菊地重仁  
助 教 内川勇海

### ◇学生◇

学部 55名 修士課程 8名 博士課程 17名

### (1) はじめに

グローバル化の波にさらされ、変化し続ける現代社会においては、短期的な現状分析ではなく、過去から現在までを長期的・複眼的に見通す歴史学の思考法こそが、錯綜する情報を的確に選り分け、未来を見据えた判断を可能とする。すなわち我々の目指す歴史学とは、悠久の時の流れの中に揺るぎない視座を確保する営みに他ならない。

西洋史学専修課程における研究と教育は、時代的には古代から現代まで、地理的にはヨーロッパを中心としながら、南北アメリカやアジア・アフリカとの関係も射程におさめる。西洋史学専修課程の専任の教員（教授、准教授）は現在6名であり、それぞれの研究分野を代表する歴史家である。授業は、教員各々の専門研究にもとづいた「**特殊講義**」と「**演習（ゼミ）**」が中心となる。前者は教員が講義する形式で授業が行われ、後者は史料や文献の講読、および参加者の研究発表が中心となる。また教養課程2年生を対象に、必修の講義として「**西洋史学研究入門**」および「**史学概論**」を開講している。2023年度からは、1・2年生向けに教養志向の講義として「**西洋史学へのいざない**」も開設されている。

西洋史学の学生各自の研鑽は最終的に「**卒業論文**」にまとめられるが、その指導のために、教員による「**卒論ガイダンス**」および博士課程の大学院生（TA：ティーチング・アシスタント）が主催する「サブゼミ」も実施される。このように授業以外の場でも、最新の知識や方法論について助言できる体制が整っているが、西洋史学は学問の自由と自主性を重んずる。学生は機会を捉えて積極的に教員や大学院生などから話を聞き、主体的に自らの学習・研究に取り組むことが求められる。

## (2) 研究室について

西洋史学は、文学部屈指の大所帯である。2026年度に在籍する学生の数は、大学院生をふくめて合計で80名になる。大学院生の存在感が大きいことも西洋史学の特色であり、教育とならんで研究にも大きな比重がかけられている。助言を与えてくれる先輩には事欠かないだろう（常に10名前後の大学院生や修士生がアメリカやヨーロッパ各地に留学していることも研究室の特色である）。

法文2号館1階、総合図書館に最も近い一角に西洋史学研究室があり、基本的に出入り自由である。入口近くには新着雑誌の棚があり、その右手で助教、事務補佐の嘱託が勤務している。助教は若手研究者であると同時に学生と教員の重要な仲介者であり、研究室事務をとりまとめる。奥の談話室には、辞書や項目事典をふくむ様々な参考図書が配架されている。西洋史学の対象範囲の広さを反映して、英・独・仏はもちろん露・西・伊・羅・希など、西洋諸言語の図書が四方の壁を埋めている。

進学後は教室や図書館に通うのと同じように、研究室に顔を出すことが望ましい。授業の予習や調べ物をすることもできるし、履修のコツや教職、卒論、サブゼミなど、様々な情報の交換もなされる。飲食も自由である。文字通りのサロンである談話室を大いに活用し、研究室で同級生、先輩学生、助教等と交流することで、学生生活を豊かなものにできるだろう。

また、研究室旅行も重要な伝統行事の一つである。学部4年生が幹事となり、5月の中旬に2泊3日の日程で開催される。近年では、箱根（2014年）、伊豆熱川（2015年）、伊豆長岡（2016年）、下田（2017年）、信州上田（2018年）、鴨川（2019年）、伊豆高原（2023年）、秩父（2024年）、伊東（2025年）を訪れている。教員全員と大学院生の有志も参加する。例年、夕食後は教員を囲んで、あるいは学生同士で立場や年齢の違いをこえた熱い議論が交わされる。この旅行を通じてはじめて「研究室の一員になった」という実感を抱く3年生も多いことだろう。

このほか、研究室では進学者歓迎会や卒業祝賀会が開かれ、またゼミごとに交流会・懇親会が開かれるなど、教員・学生間の交流がさまざまな機会で行われていることも、西洋史学の特色の一つである。

## (3) 専任教員の紹介

**長井伸仁 教授**は、フランス近現代史を専門とし、パリの政治史・社会史、近代フランスにおけるカトリシズム、歴史意識と政治文化などについての研究を行っている。著書に、*Les conseillers municipaux de Paris sous la Troisième République (1871-1914)* (2002年)、『歴史がつくった偉人たち—近代フランスとパ

ンテオンー』(2007年)、『近代パリの社会と政治—都市の日常を探る—』(2022年)がある。

**勝田俊輔 教授**は、**近代のブリテン諸島**(グレートブリテンとアイルランド)を専門とし、とくにアイルランドにおける農民運動やダブリン都市史、連合王国の国制史などに着目して研究を重ねている。また近年、近世・近代のヨーロッパにおけるコスモポリタニズムの研究も行っている。著書に『アイルランド大飢饉—ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル』(共編著、2016年)、*Rockites, Magistrates and Parliamentarians: Governance and Disturbances in Pre-Famine Rural Munster* (2017)などがある。

**池田嘉郎 教授**は、**ロシア近現代史**を専門とし、第一次世界大戦からスターリン時代までの国制史を、帝国論や政治文化論を取り入れながら研究している。著書に『革命ロシアの共和国とネ이션 (山川歴史モノグラフ)』(2007年)、『ロシア革命』(2017年)、編著に『第一次世界大戦と帝国の遺産』(2014年)、『国制史は躍動する』(共編著、2015年)がある。

**佐藤昇 教授**は、**古代ギリシア史**、とくに紀元前5～4世紀のアテナイ政治社会史や、古典期からヘレニズム期にかけての東地中海国際関係史を専門とする。主著に『民主政アテナイの賄賂言説 (山川歴史モノグラフ)』(2008年)、編著に『「英雄伝」の挑戦—新たなプルタルコス像に迫る』(2019年)がある。

**菊地重仁 准教授**は、**西欧中世史**、とくにフランク王国史を専門とし、カロリング朝期の政治文化、統治構造、修道制などを、文書形式学・書冊学的観点も取り入れつつ研究している。著書に*Herrschaft, Delegation und Kommunikation in der Karolingerzeit. Untersuchungen zu den Missi dominici (751-888)* (2021年)がある。

**北村陽子 准教授**は、**ドイツ近現代史**を専門とし、とくに二つの世界大戦期の戦争犠牲者(戦争障害者、戦没兵士遺族)をめぐる社会史を、ジェンダー関係論や表象文化論の視角を取り入れて研究を進めている。著書に『戦争障害者の社会史—20世紀ドイツの経験と福祉国家』(2021年)、編著に『職業教育とジェンダーの比較社会史—近現代における女性と戦争障害者への就労支援』(2025年)がある。

大学院への進学を希望する学生には、各教員の著書をはじめ、西洋史に関する書物を繙き、西洋史学の学問的雰囲気を感じてもらうことを勧めたい。『岩波講座 世界歴史』(新シリーズ)や、近藤和彦(編)『西洋世界の歴史』(山川出版社)、『世界の歴史』全30巻(中央公論新社)、『世界歴史大系』(山川出版社)なども有益であろう。

専任教員以外にも、他大学から非常勤講師を招き、それぞれの専門に即した授

業を担当していただいている。2026年度には4名の専門家による中世ビザンツ史、近世プロイセン史、近代ロシア史、現代ドイツ史を主題とする講義が開講される。

#### (4) 進学のために

西洋史学専修課程への進学希望者は、教養学部時代から多くの読書体験を重ね、知的関心を広げておいてほしい。ただし、ただの歴史ファン、もしくはクイズ型の知識のみに偏った歴史マニアでは、専門的な歴史研究はおぼつかない。専門研究のためには、まずは歴史関係の講座やシリーズ、新書を含む単行本はもちろん、人文・社会科学の基本文献や話題の書物を読んでおくのがよいだろう。古典に属する文芸作品も有益である。こうした幅広い読書によって、進学するまでに、研究したい時代・地域・分野をおおまかに見つけ出せるとよいが、しかしそれにあまり固執する必要はない。研究テーマは進学後に変更されることも多い。むしろ専門外の知識を積み重ねることを通じて、専門研究がもつ意味合いを広い視野から眺め、教養と専門とを知的に往復できるようにすることが肝要である。

第二に、**外国語**は西洋史学にとって生命線とでもいうべき手段である。教養学部時代にじっくりと勉強しておいてほしい。すくなくとも、英語と第二外国語を正確に「読む」力をしっかりと身につけておくことが不可欠である。その場合、「読んだ」内容を正確に表現することも求められるので、日本語の表現能力も軽視すべきではない。なお、古代史を志す場合にはギリシア語・ラテン語を、中世史ではラテン語あるいはギリシア語を、また近現代史ではそれに対応する地域の言語の学習を始めておくことが望ましい。

第三に、当専修課程に限ったことではないが、人文系の学問にあっても電子メディア・デジタルツールの利用は必要不可欠である。電子データ解析に熟達すると、従来の歴史学ではみえなかった新たな問題や解法がひらけてくることがある。**デジタル技術**の基本は早めに体得しておいてほしい。

#### (5) 卒業後

卒業生は、マスコミ・出版、金融・保険、サービス、製造、商社など、各種の一般企業、国家公務員、地方公務員、高等学校の教員など、幅広い分野で活躍している。歴史的視野を備えた人材を育成し、各界に送り出すことも、西洋史学専修課程の大切な役目である。

また例年、東京大学大学院人文社会系研究科(西洋史学専門分野)をはじめ、国内及び海外(欧米)の大学院に進学を希望する者が少なくない。進学を考えている者は、教員や大学院生、助教と早くから接触し、研究や生活などについて話を聞くことが望ましい。自分の道を発見する機会となるだろう。昨今では、人文系の研究者を志望する人たちの将来について悲観的な見解がメディアを賑わせているが、こうした情報にはかなりの偏りも見られる。大学院生には各種の奨学金が用意されているし、能力と努力によって道はひらかれることも付言しておきたい。

## 考古学

### ◇教員◇

教授 福田正宏  
准教授 根岸洋、森先一貴  
助教 柴原聡一郎

### ◇学生◇

学部 20名 修士課程 6名 博士課程 9名

### (1) 考古学とは

考古学は、遺跡や遺構、遺物の研究によって人類の歴史を明らかにする学問です。文献をつうじて歴史を明らかにする文献史学とともに、歴史学の一翼を担っています。文字のない時代や地域の研究は、考古学の独壇場といえます。では、文字のある時代は考古学の守備範囲でないかといえば、そうではありません。たとえば、古代国家の中枢であった藤原宮跡や平城宮跡から発掘された多量の木簡は、編纂された文献史料からは知り得ない生々しい都の様子を明らかにしました。東京大学本郷キャンパス構内でも江戸時代の加賀藩上屋敷に関連する遺構群が明らかになり、考古資料・文献史料の双方から近世大名屋敷のあり様を具体的に知ることに成功しています。エジプトのピラミッドもヒエログリフという文字の時代ですが、考古学の研究対象でもあります。

ここから分かるように、考古学が文献史学と大きく異なる点とは「発掘調査」です。フィールドにおいて発掘調査を通じて遺構や遺物といった研究資料を獲得し、分析することこそ、考古学の学問的な固有性があるのです。

考古学が扱う分野は多岐にわたっています。遺跡周辺の古環境と人の関係（環境考古学）、動物と人の関係（動物考古学）、儀礼や祭祀の意味や機能（祭祀考古学）など、対象に由来しその名を冠した分野が多く、民族誌や伝統的生活を送る社会に分け入って考古事象と比較研究する民族考古学もあります。また、遺跡や遺物の年代決定には考古学独自の方法に加え、数値年代を得るための放射性炭素年代測定など自然科学的方法があります。このほか、古人骨などのDNA分析にもとづく人類拡散の歴史や人間社会の親族組織の研究の進展はめざましく、炭素・窒素同位体比分析から過去の人々の食性パターンを評価する考古化学的研究もあります。今日ではこれらの学問分野との連携が必須となっており、考古学は文系の

学間にとどまらない学際的な文理融合の学という側面をもちます。

考古学の裾野がかくも広いのは、考古学が過去の人類活動全般を対象としているからです。私たちを含む人類は、数百万年という長い時間をかけて世界中に拡散し、各地で生物、環境、気候との関係のなかで、多彩な文化、文明を築きあげてきました。いま考古学は、遺跡を結節点として様々な分野を統合する基盤を提供し、人類が歩んできた歴史の深層にせまる中心的役割を担っているとと言えます。

## (2) 何を学ぶのか

**必修科目** 考古学専修課程の必修科目（括弧内は単位数）は、史学概論（2）、考古学概論（4）、考古学特殊講義（16）、考古学演習（6）、野外考古学（4）、卒業論文（12）です。

**発掘調査** 考古学独自の方法である発掘調査を学ぶ科目が、「野外考古学Ⅰ・Ⅱ」です。発掘は遺跡の掘削をおこなう以上、ある種の破壊をともしません。だからこそ遺跡の発掘には慎重に当たらなくてはなりませんし、発掘の過程で得られた成果を厳密に記録する必要があります。

また、発掘調査に際しては遺跡の位置や地形を正確に把握するとともに、検出遺構や出土遺物を正確に記録するための測量が必要ですから、測量の原理や測量機器の使用に慣れる必要があります。発掘調査を進めるにあたって、もちろん闇雲に掘ればよいわけではありません。周辺の地質条件を把握し、遺構や遺物が包含される地層の堆積を精査しながら、慎重に掘り下げます。その間、図面や写真、三次元情報などの記録も進めます。調査後はそうした記録を整理し、出土した遺物の水洗いや台帳作成を済ませ、接合して実測図や写真、拓本をとり、必要な場合には三次元計測をします。これらの調査研究成果を総括した発掘調査報告書を刊行するという流れを経て、発掘調査は終了します。発掘調査によって得られる記録の全てが、人類の過去を調べるための大切なデータとなるのです。

野外考古学Ⅰは、野外調査の基礎的技術を本郷キャンパス内で学びます。その後履修する野外考古学Ⅱは、北海道北見市常呂町のサロマ湖畔にある人文社会系研究科附属「北海文化研究常呂実習施設」で実施されます。この実習では教員と大学院生、学生が宿舎に滞在し、本物の遺跡で発掘調査や整理作業を（ほとんどの学生は）はじめて経験します。机上の学習だけでは知り得ないフィールド調査の楽しさや調査技術の奥深さにふれる機会にもなり、打ち解けた雰囲気ですぐ立ちの垣根を取り払って日頃抱いている疑問をぶつける機会もあるでしょう。なお、学生諸君が慣れない環境でも日々の生活を快適にすごせるよう、宿舎には各種設備が整えられています。日本の大学のなかでは他に類をみない恵まれた環境で発掘実習に参加することができますので、安心して楽しく学んでほしいと思います。

**研究方法** さて、発掘調査した遺構や遺物が、そのまま歴史を語ってくれるわけではありません。考古学の方法論によって整然と分類、分析されて学術的な意味での歴史資料になります。なかでも最も基礎となる型式学は、モノ遺構や遺物がもつ年代的、地域的特徴を捉えてその変化や関係を明らかにするものです。それとともに、遺跡の堆積プロセスを理解しながら遺跡形成過程を明らかにし、型式の組み合わせやその新旧関係を説明することも大切な手続きです。こうした基礎的な理解のうえにたって、今は主人をうしなつたモノから過去の人間行動を読み解くことに考古学の醍醐味があります。しかし、「この遺物は何につかわれたのだろうか？」と悩むだけでは、過去の行動は見えてきません。今は見るができない「行動とモノの関係」を知る鍵となるのが、さきにも触れた民族考古学や、具体的な復元実験にもとづく実験考古学なのです。遺物や遺構の背後にある使用と結果の因果関係をモデル化することで、過去を解釈していくことが可能になります。歴史時代では文献・絵画史料が同種の役割を果たしています。このほか、地質学・堆積学・古生態学・古生物学などの諸分野と連携して実施される古環境の理解も不可欠です。もちろんこれで万全というわけではありませんが、できる限り多くの正確な証拠から、現在もっとも蓋然性が高いといえる人類史を構築しようとするのが現代の考古学の目標なのです。

**講義・演習** 「考古学特殊講義」では、こうした考古学の方法論を中心にさまざまなテーマについて講義形式で、「考古学演習」ではすぐれた内外の文献にもとづいて方法論およびその具体的な実践方法を演習形式で学びます。守備範囲の広い考古学のあらゆる理論と方法論をすべて教えることは不可能ですが、書籍などを通じて基礎的な知識を一通り身につけてもらえるように工夫しています。専任教員だけではカバーできない専門的な知識についても、学内外から専門家を非常勤講師としてお招きして、幅広い分野を学ぶことができる場を提供しています。

**卒業論文** 学部3年生までに基礎を身につけたあと、4年生には卒業論文という初めての大きな仕事がまっています。学生自身が選んだテーマを深く研究して論文にします。研究史をよく調べ、課題・疑問を見つけて論文の目的を設定し、課題解決に必要な資料の収集と分析方法をさだめ、分析結果に基づく考察を加えて結論を導くという作業は時間がかかり、大変です。それでもこの作業は四年間の学業の集大成です。今まで身につけた知識、論理的思考法、それらを総動員した努力の結晶として、必ず今後の人生の財産になります。研究職を希望するにせよ就職を希望するにせよ、この経験はとくに大切にしてほしいと思います。

**大学外での学び** 大学の外にも考古学を学ぶ場があります。考古学研究室の教員は全員フィールド調査を行っており、大学院生を中心に希望者が参加しています。海外を含め、各地で行われている発掘調査に、教員や先輩の紹介で参加する人も

います。他大学や博物館、あるいは埋蔵文化財センターなどで有志が集まり特定のテーマで開かれるシンポジウムやワークショップに出かけ、現在学界でどのようなことが議論されているのかを自分で把握することも大切です。各地の博物館や資料館で、それまでに学んで関心を持った遺物を実際に見学して、これまでになかった新たな研究を模索することも有意義でしょう。考古学はフィールドと実物の学です。実際の遺跡や遺物がいかに雄弁であるかを実感してください。

### (3) 教員の紹介

**福田正宏 教授**は、シベリア・ロシア極東・日本列島における土器出現期以降の先史文化全般について、環境への適応という視点から復元を試みています。広く東北アジア史のなかで日本列島の先史を捉える視点を重視しています。

**根岸洋 准教授**は、縄文時代から弥生時代への移行を専門分野とし、その過程を人類史の中に位置付ける研究を志向しています。また、先史時代の文化・社会の解釈に役立てるため、民族考古学的研究にも取り組んでいます。

**森先一貴 准教授**は、東アジアの旧石器時代を専門として、国内各地とモンゴルでフィールド調査を行ない、人類がユーラシアから日本列島に進出した過程を研究しています。先史考古学への水中考古学的手法の導入にも取り組んでいます。

**柴原聡一郎 助教**は古墳時代の考古学を専門とし、古墳の三次元測量を主な手法として、設計・築造技術の解明に取り組んでいます。

このほか、当専修課程の専任教員以外にも、北海道北見市常呂町にある**常呂実習施設**で発掘実習（「野外考古学Ⅱ」）を指導する熊木俊朗教授は、北海道をおもなフィールドとしつつも周辺の北方古代文化を視野に入れ、アイヌ文化の成立過程を追究しています。

**総合研究博物館**には西アジアの先史考古学を専門とする門脇誠二教授、年代測定や同位体分析を専門とする考古化学の米田穰教授、人類化石の形態分析からアジアの人類史を研究する人類進化学の海部陽介教授がいます。学内には大学施設の新設等に伴う事前の発掘調査を担当する**埋蔵文化財調査室**がありますが、この調査室には先史時代から江戸時代まで埋蔵文化財調査に精通した尾田識好准教授が所属し、「野外考古学Ⅰ」を通して野外調査に必要な技術の手ほどきをしてくれます。また、このような方々は卒業論文などの相談にものってくれます。

### (4) 進学を希望する諸君へ

考古学は広義の歴史学の一分野ですから、歴史関係の講義はできるだけ受講しておいてほしいと思います。とくに歴史時代の考古学を専攻するためには、文献史学の素養を身につけておく必要があります。先史考古学では人類学や生態学の

知識が必要です。外国考古学を志す学生は、外国語がすべての基礎になりますので、とくにその習得に努めてください。もちろん、日本考古学を目指す場合も、方法論を学ぶために外国語文献講読を進めることは必須です。

考古学に進学しようとする学生は、駒場Aセメスターに、必修科目となっている「**考古学概論 I**」、「**史学概論**」の授業を必ずとるように注意してください。「考古学概論 I」は本郷で開講されていますが、「史学概論」は駒場で開講されますので、未履修の場合は本郷進学後も駒場に通う必要があります。同じく駒場Aセメスターに開講される「**人類学概説**」も、必修科目ではありませんが考古学研究の基礎として重要なので、進学予定者にはできるだけ受講することを勧めます。

### (5) 卒業後の進路

考古学専修課程のカリキュラムは、考古学研究の専門家を養成することを目的として組み立てられています。過去に生きた人間の学を通じて人間社会や文化のあり方について理解を深めること、また考古学特有の論理や思考法を駆使して卒業論文を計画し、文章を練り上げていくプロセス、そして座学のみでは得られない常呂での活動やチームワークが求められる発掘調査の経験は、考古学に関わる仕事を選択した場合はもちろんのこと、考古学と直接関わらない進路を選んだとしても、必ず糧になるはずです。

学生は卒業後、引き続き研究を続けようとする場合は大学院を目指し、そうでない場合は一般就職することになるでしょう。進学と就職についての近年の比率は1対3ほどです。就職先は、官公庁、銀行、商社、運輸、製造、情報、マスコミ関係、国連専門機関などと幅広いことが特徴です。

修士課程進学者は、修了後一般就職する場合もあるわけですが、その多くは博士課程に進学し、研究を続けるために大学や博物館、研究機関への就職をめざすこととなります。もちろん研究職への就職が容易でないことは考古学も例外ではありません。ただし、考古学の場合は都道府県や市町村など地方公共団体にある埋蔵文化財保護部局が、専門を活かせる就職口を全国各地で提供しています。この場合は、学部卒ないしは修士課程修了の段階でも就職することができます。

考古学研究室では独自のホームページ (<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/archaeology/>) を開設していますので、ぜひ参考にしてください。また、研究室を訪問して先輩たちの話を聞くことも実情を知るうえでは良い方法かもしれません。法文2号館の地下にある学生室も、一度訪ねてみてはいかがでしょうか。

# 美術史学

## ◇教員◇

教授 秋山聰、高岸輝、増記隆介

## ◇学生◇

学部 25名 修士課程 13名 博士課程 11名

### (1) 美術史学へのいざない

形あるもの、眼に見える世界への飽くなき追究、それが美術史学です。芸術の研究は文学部の重要な使命のひとつですが、なかでも視覚が捉える色と形、そこに宿る美を具体的な造形に即し、歴史的に考究する点に美術史学の特徴があります。

研究対象となるのは、古典的な芸術作品としての絵画・彫刻・建築、実用と美を兼ね備えた工芸やデザインだけでなく、写真・映像・インスタレーションなど現代アートの領域まで含みます。扱う地域も日本、アジア各地、中近東、欧米まで広がっています。

美術史は、高校までほとんど教育が行われていないため親近感が湧きにくいと思います。しかし、コンピュータ処理による画像や情報通信端末、AIの急速な進展など、視覚表現の技術と可能性が日進月歩で進化する現代において、それらのリテラシーに長じ、容易に使いこなしている皆さんにとって、ビジュアルな学問である美術史は決して敷居の高い分野ではありません。

必要なのは視覚的な美に対する強い関心、ものを作り出す人間の営みに対する敬意、創造という行為への参加意欲。美術史学は、机上と造形が所在する現場とを往還する、アクティブな学問です。視覚で世界を認識する感性と、遺された作品や文献の断片をつなぎ合わせて歴史の潮流を把握する知性、両者のハイブリッドが重要です。

美術やデザインに強く惹かれる人、世界中を旅することに憧れる人、美術館・博物館での学芸員や文化行政に携わりたい人、あるいは自ら表現者たらんと欲する人、そんな人々を歓迎します。最高の作品を体験し、鍛え上げられた眼と感性と知性は、将来、どの分野に進もうとも強い武器になるはずです。

## (2) 美術史学研究室の人々

美術史学研究室は赤門のすぐ近く、赤門総合研究棟の7階にあり、3名の専任教員が所属しています。

**秋山聰 教授**は、ドイツ・ルネサンスの巨匠デューラーなど**西洋美術史**が専門。現在は各地のキリスト教会に秘蔵される聖遺物（キリストや聖人にまつわる遺品）の研究でも知られ、宝物と美術の境界、宗教儀礼と美術の関係、東西の聖地や宗教文化の比較へと広がっています。『天才と凡才の時代—ルネサンス芸術家奇譚』（芸術新聞社、2018年）、『聖遺物崇敬の心性史—西洋中世の聖性と造形』（講談社学術文庫、2018年）、入門書として『西洋美術史（美術出版ライブラリー—歴史編）』（共同監修、美術出版社、2021年）を参照するとよいでしょう。

**高岸輝 教授**は、**中世の日本美術史**が専門。絵師に活動を支える社会基盤や権力との関係を軸に、絵巻を中心とする国内外の作品調査を進めています。著書に『日本美術史（美術出版ライブラリー—歴史編）』（共同監修、美術出版社、2014年）、『中世やまと絵史論』（吉川弘文館、2020年）、『ボストン美術館日本美術総合調査図録』（共同監修、中央公論美術出版、2022年）があります。また、人文情報学（デジタル・ヒューマニティーズ）の手法を日本絵画の研究に導入する方法についても共同研究を進めています。

**増記隆介 教授**は、**古代の日本美術史**が専門。日本における仏教絵画の形成過程を広く東アジアの文化交流という視野から描き出した『院政期仏画と唐宋絵画』（吉川弘文館、2015年）のほか、『天皇の美術史』1（古代国家と仏教美術）（編著、吉川弘文館、2018年）、『古代絵画史研究』（吉川弘文館、2026年）があります。文化庁での勤務経験をふまえ、文化財の修理や保護についても精通しています。

加えて、学内から5名の教員が美術史学に関する講義・演習や論文指導に当たっており、地域や時代を幅広くカバーしているという点で国内随一の充実度を誇ります。文学部次世代人文学開発センターの**芳賀京子教授**は、地中海地域の古代美術史が専門。近年の著書に『西洋美術の歴史』1（古代：ギリシアとローマ美の曙光）（中央公論新社、2017年）があります。古代彫刻の3D計測・分析やVR（バーチャルリアリティ）技術を活用した展覧会会場の撮影などにも取り組んでいます。

東洋文化研究所の**柗屋友子教授**はイスラーム美術史の専門で、東洋と西洋をつなぐ美術の交流についても論じおり、著書に『イスラームの写本絵画』（名古屋大学出版会、2014年）があります。同研究所の**板倉聖哲教授**・**塚本麿充教授**は中国の絵画史が専門。東アジアや欧米を中心に作品調査を進め、『中国絵画総合図録』（世界中に所在する中国絵画を総覧する巨大プロジェクト）の編集事業を継続し、『アジア仏教美術論集』（2017年～、中央公論美術出版）各巻の責任編集を務めるなど、中国美術史の研究拠点を形成しています。学芸

員の経験を生かし、国内の展覧会企画にも数多くかかわっています。

総合文化研究科の**松井裕美准教授**は、フランス近現代美術が専門。『キュビズム芸術史 20世紀西洋美術と新しい〈現実〉』（名古屋大学出版会、2019年）、『もっと知りたいキュビズム』（東京美術、2023年）など、20世紀に起こった視覚の革新を精力的に研究しています。

授業は上記のほか、学外から非常勤講師を招き、各分野の最先端を語っていただいています。本年度の開講科目は下記になります（\*は文化交流特殊講義）。

奥健夫 講師（武蔵野美術大学教授）	「日本副刻史概説 特に平安後期から鎌倉時代まで」
児嶋由枝 講師（早稲田大学教授）	「西洋中近世美術の諸問題」
佐藤直樹 講師（東京藝術大学教授）	「西洋美術史におけるラファエッロ主義研究」
中村るい 講師（東海大学教授）	「ギリシャ絵画における神話と宗教」*
奈良澤由美 講師（城西大学教授）	「装飾を考える 古代・中世地中海の装飾史」*
菅原真弓 講師（大阪公立大学教授）	「文化資源としての『浮世絵』」（文化資源学特殊講義）
朝賀浩 講師（皇居三の丸尚蔵館）	「博物館資料論（美術工芸品）」

### （3）美術史学専修課程での日々

美術史学研究室に進学すると、Sセメスターに3～4泊の関西見学旅行が行われます。「旅行ゼミ」と通称される授業で、3年に進学した学生は各自が担当する作品を決め、それに関する研究をまとめたうえで、美術館・博物館や寺社の場で口頭発表を行うという内容です。美術史学の入り口となる授業であり、偶然ここで担当した作品に惹かれて、そのまま一生の研究テーマとする人もいます。図録に掲載された写真やネット上の画像と、現場で観る作品とは印象が大きく異なります。机上の印刷物や講義で映写される写真と、本物から受ける感覚との差。それを認識し、補正し続けることが研究には必須です。

語学についても、駒場時代に引き続き研鑽を重ねる必要があります。日本・東洋美術史を目指すなら、古文、漢文、くずし字、中国語などを読む必要があり、西洋美術史であれば、英語、フランス語、ドイツ語のほか、研究対象によって古代ギリシア語、ラテン語、イタリア語、オランダ語、スペイン語などに挑戦することになるかもしれません。

講義や演習に関しては、全てに出席することは不可能なほど幅広く設定されていますので、3年生のうち、日本、東洋、西洋とバランスよく受講することをお勧めします。少

人数で開催される演習は、外国語文献の講読だけでなく、一枚のスライドを巡って活発な議論が展開される切磋琢磨の場です。また、大学院進学を少しでも考えている人は、学芸員資格の取得についても検討する必要があるでしょう。

やがて、4年生の6月になると卒論構想発表会が開催され、教員と同級生の前で卒業論文の構想を発表することになります。卒論テーマの設定や論文執筆については、伝統的に学生の自主性を尊重する形をとっています。ですが、放任というわけではありませんので、教員や先輩を積極的に活用し、美術史学の方法論と研究史を着実に踏まえた、力作を期待しています。扱う作品は著名なものほど謎に満ち、研究論文も多いため、知的訓練としての卒論には好適です。

#### (4) 研究室の外へ

東京大学で学ぶということは、首都圏をキャンパスとすることにほかなりません。東京という都市は、美術館・博物館の数やコレクションの質、世界中から巡回してくる展覧会の内容において、ニューヨーク・パリ・ロンドンに匹敵します。美術史を学ぶ上で、これほど有利な位置はありません。本郷キャンパスから徒歩20分以内で、上野公園のミュージアム群（東京国立博物館、国立西洋美術館、東京都美術館、東京藝術大学大学美術館など）にアクセスでき、東京国立博物館、国立西洋美術館では、東大の学生証を提示すれば常設展が無料（特別展は割引）で観覧できることも憶えておいてください。東京国立博物館資料館、東京文化財研究所では、写真や図書の閲覧を行うことも可能です。本郷から電車で30分以内ということになると、訪問できる美術館は無数といってよいでしょう。

海外での調査や留学など、遠方に所在する美術作品を現地に足を運んで見ることの感動は何ものにも代えがたく、研究の原動力となります。一方で、国内外の美術館・博物館・図書館では、作品の高精細デジタル画像のインターネット公開が急速に進んでいます。実作品をひとつひとつ手に取って分析するという古典的な研究手法と、デジタル画像やテキストを駆使したデータ処理による作品群の総合的な把握とを両立させることによって、これからの美術史は新たな展開を見せていくことになるはずです。

#### (5) 文化を支える仕事

卒業生の進路はさまざまです。学部卒に関しては、銀行、証券、商社、メーカー、情報通信、公務員など幅広く、新聞社の文化事業部や出版社など美術史を学んだことを直接生かせる就職をする人もいます。社会のなかで、美術や文化を支える人材として、活躍することを願っています。

大学院は、年度によって増減があるものの学内外からの志望者を集めています。進学

ためには充実した卒業論文を提出、外国語2科目と日本・東洋・西洋美術史についての専門試験からなる1次試験に合格し、卒業論文に基づく口述試験を突破する必要があります。修士論文は、専門について深く掘り下げ、作品そのものの調査や作家に関する一次資料を実証的に考究し、学術論文として公開できる水準が理想です。優れた修士論文の場合、博士課程進学後に学会発表や学会雑誌への投稿を勧めており、査読を通過して論文が公開されると研究者への第一歩を踏み出したことになります。その後は、博士論文の執筆に向けての研究ということになりますが、外国の美術を扱う場合、博士課程の時点で留学する人も多く、留学先で博士号を取得するケースもあります。修士課程修了後、あるいは博士課程在籍の段階で、学芸員に採用される人もコンスタントに出ています。

駅や街角で見かける美術展覧会のポスターの陰には、学芸員がいます。華やかな展覧会の裏側で、研究、文化財の修理や保存、社会人や青少年に対する教育普及などが地道に行われています。美術史学研究室の教員は、展覧会の企画・監修、展示作品の調査、カタログの執筆、講演会の講師といった形で、ミュージアムの現場、そして学芸員と密接に交流しながら、研究教育活動を進めています。

学芸員を目指すにせよ、大学教員を目指すにせよ、研究職への就職は決して広き門ではありませんが、美に対する情熱を維持しつつ、じっくり腰を据えて研究に励むことで、おのずと道が開けてくるものと思います。卒業生たちの活躍は、明治以来の美術史学を牽引するとともに、我が国の美術の振興に大きく寄与しています。

## (6) 美術という新しい視点を獲得すること

美術は、個人の「趣味」の領域に留まるものではありません。社会が高度に成熟する一方で、戦争・貧困・疫病・差別・環境問題など人類共通の課題は複雑化しながら広がっています。現代を生きるアーティストたちは、これら諸問題に対し表現を通じて対峙しています。美術史学もまた、文明の発生以来、美術がいかに社会と関わり続けてきたのかを長期的に把握することを通じ、現代の位置を理解し、未来を展望することを目指すものです。大学で、美術、芸術を専門的に追究することは、これまでの経験とは異なる角度から世界を俯瞰する、新たな視点を獲得することにほかなりません。

このほか、研究室の詳しい情報は、ホームページ (<https://arthistory.l.u-tokyo.ac.jp/>) も参照してください。

## 言語学

### ◇教員◇

教授 小林正人  
准教授 長屋尚典、平沢慎也  
助教 松田俊介

### ◇学生◇

学部 73名 修士課程 15名 博士課程 15名

### (1) 言語学専修課程で学ぶこと

言語学専修課程では「言語」を研究対象とします。ではそれが、同じく言語を対象とする、文学的あるいは哲学的な研究とどう違うかということ、言語学的な研究では、**言語を科学的な研究対象として扱う**ことが求められるのです。すなわち、研究の結果は、客観的に検証できるような形で提示されなければなりません。これは、個々の言語を扱う場合でも、また、広く言語一般を扱う場合でも（その時にも個別言語のデータが基礎となりますが）、忘れてはならない大切な点です。

言語学専修課程進学に必要な条件は、言語について深く調べることに興味をもつことですが、研究対象として選ぶ言語に制限はありません。日本語・中国語・韓国語などのアジアの言語はもちろんのこと、英語・スペイン語のようなヨーロッパの言語からアフリカ・南北アメリカ・オセアニア地域の言語まで、本人の興味により自由に選択できます。話者が数億人いるような大きな言語から、話者数の限られた危機言語まで研究することができます。また、音声言語だけでなく手話を研究したり、ラテン語やサンスクリット語のようにある程度の言語資料を残したまま母語話者がいなくなった言語を研究したりすることも可能です。研究対象だけではなく研究方法にも様々なものがありますが、将来どのようなアプローチをするにせよ必要となる基礎的な研究方法の訓練を受け、そういう訓練を通じて、自分に最も適した分野を自ら選んで行くこととなります。

哲学・文学・歴史などの分野に興味のある人は、専修課程に進学する前に、ある程度自分で専門書を読んで既に予備的な知識を身につけていることが多いでしょう。しかし、言語学に関して、それはなかなか困難です。本屋などで手に入る書物

で言語学について独学した人は、実際に言語学専修課程で学び始めると、それまでに抱いていたイメージの変更を余儀なくされると思います。これには色々な理由が考えられますが、上述の「言語を科学的な研究対象として扱う」ような研究の書籍は、しばしば流通ルートに乗りにくく、したがって、それを目にする機会も少ない、ということが一つでしょう。それでも最近では言語学の専門書を一般の書店で目にする機会もふえましたが、言語を研究対象として扱うための前提や手続きにまで立ち戻って基本的な知識を与えてくれる本は少なく、特定のテーマを扱うものに限られる傾向があるようです。また、全国の大学で、言語学を専門課程として持つところがまだ必ずしも多くないことも、言語学的知識の普及に障害となっています。そういうわけで、言語学専修課程に進学する学生は、ほぼ全員が白紙の状態からスタートする、といっても過言ではありません。

## （２）言語学専修課程を卒業するために必要な科目と単位

言語学専修課程では、「言語学概論」、「音声学」、「比較言語学」の3つの講義を必修科目としています。**言語学概論**は言語学の基本的な考え方と、音声・音韻・文法・意味など言語学の諸分野の基礎知識を与えるものです。**音声学**は世界の言語で用いられる様々な言語音を聞き取り、発音し分け、また正確に記述する方法を学ぶ授業です。**比較言語学**は、言語学のうちの重要な分野のひとつである通時的な言語変化を扱います。これらの必修科目のうち、「言語学概論」、および「音声学」は持ち出し専門科目（前期課程2年生も履修することができる文学部の専門科目のことで、後期課程進学後の単位となります）として、2年生のA Semesterに本郷キャンパスで開講されますので履修するようにしてください。（「音声学」は、3年生のS Semesterにも開講されます。）なお「比較言語学」も持ち出し専門科目なので、希望者は2年生のA Semesterに本郷キャンパスで履修することができます。

言語学専修課程を卒業するためには、まず、これら必修の3科目のほか、「**言語学演習**」が8単位必要です。その際、必ず6ターム（3 Semester）以上取る必要があります。これに加えて、「**言語学特殊講義**」を12単位、その他に文学部（言語学専修課程のものを含む）ないしは他学部の授業から36単位を取らなければなりません。

なお、一部の「言語学特殊講義」は2年生のうちから履修することができます。令和8年度の持ち出し専門科目は次のとおりです。「認知言語学入門(2)」「比較言語学(2)」「国語学概論 I」「国語学概論 II」。これらのうち、「国語学概論 I」「国語学概論 II」は言語学以外の専修課程の授業として開講されますが、言語学専修課程の単位としても認定されます。

さらに、卒業のためには、以上に加えて、「卒業論文」または「特別演習」による

12単位が原則として必要です。「卒業論文」は、単に読んだものをまとめるというだけでは不十分で、最初に述べた「言語の科学的研究」によって、言語学に何か新しい知識をもたらすものであることが期待されます。最近の卒業論文のテーマの例は以下のとおりです。

最近の卒業論文のテーマの例
スペイン語の叙述補語構文について、前置詞選択を中心に
韓国語の語尾-essessess-に関する分析—語尾-essess-との比較を中心に—
コーパスから量的に捉えるペルシア語の軽動詞構文における前部要素の並列と分離可能性
古代ギリシア語諸方言における R 音化について
イロカノ語重複法の音韻的分析
Omission of Subjective Case Particle in Spoken Language of Modern Korean: Focusing on Nouns muo/mwo, got/go, sigan
現代文学と比較した近代文学らしさ—受動文の計量的比較から—
富山県射水市方言における「が」の発音について
ディディム・チン語における V+V 型複合動詞の分析
漫才における笑いのメカニズム：近年の M-1 のデータから
トク・ピジンにおける「V-im 目的語」構文と「Vlong 目的語」構文の交替

「特別演習」は文献精読、言語調査、言語データ分析等の課題から3つを選んで行い、言語学の基礎的な知識や方法論の修得度を審査します。

言語学専修課程に進学した学生は、あまり狭く専門を限ることなく、なるべく広範囲の授業を受け、演習に参加することが望まれます。これは、繰り返しになりますが、ほとんどの人にとって言語学を学ぶのが初めての経験であるためで、特に、大学院に進学しようとする場合には、少なくとも言語学の代表的な分野について、基礎的な知識を持っていることが不可欠です。

### (3) 教員の専門分野

言語学専修課程の教員はそれぞれ専門を異にしており、認知言語学をはじめとする理論言語学、フィールド言語学、歴史・比較言語学、言語類型論、印欧語、オーストロネシア語族、ドラヴィダ語族の研究など、その専門分野はさまざまです。

また、多岐にわたる言語学の諸分野をできるだけカバーするために、言語学専修

課程以外の教員の授業科目を、必要な範囲で、「言語学演習」または「言語学特殊講義」として認定するほか、毎年数人の非常勤講師を他大学からお招きして、言語学特殊講義を開講しています。参考のために令和7年度と令和8年度の非常勤講師の授業の例をあげますと、令和7年度は「書記日本語研究」「オーストロネシア諸語の諸問題」「印欧語比較研究：古リトニア語」が、令和8年度は「実験言語学」「台湾海陸客家語概説」「チベット＝ビルマ記述言語学研究」「文法変化の研究」が開講されています。また、前期課程で言語学に親しむ機会を提供するため、総合科目「**言語文化論 言語の多様性から考える言語学**」を教養学部で開講する年度もあります。

#### (4) 進路その他

学部卒業生の進路の割合は毎年様々ですが、最近では約2割が大学院進学を目指し、残りが社会に出る道を選びます。就職先は、公務員・教員・放送・出版・一般の商社など、どの専修課程にも共通する分野に加えて、情報技術や出版のように、多少言語学と関係する業種も以前から見られます。大学院に進学した学生の中には、それぞれの選んだ言語の研究や言語学の特定の分野の研究のために、外国留学する者も毎年出ています。

最後に、「学生室」の活用ということを強調したいと思います。言語学専修課程の授業の大半は、コロナ禍以前には文学部3号館6階の言語学演習室で行われていました。同じ6階には、助手室と並んで、学生が勉強のために使える学生室があり、ここには各種辞書、新着雑誌、コピー機、プリンタ、スキャナ、数台のパソコンや録音機器などがあり、自由に利用できます。

教員・学生の研究・教育活動やさまざまな行事は、言語学研究室の Web ページ (<https://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp>) で見ることができます。なお、言語学研究室の Web ページには進学に関する情報も掲載されています。ぜひ参考にしてください。

学生室はまた、日常的に同輩・先輩・後輩が交流して自由に情報交換をする場でもあります。基本的な文献の探し方や機械類の使い方を教わることもできるでしょうし、興味の方向を異にするもの同士の会話から啓発されることも多いでしょう。なお、教員の研究室も同じ階にあるので、学生は適宜容易に指導が受けられます。学生室を中心としたこのような学生生活は、教養課程との大きな違いであり、積極的な活用が期待されます。

## 日本語日本文学（国語学）

### ◇教員◇

教授 肥爪周二、小西いずみ

准教授 林淳子

助教 小池俊希

### ◇学生◇

学部 24名 修士課程 19名 博士課程 27名

（大学院学生数は、日本語日本文学専門分野としての総数）

### （1）「日本語日本文学（国語学）」専修課程とは

「国語学」というのは、「日本語学」と呼ばれることもあるように、日本語を一つの言語としてその構造や歴史を研究する学問領域です。

国語学は、文学作品を対象とする国文学（日本文学）とは別の学問ですが、特に日本語の歴史的研究においては古典文学研究と資料面で共通するところが多く、また、一方は言語を通して一方は文学を通してという違いはあるものの、ともに日本の文化を研究するという共通性をもつことから、専修課程としては「日本語日本文学」という共通の名称を冠した上で「国語学」と「国文学」に分けています。しかし、学問としての目的や方法、それを達成するために身に付けるべき知識や技能も、国語学（日本語学）と国文学とは大きく異なります。

近代国家としての日本において、事実上の公用語・国語として用いられてきたのが日本語であることから、日本語を研究する学問の名称としては伝統的に「国語学」が用いられてきました。私たちの研究室は、国語としての日本語の研究のために設置された日本最初の研究室です。しかし日本語は必ずしも日本国内でのみ使われ研究されるわけではないことから、近年では「国語学」ではなく「日本語学」と呼ぶのが普通です。こうした歴史的背景をふまえて、専修課程の名称としては、現代のありかたにふさわしい「日本語」を用いるとともに、「国語学」という伝統的名称をカッコにくくって残したものとしています。

### （2）「日本語学（国語学）」とは

「日本語学（国語学）」は日本語を一つの言語としてその構造や歴史を様々な角度、観点から研究する学問です。日本語学（国語学）は、日本語という言語を対象にした言語学の一領域であり、その内容は、高等学校までの「国語」とは大きく異

なります。

「日本語学（国語学）」は、大きく、現代語の研究と歴史的な研究に分けられます。**現代語の研究**では、現代の日本語の“しくみ”を明らかにすることが中心となります。これには、いわゆる「標準語」のほか、様々な地域の方言を対象とした研究も含まれます。**歴史的な研究**では、その“しくみ”がどのように変化してきたのかを明らかにします。日本語には奈良時代以降の豊富な書き言葉資料があります。これほどの歴史的資料を持つ言語は世界的に決して多くありません。

日本語学（国語学）の分野としては、日本語の言語体系を構成する各領域に対応して、文法論・意味論・語用論・語彙論・音韻論・文字論などがあります。また、大規模な言語データベースを構築しそれを用いて研究を行うコーパス言語学、社会と言語の関わりを扱う社会言語学、研究の歴史を扱う国語学史があり、さらに応用・発展領域として日本語情報処理や日本語教育学などもあります。学生は、このような広がりの中から、各自の興味と関心に従って自由に研究テーマを設定することができます。

### （３）各教員の専門分野と授業内容

授業は講義と演習とに分かれています。

講義では、音韻・文法などの領域（（２）を参照）に関して、各時代・諸地域の日本語の実態やそれを知るための資料や方法について、解説・検討します。講義は、各領域の基礎的な内容を広く学ぶ「概論」と、特定の領域・テーマについてより詳しく学ぶ「特殊講義」に分かれます。

演習では、各時代の文献や諸方言の資料を参照して言語事実を正確に把握する方法の習得を目指したり、専門の研究論文の読解・検討を通して言語研究の視点や理論の理解・習得を目指したりします。基本的な進め方や方法について教員が解説したあと、学生自身が講読文献の分担箇所について報告したり、自身で設定した研究課題について発表したりします。

国語学専修課程には現在４名の専任教員がいます。その専門分野と近年の授業内容は、次のとおりです。

**肥爪周二**（ひづめ・しゅうじ）**教授**は、悉曇学（仏教におけるインド語学およびその影響のもとに発生した日本語音韻学）を中心とする日本音韻学史、悉曇資料・漢字音資料による日本語音韻史の研究を行っています。

**小西いずみ**（こにし・いずみ）**教授**は、日本語の様々な地域の方言の音韻・語彙・文法の研究や、社会言語学的な研究を行っています。これらの研究では主にフィールドワークで集めたデータを扱います。

**林淳子**（はやし・じゅんこ）**准教授**は、日本語の文法論を専門としています。現

代語文法の記述および文法構造の理論的研究、また、その知見に基づく文法史の研究も行っています。

**小池俊希**（こいけ・としき）**助教**は、奈良時代から鎌倉時代にかけての日本語史資料を対象として、文法の研究を行っています。

このほかにも、日本語学（国語学）の多様な分野をカバーするために、毎年、複数の非常勤講師による講義が開講されています。最近の非常勤講師の講義は、次のとおりです。

年度	講師・講義題目
2025	・久保田篤講師「江戸時代語研究」
	・川瀬卓講師「副詞の歴史的研究」
	・五十嵐陽介講師「日本語音韻論：日本語・琉球諸語の韻律(アクセント)体系」
2024	・齋藤文俊講師「漢文訓読と近代日本語の文体」
	・櫻井豪人講師「翻訳語研究—洋学資料の外来語と翻訳語—」
	・森山卓郎講師「文法的文章論」

#### （４）当専修課程における学習活動

文学部に進学してから卒業までに必要な単位は76単位ですが、当専修課程においては、そのうち「国語学概論」、「国語学特殊講義」、「国語学演習」、「言語学概論」、「国文学特殊講義」など計32単位と、「卒業論文」または「特別演習」12単位、合計44単位が必修です。残りの32単位は、どの学部の中のどの授業からも選択することができます。

「**国語学特殊講義**」や「**国語学演習**」は、多数開講されている中から自由に選ぶことができます。（3）に記したとおり当専修課程には、日本語の歴史的研究、現代語の研究、方言の研究をそれぞれ専門領域とする教員が所属しており、さらに非常勤講師の授業を含めると様々な領域の授業をバランスよく学ぶことができる体制が整っています。最初は限られた領域だけでなく幅広く多様な領域に触れ、その中から自分の興味のある領域やテーマを見つけることが望ましいと言えます。

学生は、講義や演習を通じて様々な問題に出会いつつ、必要に応じて教員に相談しながら、おおむね4年生のはじめまでに**卒業論文**のテーマを各自で決めます。指導教員の日常的な指導のほかに、5月には卒論の題目発表会、7月には研究計画発表会、さらに10月には中間発表会があります。これらの機会にもらったアドバイスを踏まえて、1月初旬の締切まで論文執筆に奮闘することになります。卒業論文を執筆するという経験は、文学部生活最大の思い出となるでしょう。

最近の卒業論文として、次のようなものがあります。日本語学とはどのような分野なのか、2年間の学習・研究の集大成としてどのようなことができるのかの一端がつかめるでしょう。

年度	題 目
2025	<ul style="list-style-type: none"> <li>●〔特別演習〕 方言文法全国地図の略図作成／小説作品における表現の日英比較</li> <li>● 戯曲作品にみるレトリックと比喩表現の相互作用—三島由紀夫『わが友ヒットラー』を踏まえて—</li> <li>● 「三河弁」はどのように語られてきたか</li> <li>● 現実会話とフィクション会話の属性表現的視点からの比較—母娘の雑談的談話を例として—</li> <li>● 日常会話における「誤用」の使用実態</li> <li>● 日常談話における終助詞の機能</li> <li>● 丁寧な行為指示表現における接尾辞「ませ」の史的変遷</li> <li>● 例示表現「などの」「といった」「ような／みたいな」の使い分け—語本来の性格・特徴に着目して—</li> <li>● 言葉の性質を利用した遊びの分析—小林賢太郎『THE SPOT』より「ない慣用句」を題材に—</li> <li>● 丁寧表現「ます」の近代における使用実態</li> <li>● VTuber 特有の発話における特徴について</li> <li>● あいづちの種類と運用に関する日本語と韓国語の対照研究</li> </ul>
2024	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 『天草版平家物語』における助動詞タリとタの使い分けについて</li> <li>● 近代語における四字熟語の副詞用法と後続形式</li> <li>● 『台湾万葉集』に見られる文法及び語彙的特徴—「がに」「がの」の使用に着目して—</li> <li>● 現代日本共通語における文末形式ンダヨナの使用実態について</li> <li>● 『昭和話し言葉コーパス』における助動詞ラシイ</li> <li>● 知覚動詞「見る」「見える」の表現効果の差違</li> <li>● 「必ずしも・あながち・一概に」の意味記述</li> <li>● 卓球用語の日本語学的研究</li> <li>● クイズの問題文における名詞修飾の構造</li> <li>● 語の親密度は何に規定されるのか</li> <li>● 三重県北勢方言における動詞否定辞の変異とその選択要因</li> <li>● 山梨県奈良田方言における呼びかけイントネーション</li> <li>● 第三者敬語の運用に関わる要因—岡崎敬語調査データの分析—</li> </ul>

卒業論文を書かず、**特別演習**を履修して卒業することもできます。これは日本語に関するデータ採取、研究文献精読、古い文献の翻刻などを2科目行うものです。

卒業後の進路としては、大学院への進学のほか、マスコミ・IT企業・コンサルタント業などの一般企業への就職、国家公務員・地方公務員、中学や高校の国語科教員などの道があります。社会に出る者も将来研究を続ける者も、学部学生の2年間、私たちがそれによって生活している日本語について客観的・分析的に捉える視座を学び思索を深めることは、何にも増して有意義な経験となるでしょう。

## 日本語日本文学（国文学）

### ◇教員◇

教 授 金沢英之、佐藤至子、木下華子  
准教授 河野龍也、栗本賀世子  
助 教 古川諒太

### ◇学生◇

学部 46名 修士課程 19名 博士課程 27名  
(大学院学生数は、日本語日本文学専門分野としての総数)

### 国文学とは

#### Q：国文学は何を研究する学問ですか？

A： 私たちは膨大な情報に囲まれて生きています。それらを読んだり、見聞きしたりして、わかったような気分になることもあります。しかし、本当に自分の頭で考えて理解したと言えるものはどれだけあるのでしょうか。

文学研究の基本は、第一次資料を前にして、予断を排して思考を巡らすところにあります。国文学は、それを主に日本語で書かれた文献に対して行います。

#### Q：研究対象について具体的に教えてください。

A： 中心となるのは、日本の古代から現代までの文学作品です。戯曲、歌詞、言葉と共に表現された絵画、そして漢文も研究対象になります。研究対象が身近に、しかも大量に存在するのが国文学の特色です。

研究方法も多様ですが、あくまで文献を対象として実証的に研究するというのが国文学研究の最大公約数といえるでしょう。

### 国文学専修課程とは

#### Q：国文学専修課程の特色は何ですか？

A： 当専修課程では、世間で流行している議論に目を奪われたり、メディア受けする大仰な物言いに踊らされたりすることなく、研究対象に真摯に向き合い、自分の頭で考えることを重視しています。国文学研究室では存分に調べものし、思索を深めることができます。研究室には貴重な写本・版本を含め、古典籍（和古書）が数多く所蔵されていて、学生でも手続きをすれば閲覧が可能です。古典籍そのものが身近にあることも、当専修課程の特色の一つです。

**Q：専任教員の専門分野を教えてください。**

A： 国文学では、文学史を上代・中古・中世・近世・近現代の5つに区分することが一般的です。当専修課程には各時代を専門とする教員が揃っています。詳しくは、後掲「専任教員の自己紹介」を見てください。

**Q：第一次資料を前にして思考を巡らすとありましたが、どのような授業によってそれを学ぶのですか？**

A： 「国文学演習」の授業では、個別の作品を対象に、その表現の成り立ちや意義を細密に分析していきます。演習は5人の専任教員全員が開講しており、学生の報告をもとに議論する形式で行われます。

また、古典籍を扱う方法を学ぶ授業として「日本書誌学概論」（必修科目）があります。講義に加え、研究室所蔵の古典籍を実際に手に取り、その扱い方を基本から学びます。

**Q：駒場生でも受講できる授業を教えてください。**

A： 「国文学概論」（Aセメスター開講）は、国文学研究の基本を講じる必修科目ですので、2年生の時に受講することを強く推奨します。「国文学演習」に参加している2年生もいます。その他の科目についても、持ち出し専門科目の指定がある科目は受講できます。詳しくはシラバスを確認してください。

**Q：他にはどのような授業がありますか？**

A： 各教員が自らの専門分野について講義する「国文学特殊講義」があります。専任教員が覆い切れない分野は、毎年2～3人の非常勤講師を招聘して講じてもらっています。

また、毎年一つのテーマを決めて専任教員全員が連続講義をする「総合日本文学研究」があります。2021年度は「日本文学における〈夢〉」、2022年度は「日本文学における〈作者〉」、2023年度は「翻案」、2024年度は「韻文と散文」、2025年度は「恋愛」をテーマに開講しました。

**Q：他の学部のような、固定したゼミはないのですか？**

A： 文学部には、一人の学生が一つのゼミに所属するという制度はありません。複数のゼミ形式の演習に参加しながら、できるだけ幅広く学んでほしいと考えています。

**Q：卒業論文は必修ですか？**

A： 必修です。ぜひとも納得のいくものを書いて卒業してほしいと思います。研究者になるわけでもないのに、と思う人もいるかもしれませんが、本当に自分の手で調べ、自分の頭で考えたことを綴ってゆく喜びと苦しみを経験することは、社会に出ても必ずや意味をもつと信じています。

**Q：卒業論文で、村上春樹などを題材にしてもよいのですか？**

A： 現代文学の研究に限らず、国文学では一つの言葉や表現がどのような経緯で存在しているか、ということを中心とします。ですから、同時代のさまざまな言説はもちろん、そこへ至る歴史的な流れをなにより大切にしています。一つの言葉を考えるにも、さまざまな調査・分析が必要です。現代文学でいえば、近代文学の流れをトータルに見返すことが要求されるでしょう。

つまり時代が新しくなるほど大変だ、ということになります。その覚悟さえあれば、かまいません。

**Q：研究指導はしてもらえますでしょうか？**

A： 教員は皆、教える情熱をあふれるほど持っています。場合によっては個別に時間をとって話をすることもあります。ですが、手取り足取りの指導は期待しないでください。親切すぎる指導は、主体性・自主性を奪うという意味で、かえって不親切になることもあります。もちろん、学生の皆さんが問題意識を持って質問に来れば、できるだけ丁寧に答えます（ただし、予約をとってください）。

上級生に学ぶという方法もあります。国文学研究室には、学部・大学院を含めると、教員・学生・研究員・研究生・外国人研究生を合わせて100名前後が所属しています。さまざまな専門の人がいますので、わからないことは積極的に尋ねてみましょう。学生どうしが教え合う文化は、国文学研究室の美点のひとつです。

**Q：研究室の場所を教えてください。**

A： 国文学研究室は、法文2号館の3階・4階、法文1号館の1階・4階に部屋を持っています。ほぼすべての部屋が書庫を兼ねています。

中心となる部屋は、法文2号館3階の研究室です。ここに助教の古川さんと事務補佐員の小高さん・澤田さんが常駐していて、学生・院生に図書の出納や鍵の受け渡しなど、いろいろ便宜を図ってくれます。

**Q：研究室の課外活動はありますか？**

A： かつては年中行事のひとつとして「研究室旅行」がありました。教員全員と学生が参加して、秋に1～2日の日程で文献資料を調査したり、文学遺跡を実地踏査したりしました。2016年度は山梨、2017年度は小田原、2018年度は日光、2019年度は筑波山・香取神宮へ行きました。2020～2025年度は実施を見送りましたが、状況が落ち着いたら再開を検討したいと思います。

**国文学専修課程を卒業した後**

**Q：大学院への進学について教えてください。**

A： 毎年、数名の学部生が大学院に進学しています（末尾「卒業生の進路」参照）。他大学からの受験生も多く、競争率は低くはありません。

修士課程を修了して博士課程に進み、博士論文を書き上げて博士号を取得したとしても、研究職に就くことは簡単ではありません。しかし、研究職への就職も、高等学校の国語科教員への就職も、他大学に比べればだいぶ恵まれています。大学教員の採用試験では、実際に教育現場に立ったことがあるかどうか問われます。その際、高校で教えた経験があれば役に立ちます。大学院進学を考えている人には、教員免許を取得しておくことを強く勧めます。

中学・高校の教員や出版関係の仕事に就きたい人にとっても、修士課程で学ぶことは色々な意味で有益でしょう。学部卒業後すぐに就職する道も、もちろんありますが。

大学院は、学部よりもさらに研究に特化した学びの場です。日本の文化をより深く専門的に学んでおくことは、ビジネスや政治の世界でも、きっと役に立つでしょう。特に海外で仕事をする際には、日本のことを必ず尋ねられます。修士課程修了後、一般企業や官庁に就職して活躍している卒業生もたくさんいます。

**Q：文章を書くことが好きなのですが、国文で勉強して作家を目指すことはできますか？**

A： 創作方法を教えるような授業はないので、それは自分で勉強することになります。国文の卒業生には、大勢の作家がいます。例えば、中勘助や堀辰雄、川端康成などは有名です。舟橋聖一、阿川弘之、杉浦明平、大岡信、宇野鴻一郎、橋本治も国文の卒業生です。

**Q：外国人に日本語や日本文学を教える仕事にも興味があるのですが…。**

A： 国文には外国人の留学生が常在籍していて、接する機会は非常に多いです。もっとも、外国人に教える仕事を目指すには、英語などの外国語の学習が必要となるのは言うまでもありません。

## 専任教員の紹介

### 金沢英之 教授（上代）

『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』など、かな文字の生まれる以前に、漢字を用いた多様な表現で書かれた文学を扱います。主に奈良時代の作品が対象ですが、日本で最初の文学であるだけに、後世の文芸や思想にも様々な影響を与え、同時に漢字漢文という表現手段を通じて同時代の中国大陸・朝鮮半島の文字文化ともつながってゆきます。そうした広い視野から研究を行いたいと思います。

### 栗本賀世子 准教授（中古）

平安時代の物語や随筆、日記、和歌などの文学作品を担当します。私自身は『源氏物語』を中心とした物語作品を扱い、物語に影響を与えた平安時代の歴史を調査し、物語が素材とした史実を発見すること、虚構の設定の背後にある作者の意図を探ることを目的に研究しています。授業では、各作品の注釈の説の検討や、言葉の用例の調査を行い、作品の解釈を丹念に行うことを重視していきたいと考えています。

### 木下華子 教授（中世）

平安末・鎌倉・室町時代（中世）の文学を担当します。中世には、韻文である和歌、散文である物語・軍記・説話など様々な文学の領域が存在します。中世文学の担い手は、藤原定家も鴨長明も、私たちが思う以上に複数の領域を横断する多面的な存在でした。授業では、作品の言葉・表現の分析を通して、このような時代に生成した表現意識や言葉が創り出す世界を拓きたいと考えています。

### 佐藤至子 教授（近世）

近世（江戸時代）の文学を担当しています。近世文学を理解するには、近世の人々が何を読み、何を常識としていたかを知ることが大切です。演習では、原文に注釈をつける作業を特に重視しています。近世の文献をひたすら読み、調べていると、雑学も含めていろいろな知識が身につく、くずし字も読めるようになり、江戸っ子の言う洒落も理解できるようになります。近世に生きた人々と同じ視線で作品を読む楽しみを味わってみませんか。

### 河野龍也 准教授（近現代）

文学が近・現代の社会の中で果たした役割について考えています。絵画と文学が共通して向き合った表現課題や、文学における国民意識の形成、外地文学・紀行文学と日本語の問題など、時代状況との応答関係から文学を捉える研究を目指しています。授業では、地図を使った作品研究や、論争から再検討する文学史、自筆原稿の検証など、様々なアプローチに挑戦し、近・現代文学の価値を考察していきます。

### 国文学専修課程への進学を考えている皆さんへ

進学までに、ぜひ、たくさんの本を読んでおいてください。本選びに迷う人は、秋に行われる進学内定者ガイダンスで配布する推薦図書リスト「国文学志望の皆さんへ―読書の手引き―」を参考にするといいでしょう。狭い視野や、こぼった思考の中に閉じこもらないでほしい。好奇心をもって、未知の分野、知らない作家、読んだことのない作品にチャレンジしてみてください。

一緒に、研究したり議論したりできる日を楽しみにしています。

## 卒業生の進路

年度	進路先
2025	ポケモン、住友化学、文部科学省、香川県庁、BofA 証券、東京都庁、三井住友銀行、PwC コンサルティング合同会社、日本放送協会、JA 共済連、SHIFT、りそな銀行、アビームコンサルティング、早稲田大学職員、愛光中学・高等学校教員（以上、各1名）、大学院進学（3名、うち他研究科1名）など
2024	レバレジーズ、コカ・コーラ ボトラーズジャパン、ネクストビート、ケアリッツテクノロジーズ、SHIFT、東京ドーム、西武ホールディングス、農林中央金庫、アクトインディ、ソフトバンク、インフォテック朝日、文部科学省、作曲家（以上、各1名）、大学院進学（2名）など
2023	香川県庁職員、カンディハウス、集英社、農林中央金庫、ミルボン、明治安田生命保険相互会社、楽天グループ、ラセングループ、鉄道模型製作業（以上、各1名）、大学院進学（3名）など
2022	信金中央金庫、ベिकाレントコンサルティング、松竹、三井住友海上火災保険、FUNtoFUN、三菱商事、公募ガイド、埼玉県庁、ブレンバンク、日本航空、芙蓉総合リース、丸紅、スマートゲート、旺文社、ゼンリン（以上、各1名）、大学院進学（9名、うち他専門分野1名）、未定（1名、公認会計士受験準備）
2021	オースビー株式会社、講談社、PwC コンサルティング合同会社、エア・ウォーター株式会社、神戸市役所、読売新聞、野村信託銀行、マッキンゼー&カンパニー、くまざわ書店、学習塾 ena（以上、各1名）、教員2名、大学院進学（4名、うち他大学院1名）
2020	ADK、NHK、鹿島建設、プロレド・パートナーズ、McKinsey&Company、楽天、経済産業省、光村図書出版、ダイキン工業（以上、各1名）、大学院進学（6名、うち他大学大学院1名）
2019	NTTコミュニケーションズ、楽天、パナソニックシステムソリューションズジャパン、朝日広告社、中央法規出版、ディスカヴァー・トゥエンティワン、S M B C、第一生命（以上、各1名）、大学院進学（9名）
2018	国際石油開発帝石、レイスグループ、シーエー・モバイル、日本航空パイロット、住友商事、国立国会図書館、モルガン・スタンレー、野村證券、NHK、芳文社（以上、各1名）、大学院進学（6名）

## 中国語中国文学

### ◇教員◇

教 授 齋藤希史、鈴木将久

専任講師 付晨晨

助 教 市原靖久

### ◇学生◇

学部 7名 修士課程 3名 博士課程 12名

### (1) 中国語中国文学専修課程の概要

亀の甲羅や牛の骨を焼いて神の意志を問いかけていた時代から21世紀まで、中国語ほど長い歴史を持ち、多種多様な思惟や感情を記録してきた言語は世界でも稀である。中国語中国文学専修課程が対象とするのは、この歴史の全てである。中国文明はその周辺に無数の多彩な文化を育み、日本・韓国・ヴェトナムでは漢字を学んで作られた文字がそれぞれに独自の思惟や感情を綴ってきた。また中国の西方は砂漠や大山脈によって隔てられながらも、常にインドや西アジアの大文明に向かって開かれ、多くのものを吸収した。中国語中国文学の歴史は絶えざる文化交流の歴史でもあった。

本専修課程には、学内兼任教員等を含め、この長い歴史を扱うにふさわしい多彩な教員が揃っており、中国語中国文学の幅広い領域をカバーする。

加えて、本専修課程の特色として挙げたいのは、学生や研究員に外国人の多いことである。特に大学院生や研究生には中国・台湾・香港などアジア諸地域からの留学生が多く、また、海外からの外国人研究員（訪問学者）も常に数名が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、授業や合宿にも外国人研究者の参加を迎えて、学生との交流が活発に行われている。

外国人留学生の数は、研究生も含めれば、2026年4月現在、中国・台湾からの留学生を中心に14名が在学している。留学生の参加は授業のあり方にも影響を与えており、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。日本人学生にとっては、いながらにして中国語会話が上達し、我が国とは異なる様々な見方や研究方法が学べるという点で極めて恵まれた環境である。

## (2) 専任教員の紹介

**齋藤希史 教授**は中国古典詩文を専門としつつ、近代に及ぶ東アジアの言語と文学にも研究領域を広げている。先秦以来の歴史を持つ伝統詩文は、それを記した漢字とともに東アジア全域に広く伝播し、多様な文字世界を形成した。齋藤教授の近年の関心はこうした世界における“読み書きする主体”のありかたに向かっており、『漢字世界の地平 私たちにとって文字とは何か』（新潮選書、2014）、『漢文脈と近代日本』（角川ソフィア文庫、2014）などでは、古典詩文研究者ならではの切り口で東アジアの文字や言説を分析する。また、『漢詩の扉』（角川選書、2013）『詩のトポス 人と場所をむすぶ漢詩の力』（平凡社、2016）では、詩と人と場の結びつきを浮き彫りにする。『漢文脈の近代 清末=明治の文学圏』（名古屋大学出版会、2005）でサントリー学芸賞、『漢文スタイル』（羽鳥書店、2010）でやまなし文学賞を受賞。近著に『漢文ノート 文学のありかを探る』（東京大学出版会、2021）、『アジア人物史 第2巻 世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア』第4章「六朝時代とは何であったか——アジアの名文集『文選』の誕生まで」（集英社、2023）があるほか、漢文学習のための参考書として総合文化研究科田口一郎教授との共著『漢文の読法 史記遊俠列伝』（KADOKAWA、2024）がある。

授業では、2年生以上向けに、「**古典詩文入門**」として中国古典詩文を読むための基礎と新たな視点を身につけるための初級演習を開講している。学部・院生共通では、東アジアの漢詩文を視野に入れた「古典詩文選読」、中国古典文学の基点を学ぶ「漢魏六朝詩文選読」を軸に、原文を正確に読み解く読解力を養い、講義科目「**東アジア文学史論**」によって包括的な視野を提示している。なお、大学院向けの「古典文学芸術論選読」「東アジア人文学の諸問題」では、多様な研究テーマの学生との文献読解と討論が活発に行われている。

**鈴木将久 教授**は中国現代文学を専門としている。特に20世紀初頭から中頃にかけて、中国が近代に直面したとき、伝統文化をどのように変容させながら新しい文化を生み出したかを、西洋発の思想と中国の現実の相互関係として動的に読み解くことに関心を持っている。著書『上海モダニズム』（中国文庫、2012）では、西洋伝来のモダニズム文学が中国においてたどった複雑な運命を、中国の歴史に即して考えることを試みた。また日本における中国文学研究の歴史的展開についても研究をしている。同時に現代中国の知識人の活動にも関心を持ち、現在の中国の人がどのようなことを感じ、考えているかを日本に紹介している。主な翻訳書に『中国が世界に深く入りはじめたとき』（賀照田著、編訳、青土社、2014）、『中国メディアの

現場は何を伝えようとしているか』(柴静著、共訳、平凡社、2014)、『誰も知らない香港現代思想史』(羅永生著、共編訳、共和国、2015)、『中国はここにある：貧しき人々のむれ』(梁鴻著、共訳、みすず書房、2018)、『思想史の中の日本と中国』(孫歌著、東京大学出版会、2020) などがある。

授業では、中国現代文学のテキストを深く読む訓練と広く読む訓練をそれぞれ別の科目で行っている。深く読む授業では原文を正確に読み解く力を養成し、広く読む授業では、参考文献を使いながら、テキストに関連する事項を広く理解し、その作業によってテキストの豊かな意味を複眼的に読み解く力を養成している。

**付晨晨 専任講師**は、中国古代知識の全体像の構成・変動を、中国古代の「百科事典」とも言える類書を通じて考察している。類書の編纂が本格化するのは魏晋南北朝時代だが、この時期に成立したものの多くは散逸しているため、その復元を試みるとともに、政治・学術・文学・思想など様々な視点から当時の類書編纂の事情を探り、類書の流通が政治・文化に与える影響を研究してきた。最近では、類書の編纂・利用の担い手である士族や文人集団の構成・活動に着目し、その具体的な活用の実態に関心を寄せており、こうした考察を通して、中国古代における人文学知の総合的なあり方と、その発展の方向性を明らかにすることを目指している。主要論文に「齊梁類書の誕生—初期類書の系譜と南朝士人—」(『史学雑誌』第128編第2号、2019年)、「『修文殿御覽』編纂再考—南朝類書の北伝と北朝類書の誕生—」(『東方学』第140輯、2020年)、「齊梁類書における魏晋知識の典故化」(佐川英治編『多元的中華世界の形成—東アジアの「古代末期」—』臨川書店、2023年) などがある。

授業では中国語の学術的な実践能力の習得を目標としている。学部向けの「**上級中国語**」では、中国古代文学史や中国史を中国語で講義することで聞く・話す能力を養う授業と、20世紀の古典的論文や近年の新研究を読解することで読む・書く能力を磨く授業を行う。大学院向けの「学術中国語実践」では、学術的な文章でよく使われる構文・表現や展開のパターンを、論文の一般的な構成に即して段階的に説明し、効率的に中国語の学術論文の書き方を練習する。

**市原靖久 助教**は、先秦の中国語文法を専門とし、特に代名詞が文中あるいは文章中で果たす役割、意味や機能に関心を持っている。主な業績に、「上古中国語の一人称代名詞“我”と“吾”について」(『中国語学』265号、2018)、「『春秋左氏伝』における指示詞の意味と機能」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』24号、2021)、「上古中国語「夫」再考—発語の辞をめぐる—」(『中国語学』271号、2024) などがある。

### (3) 学内外講師など

本専修課程では、学内外から講師を招聘し、授業科目の充実を図っている。学内の講師の科目には、**東洋文化研究所**の上原究一准教授による「明清白話小説選読」、**総合文化研究科**の谷口洋教授による「楚辞『天問』の精読と研究」、田口一郎教授による「釋大典『詩語解』講読」がある。

学外からは、中国語圏の語学・文学・文化について、大西克也・放送大学教授による「上古中国語文法講義」、佐々木勲人・筑波大学教授による「中国語学概論」、桑島道夫・静岡大学教授による「中国の文化（現代文学と映画）」、柳川順子・県立広島大学名誉教授による「六朝唐代小説研究」が開講される。この他、張佩茹・東北大学准教授による中国語の授業が開講される。

以上、先秦から現代までの中国の言語・文学・文化を扱う授業を展開しており、受講者は幅広く学ぶことができる。

### (4) 中国留学制度と就職状況

本専修課程からは毎年、日中両国政府交換による政府奨学金留学生として、学部生や大学院生が、北京大学、復旦大学、南京大学などに留学している。また香港中文大学との交換留学協定によるサマースクールへの参加など、様々な留学・訪問制度が充実しており、それらを活用して研究の進展や語学力の向上を図っている。

学部卒業後は大学院に進学し、研究者への道を歩む者が多いが、中国に対する社会的関心の高まりから、日本経済新聞社・NHK・吉本興業・東方書店・明治安田生命・野村證券・JCB・コニカミノルタ・アフラック・NTT東日本など、新聞・テレビ・出版のほか、メーカー・商社・金融・通信・コンサルティングなど各種企業に就職して活躍する者も多い。

私たちはみなさんがともに中国研究の大海に乗り出してくださることを心待ちにしている。授業風景や留学・就職状況などについては、中文のホームページ委員会が編集している中国語中国文学研究室ホームページ (<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/chubun/>) も参照していただきたい。

## インド語インド文学

### ◇教員◇

教 授 梶原三恵子

助 教 友成有紀

### ◇学生◇

学部 0名 修士課程 7名 博士課程 6名

(大学院学生数は、インド文学・インド哲学・仏教学専門分野としての総数)

### (1) はじめに

本専修課程では、サンスクリット語などの古典語を中心に、インド亜大陸の言語と文化を総合的に研究しています。インド文化は紀元前二千年紀から現代までの三千年にわたって豊かな文献資料を伝え、ヒンドゥー教や仏教を介して、南アジアから東南アジア、および日本を含む東アジアに至るまで、大きな影響を及ぼしてきました。インド語インド文学の対象となる時代も領域も広大ですが、本専修課程では古代（紀元前十二世紀頃）から古典期（紀元数世紀頃）を中心に研究しています。

### (2) インド語インド文学とはなにか

専修課程名はインド語インド文学ですが、「インド語」という単独の言語はありません。本専修課程では、インド亜大陸で用いられている、あるいは用いられてきた諸言語をインド語（インド諸語、Indian languages）と総称しています。サンスクリット語をはじめとするインド・アーリア系諸語は、ヨーロッパの多くの言語と同一の起源をもち、インドからヨーロッパに至る地域の諸言語を比較する印欧比較言語学にとっての一大資料でもあります。一方、タミル語をはじめとするドラヴィダ系言語などの非インド・アーリア系諸語も、インドの言語文化の大きな一角を占めています。

「インド文学」も、物語や詩歌などの狭義の文学に限りません。本専修では、「言語によって伝えられているインド文化」の総体をインド文学（Indian literature）と呼んでいます。過去数年間の教員および学生の研究テーマには、次のように、さまざまなジャンルのものがあります。

古代インドの家庭儀礼の成立と発達  
 ウパニシャッドと初期仏典の接点  
 古代ジャイナ教の在家信者の生活規範  
 パーニニ文法学とヴェーダ聖典  
 サンスクリット説話集『ブリハットカタール』の成立史  
 大叙事詩『マハーバーラタ』の語りの構造  
 タミル恋愛文学  
 タミル二大叙事詩の相互関係  
 鳥の形の祭火壇を作るヴェーダ祭式  
 伝統インド医学（アーユルヴェーダ）  
 古代インドの葬礼  
 インド最古の文献『リグヴェーダ』の詩論  
 古代インドの占星術理論  
 古典インド演劇論  
 『マヌ法典』における訴訟主題  
 カシミール王統記 など。

### (3) 進学したら

本専修課程の授業では、サンスクリット語、パーリ語をはじめとする中期インド諸語、タミル語など、古典語を中心にインド諸語の文法を学び、原典を講読します。このうち**サンスクリット語**は必修です。サンスクリット語の文法規則は、紀元前から三千年にわたって基本的な部分は変わらないので、いったん初級文法を学べば、さまざまなジャンルの文献の研究に進めます。ジャイナ教文献や仏教文献に必要な中期インド諸語、ヒンディー語などの近現代インド・アリア諸語は、サンスクリット語の流れをくんでいます。ドラヴィダ系のタミル語など非インド・アリア諸語も、語彙などにサンスクリット語の影響を受けています。サンスクリット語を学ぶことで、広い時代と分野のインドの言語と文学に扉が開かれます。

インド哲学、仏教学、言語学、西洋古典学ほか、他専修課程の授業も積極的に受講することが推奨されます。原典講読の予習は時間のかかるものですが、うまく時間を管理すれば、教員免許の取得や就職活動などとも両立できます。

#### (4) 教員と授業の紹介

**梶原三恵子 教授**はサンスクリット語学文学が専門です。ここ数年の主な関心は、紀元前インドのいわゆるバラモン教(ヴェーダの宗教)の家庭祭礼の研究を通じて、古代インド社会文化史を解明することにあります。

**友成有紀 助教**はサンスクリット語の文法学と論理学の関係解明が専門です。

このほか毎年、数名の非常勤講師を学外からお招きし、さまざまな専門領域の講義を担当していただいています。

もともと、教員の専門研究が講義・演習にそのまま反映されるわけではなく、狭義の専門分野を越えて、インド古典のさまざまな領域の講義や演習が行われることが少なくありません。授業の詳細については文学部便覧、シラバス、研究室ホームページをご参照ください。

#### (5) むすび

インドの言語と文化には三千年以上の歴史があります。その間には当然、変革と発展がくりかえされてきましたが、インドの面白さは、古代の言語と文化が、ときに形を変えながらも長い歴史を超えて生き残り、近現代文化のそこここに継承されているところにあります。

「サンスクリット語は、その古さはどうであろうとも、驚嘆すべき構造をもっている。それはギリシャ語よりも完全であり、ラテン語よりも豊かであり、そのいづれにもまして洗練されている。」

ウィリアム・ジョーンズ (1746-1794)

原典の一語一語をじっくりと噛みしめながら取り組むうちに、インド語学習と原典講読のおもしろさはもちろん、学問の楽しみをも味わうことができるようになっていただければと思います。大学時代に堅実な学問を経験することは、きっとみなさんの人生を実り豊かにしてくれるでしょう。

研究室HP <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/indlit/>

## 英語英米文学

### ◇教員◇

教 授 新井潤美、渡辺明、阿部公彦、Barnaby Ralph

准教授 諏訪部浩一、中尾千鶴

助 教 坂元美樹也

### ◇学生◇

学部 35名 修士課程 12名 博士課程 11名

英文科の中身は、**英語学**、**英文学**、**アメリカ文学**にだいたい専攻が分かれている。「食わず嫌い」はしてほしくないものの、学生諸君には三分野のうちいずれか、好みの専攻の勉強におおむね集中できる仕組みとなっている。そしておのおのが選んだ分野にまつわる卒業論文を仕上げること（分量は、英語の場合7500語程度、日本語の場合20000字程度）で、英文科ライフの「あがり」となる。

英語学は様々な分野に分かれるが、どの分野の研究をするにせよ、言語の一般的な性質・仕組みについて正確な理解を持つ必要がある。そのため、授業では、英語の詳細な事実と、その理論上の意味合いを総合的に把握する訓練に重点をおく。その際、日本語との比較も可能な限り試みる。

一方、英米文学は、英米に限らない英語圏全般の文学作品（詩、小説、演劇、批評など）を対象とする。作品テキストの精読と解釈を不動の出発点としつつ、その背景にある歴史をさかのぼって当時の社会や文化の動向に考察の対象を広げることもあれば、児童文学・大衆文学などのいわゆるサブ・ジャンル、あるいは文学と美術や音楽との諸関係などへと射程を広げることもある。

さて、個々の教員から授業・研究の内容をかいつまんで自己紹介しよう。

### 新井潤美 教授：

専門分野は**イギリス文学**と**比較文学**。主な関心はイギリスの「階級」の概念と文学における表象であり、特にイギリスの小説と18世紀以降のイギリスの演劇、文化を研究対象としている。「階級」との関連で、「郊外」「教養」「教育」「消費文化」「観光」「他者」といったテーマも扱っている。また、文学作品の映像化を中心としたアダプテーション研究、イギリス文学における「日本」の表象、そして最近ではイギ

リス文学、文化におけるエスニック・マイノリティの表象と受容の研究も行っている。

**渡辺明 教授：**

統語理論が専門。高度な理論的判断がどのような形でデータの分析に反映されるかということに特に興味がある。最近では形容詞や名詞の下位分類が統語構造にどのような影響を与えるかという問題を中心に研究をすすめている。授業では、さまざまなレベルにおいて、理論の基礎をおさえていくようにしたい。理論的研究というものは、(素人がよく誤解するように)一時のはやりすたりではなく、長年の積み重ねの中から生まれてくる重要な問題をいかに解決するかがその本質である。そのような研究伝統を身につけ、理解に努めるのが授業の主目標となる。そこから、どのようにして新しいものを創り出ししていくかは、それぞれの努力と工夫次第ということになる。

**阿部公彦 教授：**

英米詩を主要研究対象としつつ、小説や批評にも関心領域を広げている。文学作品の精読を通して、「なぜ人は頼まれてもいないのに語ろうとするのか」「文学作品の言葉は、どこが特殊なのか？ 事務処理の言葉とはどうちがうのか？」といった根源的な問いを立て、そこから「思わず言うつもりでないことを言うとはどういうことか」「なぜ小説では漏れ聞こえた会話が大きな役割を果たすのか」といった個別論にも踏みこんでいくことで文学研究を社会に向けてひらこうと努力している。

**諏訪部浩一 准教授：**

アメリカの20世紀小説を主な研究対象としてきたが、そもそも小説とはいったい何なのかという大問題に関心があり、したがって19世紀小説を無視しているわけではない。この「大問題」を、個々の文学作品をどうすれば面白く読めるかという実践において考えるのが、当面の方針ということになる。教員の「文学」へのそのような関心は、授業にも当然反映されることにはなるが、それぞれの作品を、それぞれに相応しいスタンスを模索しつつ読んでいく以上、アプローチは限定的というより包括的となるはずであり、そのようにいわば柔軟性を強制する形で受講生自身の問題意識を拡大深化させることを目標としたいと思っている。

**中尾千鶴 准教授：**

専門は生成文法統語論。言語における文法規則の言語間変異を、主に日本語と英語の比較を通して探っている。特に、文における語の移動や語の削除(省略)

の規則について、それぞれの構文がどのような場合に認可されたりされなかったりするのかを言語ごとに考察している。また、子供がどのようにそれぞれの母語の規則を習得するか、子供の文法と大人の文法がどのように異なっているかといった言語獲得に関する問いにも興味がある。

### Barnaby Ralph 教授 :

My main research interest is to do with early modern literature, culture, and comparative aesthetics in Britain. To that end, I often work with rhetorical texts from the seventeenth and eighteenth centuries, which offer useful insights into not only novels, plays, and poetry, but also a broader range of arts such as music, painting, and architecture. Aside from this, my teaching includes courses on critical theory, regional literatures, writing technique, and research methodologies at both the undergraduate and postgraduate levels.

上記の6名の専任教員が担当する専門科目（**概論・概説**や**演習・特殊講義**）に加えて、教養学部や学外から招いた非常勤講師の先生方による専門科目（**英語学特殊講義・英米文学特殊講義**）や学部後期課程の共通選択科目としての英語科目（「**英語後期**(Speaking, Writing, Reading)」や「**アカデミック・ライティング**(Introductory, Intermediate, Advanced)」）も開設されている。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会も常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムも開かれている。

本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職をめざして大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、金融、製造など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。



阿部教授「英語学英米文学演習」(シャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』を読む)の授業風景

以下、参考までに最近の卒業論文の題目を分野ごとに一覧しておく。(順不同)

### 英 語 学

The Japanese *Tough*-Construction and The Complementizers *no* and *koto*  
Erroneous Use of Past Participles by Japanese Learners of English  
The Comparison of Comparative Correlative Constructions in English and Japanese  
A Study on Classification of Japanese Indirect Passives

### 英 文 学

Three Women of *The Moon and Sixpence*  
What Ishiguro Expresses through Stevens in *The Remains of the Day*  
*Pride and Prejudice*: The Presentation of a New Type of Heroine  
The Comedic Element of Misunderstanding of *Emma*  
Peer Pressure and Exclusion in *Brave New World* and *Ninety Eighty-Four*  
Literacy and Esther's Character in *Bleak House*  
What Is Wrong with Nelly Dean?: The Sense of Order in Emily Brontë's *Wuthering Heights*  
Bernard's Narrative Failure in *The Waves*  
Views on love in *The Taming of the Shrew* and *Kiss Me, Kate*  
Law and Order on the Ship: The Language of Sailors in *The Bird of Dawning*

### 米 文 学

Interpreting Diaspora: An Analysis of Min Jin Lee's *Pachinko*  
The Ending of Adventures of *Huckleberry Finn*  
A Study of the Narrative of *Winesburg, Ohio*  
Narrative and Context in Poe's "Ligeia"  
Loquacious and Obscene Portnoy: The Self-Conscious Discourse of an Intellectual Jew  
Narrative and Vision in *The Turn of the Screw*  
Caroline Compson as the Mother in *The Sound and the Fury*  
A Study of the Jewishness in *Goodbye, Columbus*  
A Study of *Adventures of Huckleberry Finn*: On Huck and Jim's Separation and Reunions  
F. Scott Fitzgerald's View of Class in *The Great Gatsby*  
The Requirements for Being a "Beautiful" Grotesque: What George and Helen Get on the Hill in *Winesburg, Ohio*

# ドイツ語ドイツ文学

## ◇教員◇

教授 宮田眞治、KEPPLER-TASAKI, Stefan

准教授 前田佳一、山本潤

## ◇学生◇

学部 1名 修士課程 8名 博士課程 17名

### (1) 独文研究室について

独文研究室は、文学部3号館4階、東に三四郎池を見おろし、西に総合図書館前広場を見渡す位置にあって、四季の移ろいと一日の時の流れを鮮やかに感じることができます。ここでの学生生活は、ときには木洩れ日を浴びながらゆったりと、ときには激しく自己の内部の時間と対峙しながら営まれることになるでしょう。

一番大きな中央の部屋にはコーヒー・紅茶・緑茶等も用意されていて、いつも学生や教員が入り出し、研究室全体の談話室ともなっています。そのほかに、ゼミ室、辞書室(兼自習室)、学生室、教員室があります。中央の部屋と辞書室には共用パソコンが置かれ、ゼミ室にはビデオ・オーディオ装置もあって、リートやオペラ、演劇、映画等の鑑賞会場にも、また、コンパ会場にも化けます。

### (2) ドイツ語とドイツ文学について

ドイツ語のあり方をわたしたちの日本語と比べるとき、言語構造以前に目につくのは、英語などとはまた違った意味で国境を越えた言語だということでしょう。国があって国語がある、あるいは、ひとつの言語を使う集団がまとまってひとつの国家を作ってきた、というのではなくて、この言語は中央ヨーロッパの広い地域で使われ、現在はそれが、おもにドイツ、オーストリア、スイス(の大きな部分)に集中している、ということなのです。日常的に使用しているという意味のドイツ語人口は、現在、およそ1億人をかぞえますが、とくに東欧でドイツ語を理解する人は少なくなく、歴史的なドイツ語文化・文学圏となると、さらに大きく広がります。また、汎ヨーロッパ的な移動・移住の歴史も手伝って、ドイツ文学史に登場する詩人・作家・批評家には、ユダヤ系はもちろん、フランス系、イタリア系、スラブ系の名も多く見出されるのです。

ドイツ語・ドイツ文学の歴史は、ゲルマン大移動後、カール大帝の帝国がまもな

く成立する時期にあたる、8世紀半ばの古期ドイツ語の成立をもって始まるとされています。日本では奈良時代のことです。そして12～13世紀、日本でも武家文化が始まったころ、ドイツ文学は騎士文化の一翼を担って最初の隆盛期を迎えます。それから16～17世紀にはルターの聖書翻訳を大きな契機とする新高ドイツ語（近現代ドイツ語）の成立を見、それを言語上の基礎として1800年前後（ゲーテやロマン派の時代）に近代前期の、また、モデルネ期（19世紀末からの約40年）に近代後期の、多様な文学が咲き誇る時代を迎えます。それに続く狂乱の10数年は文学状況にも暗い影を投げかけ、多くの文学者が国外に逃れることにもなりましたが、20世紀後半、分裂国家の状況を背景に東西それぞれに新しい文学が生まれ、さらに20世紀末の再統一を経て、ベルリンに象徴されるように、東西対立とその解消した時代の問題をいわば最前線で経験しているドイツの文学は、現代の状況を集中的に表現しているもののひとつとも言えるでしょう。

ドイツ語といえば、「カタイ」とか、格変化が面倒だとか、の声をよく耳にしますが、ひとつの言語空間は、そうした表面的な印象でまとめてしまえるほど狭いものではありません。グリム童話もエンデの作品もドイツ語で書かれています。ドイツ歌曲の詩も、『ファウスト』も、ホーフマンスタールの流麗な文章も、ドイツ語が紡ぎ出したものです。どの言語も、その言語独自の構造を、メロディーとリズムを、美しさと緻密さを、柔らかさと硬度をもっています。ドイツ語も例外ではありません。そしてドイツ語にも、ドイツ語特有の思考形式と、言語としての全体性が宿っているのです。日本語と比べた場合、概念性が際立つ一方、その概念性もとても具象的なイメージとつながっており、それが概念性を、つかみやすい、生き生きとしたものにしてしていることは、もうこれまで学ぶ中で気づいている諸君も多いことでしょう。母語と英語以外に今ひとつ、別の言語を獲得することは、とても知的刺激に満ち、かつ、自己を相対化しながら広げてゆくのにきわめて有効なことでしょう。

### （3）専任教員の紹介

現在の専任教員を簡単に紹介すればつぎのとおりです。

宮田教授	近現代文学担当。リヒテンベルク、ノヴァーリス、ヴィーラントなどに重点を置いて、現代の文芸理論も参照しつつ、〈啓蒙主義とロマン主義〉がはらむさまざまな問題と可能性を、その前史と後史のなかに探ろうとしている。
KEPPLER-TASAKI 教授	近現代文学担当。ゲーテを研究の中心としながら、近世から20世紀半ばに至るドイツ近現代文学を、祈り・アイデンティティ・メディアという諸領域との関わりで捉えようとする研究を精力的に進めている。

前田准教授	近現代文学担当。特に 20 世紀オーストリア文学を専門としている。インゲボルク・バツハマン、イルゼ・アイヒンガー、ペーター・ハントケ、ハイミート・フォン・ドーデラー等に重点を置きつつ、政治的要因により揺らぎ続けたオーストリアの文化的アイデンティティと文学との関わりを研究している。
山本准教授	中世文学・ドイツ語史担当。『ニーベルンゲン之歌』をはじめとする英雄叙事詩を中心に、ドイツ語圏中世文芸を文化史的視点から研究している。また、中世文芸の近代以降の受容史研究に取り組んでいる。

そのほか、毎年数名の非常勤講師の担当する授業があります。

#### (4) 卒業論文および卒業後の進路について

ドイツ語ドイツ文学専修課程を卒業するには、卒業論文を書かねばなりません。日本語の本文にドイツ語の要約を付します（逆でもかまいません）。ときに卒論を嫌がる学生もいるようですが、独文の学生のなかには、そういう人はほとんど見かけません。卒業後、たとえドイツ語が直接には役立たないところに職を得るとしても、ある程度息の長さを必要とする卒論という形で読みと考えをまとめることは、思考の訓練であるとともに人生において大きな節目を刻むこととなります。参考のために、最近の卒論タイトルを少し下に掲げておきました。

卒業後の進路は他研究室と同じく、大きく分けて、すぐに就職する人たちと大学院へ進む人たちに分かれます。就職先は出版・ジャーナリズム関係、コンピューター関係、銀行や商社、公務員ないし教員等、さまざまです。

#### 最近の卒論タイトル

- 「„Das Urteil“ のテキストが持つ加速性について」
- 「シラー『ヴァレンシュタイン』における合唱団の効果とその背景」
- 「ブラームスのティーク受容—作品 33《ティークのマゲローネによるロマンス》を例に一」
- 『『ガラス玉遊戯』におけるキリスト教世界の役割とその象徴』
- 「ゲーテのタッソーについて」
- 「„Iwein“ における zuht と triuwe」
- 『『晩夏』における教養的美学と『ヴェニスに死す』における退廃的美学の比較』
- 『『ヴィルヘルムマイスターの修業時代』と『ファウスト』におけるゲーテの女性像について』
- 「20 世紀ドイツ自然詩史におけるヴォルフガング・ベヒラー」
- 「Werner Herzog の作品における動物のイメージの変遷の分析」

#### (5) その他

もっと詳しく知りたい人は、本郷のドイツ文学研究室を気軽に訪ねてください。学部生や院生、教務補佐の人たち、あるいは教員がよるこんで相談に乗ってくれるはずです。

## 「学生から」

僕は進学ガイダンスのための原稿を依頼され、談話室で頭を抱えていた。ふだん居心地良く過ごしている独文研究室の日常を、くだけ過ぎずに文学的な矜持を保って紹介するためにはどうすればいいか見当がつかなかったのだ。そこでコーヒーを淹れていた教務補佐のH（ハー）さんは、『魔の山』に研究室を例えてみてはどうかと提案をしてくださり、僕は粗筋を思い起こそうと試みた。この教養小説の主人公が経験する鬱陶気と生活は、独文科のそれに比することができただろうか？

『魔の山』の主人公ハンス・カストルプは、造船技師として就職する直前に、高原のサナトリウムに束の間だけのつもりで滞在する。そこでは無為徒食の安逸な生活が営まれている。社会人としての義務から当分解放されて心に余裕ができた彼は、療養のために豪華な食事を食べ、たっぷり昼寝をしつつ、雑多な本を読み漁り、愉快な先輩の病人たちからも多くの思想を吸収していく。不治の病が支配する、死の世界、一度入ったら二度と出られない『魔の山』で、彼は「教養」を積むのである。下界の日常生活から隔離された高山での、いつ終わるとも知れない療養生活、「永遠の水平状態」の中で、ハンス・カストルプは浮世離れし、時間の感覚を失い、気づけば何年も経ってしまっている。

「そんな空恐ろしい例えをするなんて！」隣で授業の予習をしていた同級生のI（イー）さんが叫んだ。たしかにこの比喩には問題がある。独文科が「一度入ったら二度と出られない」「不治の病が支配する世界」だなんて！ 研究室の学生たちがいかにか學問に熱中して現実感覚を失っているとしても、決して病人や社会不適合者ではありえないし、面倒見の良い教授たちもその病気を助長して一生退院できなくさせる悪い医者などでは決してないはずだ。それに皆が僕のように、「永遠の水平状態」を、すなわち就活もせずに大学院に入院し、談話室にいつもある高いお菓子を遠慮なく食い散らかし、研究題目と関係のない本ばかり寝転がって読み、それを「教養」と称して両親を煙に巻くような、のらくら者の学生生活を送っていると決めつけるのは、真面目な学友たちに非常に失礼であろう。

かれこれ一時間もIさんが分厚い辞書で単語調べをしている光景からも分かるように、独文科の多くの学生たちは、無為徒食どころか、きわめて勤勉である。読書が単なる暇つぶしではなく、地道な研鑽に値する精神の修養であることを心得ている。しかし彼らの禁欲的な努力は心を揺さぶられた読書体験に根ざしているのであり、またその努力こそが再び感動へと通じる道であることも彼らは知っている。素朴な感動と深まる知識とを調和させようと日夜心がけている若い学生たちは、死の世界だなんてとんでもない、真に生き生きとした精神の世界の住人なのだ。

つまり、文学好きの陥りがちな術学とは縁遠い、真摯で物静かな、上品なユーモアを持った人々が共に学ぶのが、この独文科である。原稿を無事書き終えた僕は、Hさんの淹れてくれたコーヒーを飲みながら、明日の新歓コンパで多くの人と語らうのを楽しみにしている。思えば初めての new year から、楽しい仲間と過ごしているうちに、あっという間に丸二年が経ってしまった。僕が時間感覚を失っているとしたら、やはりここは『魔の山』なのだろうか？ そんな空恐ろしいことは、考えないでおこう。

（小林重文 2013年進学）

# フランス語フランス文学

## ◇教員◇

教 授 塩塚秀一郎、王寺賢太

准教授 鈴木和彦、Raoul Delemazure

助 教 深田孝太朗

## ◇学生◇

学部 24名 修士課程 15名 博士課程 22名

### (1) 仏文研究室はどんなところか

フランス語をキー言語として、文学的テキストを読み解く力を養うべく切磋琢磨しあう者たちの集う場所。それがフランス語フランス文学研究室、略して仏文研究室である。

わが国ではこれまで、フランス文学は世界の文学の中でも特別の位置を占めるものとして熱心な受容の対象となってきた。泥棒詩人ヴィヨンの詩やラブレーの破天荒な『ガルガンチュア』から、バルザックやプルーストによる偉大なる小説の探求、ボードレールやランボーによる尖鋭的な詩の冒険。そしてシュルレアリスムから実存主義、構造主義に及ぶ、さまざまな思考の展開に至るまで、フランス文学の歩みは私たちを惹きつけてやまない刺激的局面に満ちている。その魅力と真に触れあうためには、フランス語の原書をひもとく以外に道はない。原典のページを開き、辞書を頼りにひたすら読み進める。それは異国の言語のただなかをさすらう旅への出発にほかならない。仏文研究室では、その旅に必要な知力、体力をはぐくむためのトレーニングが多様な形でほどこされる。

同時にまた、仏文研究室が根本的にきわめて自由で、学生がそれぞれの道を進むがままに任せる寛容の精神を旨とする場所であることも強調しておこう。ラブレーが『ガルガンチュア』中で描き出した理想境である、テレームの僧院を律する規則「汝の欲するところをなせ」は、そのまま仏文のモットーである。小林秀雄や太宰治、大江健三郎を始めとして、これまで東大仏文がおびただしい数の文学者、著述家、そして芸術家を生み出してきた背景には、そうした不羈独立を尊ぶ精神的土壌がある。その伝統はいまも脈々と受け継がれている。

もちろん、教員側はただ放任をこととするのではなく、学生からの質問や相談に喜んで応じ、学生との対話を何よりも大切に考えている。また仏文研究室は修士・

博士課程の学生を多く有する。彼らは先輩として気さくにアドバイスを与えてくれることだろう。

## (2) 仏文ではどのような授業がなされているのか

講義、演習ともに仏文の授業の基本は「**訳読**」である。読んで訳すという語学習得のスタイルは今日、不当な蔑視にさらされている。だが、初級文法の知識を実践の場に活かしつつ、日常会話のレベルを超えた複雑で豊かな意味を含みもつ文章をじっくりと読み解くために、そして自らの理解度を確認しつつ進んでいくためには、訳読ほど頼りになるメソッドは存在しない。冠詞ひとつおろそかにせず、時制や法に十分注意しながら自分の読み取ったところを日本語に移してみることで、いったい自分には原文がどこまで読めているのか、そしてどのような点に理解の不足があったのかがはっきりする。そうやって講義は、各自の準備してきた解釈と教師の解釈とが時にはしのぎを削り、照射しあう場となる。フランス語という異国語で書かれたテキストの「**正体**」を、ともに力を尽くして明らかにしていくことが、仏文の授業の醍醐味である。

もちろん、訳読だけで十分だというのでは毛頭ない。フランス語を**聞き、話し、そして書く**練習もまたたつぷりと積む必要がある。仏文では現在、フランス人教師による授業を週2回開講しており、実践的なフランス語力をいくらでも伸ばしていけるだけの環境が整っている。

2008年度からジュネーヴ大学への、そして2018年度からはさらにパリ第8大学への留学生派遣制度が設けられたことも特筆しておこう。毎年、学部ないし大学院の学生を派遣し、一流の教授陣の講義・ゼミに出席してフランス語の習得に励むと同時に、文学研究の基礎的知識・方法論を学んでもらう。有意義な留学生生活を満喫した後の進路は、大学院で研究を続けたり、社会に出て活躍したりとさまざまである。留学を希望する学生は、フランス語力に研ぎをかける必要があることはもちろん、留学事情について自分で情報を収集したり、経験のある先輩方に話を聞くなどの準備を進めたりする必要もある。全学交換留学に制度が変わったことにより、フランスのストラスブール大学、グルノーブル・アルプ大学への語学研修留学が可能となったことも付言しておく。

また、仏文研究室は世界のフランス文学研究者や作家、批評家がひんばんに訪れる、国際的な交流拠点の一つであり、いわば東京にいながらにしてソルボンヌの講義に連なる気分を味わうような機会に事欠かない。

## (3) 教員の専門と授業

ここで仏文科の教員をご紹介します。現在、専任教員は4名である。

**王寺賢太教授**は、モンテスキュー、ルソー、ディドロなど18世紀フランスの哲学者の政治・経済・歴史思想が専門。そのかたわらアルチュセールやフーコー以下、20世紀の哲学者たちの仕事にも旺盛な関心を示してきた。現在、Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des Européens dans les deux Indes* (Centre international d'étude du XVIII<sup>e</sup> siècle) の批評校訂版共同編集責任者。著書に『消え去る立法者 フランス啓蒙における政治と歴史』(名古屋大学出版会)。著編著に日本の「近代の超克論」を再検討する *Éprouver l'universel. Essai de géophilosophie* (Kimé、共著) や、「68年の思想」の意義を説く『現代思想と政治——資本主義・精神分析・哲学』(平凡社、共編) など。講義では、上記の18世紀と20世紀の作家・思想家を中心に、〈考えること〉と〈書くこと〉・〈読むこと〉の関係に焦点をあわせて講義を行っている。

**塩塚秀一郎教授**の専門は、ジョルジュ・ペレックなどウリボ作家を中心とする近現代文学。著書に『ジョルジュ・ペレック 制約と実存』(中央公論新社)、『レーモン・クノー 〈与太郎〉的叡智』(白水社)、『逸脱のフランス文学史 ウリボのプリズムから世界を見る』(書肆侃侃房)、クノーにおける〈知〉の概念を検討した仏文著書 *Les Recherches de Raymond Queneau sur les fous littéraires. L'Encyclopédie des sciences inexactes* (Eurédit) がある。近年はフランソワ・ボン等の近現代作家について、都市の日常、プロジェクト・アート、歩行などのテーマを設定して研究している。また、Eの文字を使わずに書かれたフランス語原文を〈い段〉抜きの日本語に翻訳したペレック『煙滅』(水声社)のほか、クノー『あなたまかせのお話』(国書刊行会)などの訳書がある。近年の演習・講義では、レリス、ゾラ、ボンジュ、ヴェルヌ、ネルヴァルなどの原書講読のほか、アトリエ・デクリチュール(文章教室)の実践を行っている。

**鈴木和彦准教授**の専門はシャルル・ボードレールを中心とする19世紀文学で、フランスにおけるロマン主義の盛衰の諸相を歴史的に考察している。文学作品ではとりわけ詩を専門とし、現代詩人の翻訳紹介にも取り組んでおり、ミシェル・ドゥギー『ピエタ ボードレール』(未来社)やジェラルム・マセ『オーダーメイドの幻想』(水声社)などの訳書がある。授業では19世紀文学講読(ボードレール、ランボー、フローベール、ユゴーなど)、中世から現代にいたる仏語詩講読(デュ・ベレー、デボルド=ヴァルモール、セゼール、サクレなど)のほか演劇、あくまでも自分の声と体で実地に演じるものとしての演劇に関心があり、演習では新旧の戯曲をフランス語で上演する(モリエール、イヨネスコ、レザ、ポムラなど)。これはゆくゆくは授業の枠を越えたフランス語演劇集団を立ち上げる計画であり、興味のある学生諸氏の参加を心待ちにしている。

**Raoul Delmazure准教授**の専門はジョルジュ・ペレックとロラン・バルトを中心とする20世紀文学。著書に*Une vie dans les mots des autres. Le geste intertextuel de Georges Perec* (Classiques Garnier)があり、このなかでは現代文学における間テキストの利用がいかなる形式を持ち、いかなる問題をはらむのかが分析されている。現在は*Dictionnaire Georges Perec*の出版を準備中。最近の研究では、引用やモンタージュといった芸術形式の歴史と、芸術家によるそれらの形式の活用の関係に注目している。芸術家は主観的なやり方で、特定の歴史的・社会的文脈にのっとった意味を形式に与えるのである。近年の演習・講義では、研究の方法論やアカデミック・ライティングの授業のほか、フロベール、ジッド、セリーヌ、シャール、カミュ、デュラスといった19世紀・20世紀の主要な作家の講読を行なっている。

フランス語学フランス文学の研究対象は多岐にわたるため、専任教員だけではとてもカバーしきれない領域が残る。そうした領域については、毎年学外から専門家の方々を非常勤講師として招き、その研究成果をご披露いただいている。今年度は、高名康文講師（成城大学・中世文学）、浜永和希講師（19世紀詩）、鈴木雅生講師（学習院大学・20世紀文学）、木島愛講師（千葉工業大学・言語学）に出講をお願いしている。それぞれの専門を活かした講義では、フランス語学および古フランス語、近代詩、現代文学の専門的研究を通じて、幅広い専門分野を学ぶことが可能である。

フランス文学は時代順にいつて武勲詩・聖杯伝説などの中世文学、人文主義、古典主義、啓蒙主義、ロマン主義、自然主義、シュルレアリスム、実存主義という文芸思潮をたどり、しかもそのすべてにおいて時代の先端をゆく作品を産み出してきた。一国文学でありながらヨーロッパ世界の精神史の流れを先取り、ないしリードしたとってよく、これをたどることによって、副産物として、世界文学への展望を容易に把握することもできる。学部でその基本をまず学ぶことによって、複雑な様相を呈している現在の状況への認識をさらに深める道が切り開かれることだろう。

#### （４）卒業後の進路

一般企業や金融関係、公務員、あるいは新聞・放送・出版、さらには図書館関係や教職など、多岐にわたっている。ただし教職に関しては、現状では高校段階まではフランス語担当で教職につくことはほとんどありえないため、在学中に英語、国語その他の教科単位を修得するものが多い。

また、学部2年間の学習では物足りないという諸君は、大学院修士課程に進学して研究を深めることをお勧めしている。大学院入学希望者は、本学以外からの志望者も含めて定員の約3～4倍程度。最近は、修士号を取得した上で就職する学生が

増え、一般企業や、新聞・出版関係に就職している。なお、博士課程に進学すると将来はほぼ教育職研究職に限定され、その就職先は容易には見つからない。博士課程への進学に際しては、自分の適性と待ち構えている苦しい将来を考えあわせた上で、相当の覚悟をもって臨む必要がある。

#### (5) 最後に

仏文においてすべての基本となるのはフランス語力だが、これは地道に練習を重ねればだれでも等しく上達を望めるものである。努力さえ怠らなければ、ある時点で急に自分が「離陸」した実感を抱けるはずだ。聞き、理解する力さえあれば、インターネットを通して24時間フランス語に接することができる現在の環境を積極的に活用し、世界をどんどん広げてほしい。各自が自由に、のびのびと学ぶのが仏文研究室の伝統であることをもう一度、強調しておこう。臆せずその門をくぐっていただきたい。



鈴木和彦准教授「フランス語学フランス文学特殊講義 フランス語で演劇を上演する」  
サミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』上演の様子（文学部3番大教室）

# スラヴ語スラヴ文学

## ◇教員◇

教 授 楯岡求美

准 教 授 平松潤奈

助 教 宮川絹代

## ◇学生◇

学部 5名 修士課程 4名 博士課程 3名

## スラヴ語スラヴ文学研究室とは

スラヴ語スラヴ文学研究室は小さいながらも個性あふれた研究室です。ロシアはもとより、西はドイツに至るまでのヨーロッパ中部、北はバルト海沿岸から南はバルカン半島まで、広くスラヴ世界の言語文化の研究に取り組んでいます。地域の多様さだけではありません。研究分野も、スラヴ諸語比較言語学、ロシア、ポーランド、チェコなどスラヴ諸地域の言語と文学、映画・演劇など諸芸術や文化、フォークロアなど、多様です。その広大で多彩な領域を逍遙し、自分のテーマを見つけ出すことは必ずしも容易ではありませんが、大きな楽しみでもあります。

## 特色

本専修課程の特色は、中世から近代・現代に至るまでの約1000年に及ぶスラヴの語学・文学・文化を、幅広く視野に入れている点にあると言ってよいでしょう。スラヴ学においては、文学研究と言語研究は車の両輪のように不可分の関係にあるという考えを持ち、言語と文学の双方の教育と研究に力を入れてきました。現在の専任教員はロシア文化を専門にしていますが、ロシアのみならず、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ等、さまざまな地域の言語と文化についても学習できるよう、授業を開講しています。また映像を扱う授業では、時に学内外の専門家の方々にも協力をいただき、みなさんが文化的多様性を具体的に理解できるよう工夫しています。

個人の人生経験は狭く限られたものですが、言語の形成・変遷を追うとき、また、作家たちの深い洞察力によって描かれたスラヴ文学のしばしばエキセントリックにも思える世界に入りこむとき、多彩なものの見方をシミュレーション体験する機会が得られることと思います。

## 国際交流

教員、大学院生、学部生を問わず、学問上の経験や専門分野の違いを超えた自由な交流を尊ぶ気風は、研究室の良き伝統として受け継がれてきました。開かれた研究環境をモットーに、国内外から研究者、作家、アーティストなどの来訪者を積極的に受け入れ、講演会、シンポジウム、映画上映会なども積極的に開催しています。

研究会や読書会では授業とは一味違う「スラヴ文化体験」をすることもできますでしょう。

## 駒場からの進学にあたって

ロシア語の基礎的な学力を身につけておくことが望ましいですが、進学を希望するようになってからロシア語などを勉強しはじめた学生も少なくありません。スラヴ語も印欧語族ですから、英語、ドイツ語、フランス語など西欧諸語についての知識も、スラヴ文化を学ぶ際に強力な武器にもなります。広い視野をもって積極的にさまざまな言語を学び、幅広い知識を習得されるよう、お勧めします。

## 留学

東京大学は、ワルシャワ大学、サンクトペテルブルク大学などスラヴ圏の大学とも協定を結んでいます。その他の大学への留学に際しても個別に相談にのったり、語学研修などについても各大使館等からの情報を提供しています。

## 卒業生の進路

出版社や報道関係、一般企業などさまざまな仕事に就く人と、大学院進学を目指す人がほぼ同じぐらいの比率です。近年では修士課程修了後に一般企業へ就職するのも普通になりました。セルビアやカザフスタン、ベラルーシなど専門調査員として在外公館に赴任したりする人もいて、選択肢が多様化してきました。

## 研究室のヒストリー

本専修課程は1972年に創設された「ロシア語ロシア文学」専修課程を母体とし、1994年「スラヴ語スラヴ文学」専修課程と名を改めました。といっても、ロシアはスラヴの周辺諸国との文化的つながりも深いので、1972年当初からロシアに限らず「スラヴ学」というより広い視点からのアプローチが重要だとする認識があり、スラヴ語スラヴ文学に関する多言語多文化の授業を開講してきました。

チェコ語については、2013年度に授業を開設し、2016年度からは現代文芸論研究室にチェコ文学が専門の阿部賢一先生が赴任したことで、スラヴ研究室でもチェコの言語と文化の研究指導を受けることができるようになりました。

## 授業の一例

【スラヴ諸語の初級】 上述のように、本研究室では現在、ロシア語以外に、ポーランド語やチェコ語、ブルガリア語、ウクライナ語の授業が開講されています。

【ウクライナの多様な文化を学ぶ】 2022年度から、日本ではこれまであまり取り上げられてこなかったウクライナに焦点を当て、多言語多文化状況への理解を深める授業「ウクライナの多様な文化を学ぶ」を開講しています。

授業ではしばしば、他大学や外国からもゲスト講師を招き、広い視野で多角的な研究を行うことを目指しています。

他大学のスラヴ学科との研究交流の機会も増えています。

## 2年生も単位履修できる持ち出し授業

【旧ソ連東欧の映像と文学】／【ロシア・ソ連文学読解】 言語学的な授業や、文学作品の講読・分析を行う授業の他に、ソ連・旧東欧の映画を鑑賞し、その地域の専門家が解説を行い、歴史や文化に対する理解を深めることを目的とする授業もあります。

【スラヴ文学史概説】の授業とともにロシア語を必須としない授業とし、スラヴ研究室以外の学生・院生のみならずとも、スラヴ地域について学び、考える機会を作る試みです。

## 最近の学位取得論文

本専修課程で最近、学位を取得した学生の論文も一部ご紹介しましょう。

博士論文	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「オレーシャ『羨望』草稿研究」(『オレーシャ『羨望』草稿研究：人物造形の軌跡』として刊行、東京大学而立賞、日本ロシア文学会賞受賞)</li> <li>● 「アレクサンドル・ブローク 批評と詩学 一焼身から世界の火災へー」(『アレクサンドル・ブローク詩学と生涯』として刊行、東京大学而立賞、サントリー学芸賞受賞)</li> <li>● 「近代ロシア文学形成期における啓蒙と「感傷」：O. П. コゾダヴレフの手法をめぐって」(『ロシア啓蒙主義の迷景 エカチェリーナ二世時代の官僚作家が目指した近代』として刊行)</li> <li>● Representations, Discourses, and Ideologies on Languages in Post-Maidan Ukraine</li> </ul>
修士論文	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「ヴァルラーム・シャラーモフの短編作品群『コリュマ物語』における自然観」</li> <li>● 「ユーリー・ノルシュテインとエドゥアルド・ナザーロフのアニメーション作品における自然描写の比較」</li> <li>● 「ソルジェニーツィン『第一圏のなかで』について スターリンと外交官ヴォロディンの人物像形成を中心に」</li> <li>● 「アンドレイ・ペールイ『ベテルブルク』における都市空間についての分析 ―ドゥートキンの屋根裏部屋を中心に―」</li> </ul>

修士 論文	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「第2母音重挿の音韻論的考察」</li> <li>● 「ドストエフスキーの語りの商業的仕掛け—『カラマゾフの兄弟』と近代—」</li> <li>● 「ファンタジーと伝道—ユーリヤ・ヴォズネセンスカヤ『私の死後の冒険』研究」</li> </ul>
卒業 論文	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「ゴーゴリ作品におけるペテルブルク表象—「ネフスキイ大通り」を中心に—」</li> <li>● 「イヴォ・アンドリッチ『ドリナの橋』における「永続性」と「忘却」</li> <li>● 「『カラマゾフの兄弟』イワンの無神論について」</li> <li>● 「カレリア共和国と『カレワラ』」</li> <li>● 「書記言語の社会的意味：北イタリアのスロヴェニア語レジア方言を例に」（2023年度文学部長賞、総長賞受賞）</li> </ul>

## スタッフからの自己紹介です

以下、研究テーマと授業で扱う内容などについて紹介します。

学生・院生の多様なテーマに対して、丁寧に相談に応じることを心がけ、国内外のつながりのある専門家にアドバイスをもらえるよう、環境を整えています。

### 楯岡求美教授：

多民族国家ロシア・旧ソ連圏のロシア語文学、演劇、映画などを研究対象としています。特に20世紀初頭のロシア・アヴァンギャルドの時代、戦争や革命などによる大きな社会変動の中で、使い古された表現を捨て、意味と記号の関係を刷新する実験的な表現が探究された時代に興味を持っています。テレビやハリウッド映画などに見られる喜怒哀楽を自然に表現する演技もこの時代のロシアで形作られ、今の私たちの意識や世界観の土台となっています。ユートピアや自分探しを志向し続けるロシア語文化をモデルケースとして、近現代の意識を形作ってきた価値観を相対化するような研究をめざしています。

### 平松潤奈准教授：

19世紀後半から20世紀にかけてのロシア・ソヴィエト社会が、どのように西欧近代の諸価値を受け入れ、発展させるとともに、反発し、対抗原理を生みだしてきたのか、その過程を文学テキストのなかを探っています。身体表象、メディア論、検閲論、新経済批評などの多様な観点を取り入れ、文学テキストを歴史的・社会的文脈に開くようつとめています。特に専門としてきたのは、スターリン時代の公式文学や反体制作家ソルジェニーツィンの作品ですが、最近では、19世紀文学（主にドストエフスキー作品）や、21世紀のポストソヴィエト時代の記憶の問題にも関心もっています。

### 宮川絹代助教：

1917年のロシア革命を機に国外に亡命した作家や詩人による第一次亡命ロシア文学を研究対象としています。第一次亡命ロシア文学は、亡命前に文学活動を開始した「年上の世代」と、亡命後に開始した「年下の世代」という二つの世代の間で異なる特徴を持っていますが、どちらも失われた「ロシア」に対する強い希求を宿します。そこに生まれる「ロシア」という幻想を探りながら、国や文化の個別的特殊性について、また、それを超えた普遍的な自己と他者の問題について考え続けています。特に文学作品に現れた知覚イメージに関心があります。

F Bでは研究室の企画以外にスラヴ文化に関するいろいろな情報を提供するようになっています。二次元バーコードがありますのでご利用ください。

#### スラヴHP



<https://www.u-tokyo.ac.jp/slav/>

#### スラヴFB



<https://www.facebook.com/SlavicStudiesUTokyo/>

# イタリア語イタリア文学

## ◇教員◇

教 授 土肥秀行、Lorenzo Amato

助 教 長野徹

## ◇学生◇

学部 3名 修士課程 2名 博士課程 3名

2025年4月1日、「イタリア語イタリア文学」に改称した研究室は、伊文学を中心とする研究教育姿勢をさらに推し進め、毎年発行の論文集『イタリア語イタリア文学』の記念10号は、ほぼ全面イタリア語によるダンテ特集号である（オンライン参照可）。常に研究室と講義の見学が可能（要予約l\_sel@l.u-tokyo.ac.jp）。

## ○ 本研究室の概要

国内では京都大学に次いで2番目、現時点で最新の、イタリア語イタリア文学に特化した研究室である。1979年、文学部に「イタリア語イタリア文学」研究室として設置され、1994年から2025年3月までの31年間は「南欧語南欧文学」と称した。目下、創設から半世紀となる2029年を目指し、研究室の再活性化を図っている。

現代のイタリア語を学ぶと、800年前に成立したダンテ『神曲』まで読めちゃうとまことしやかに言われるように、文学語の伝統の強さはイタリア文学の特徴のひとつである。古典の時代以降、各年代（ルネサンス、バロック、近現代）を代表する作家と作品によって、イタリア文学の伝統は力強く受け継がれてきた。それは明治中期以降、日本に積極的に紹介されてきたとおりである。イタリアの文学と文化の受容には、ヨーロッパやキリスト教の精神を知るため、同盟国間の文化理解を深めるためといった社会的・政治的意図がはたらいていたが、文学テキストをそれそのものとしてとらえようとするアプローチが、20世紀の後半になってようやく可能となってきた。その受け皿としての意義が本研究室に認められる。

現在は3名の専任教員（日本語母語者2、フィレンツェ出身のイタリア語ネイティブ1）、および5名（うちイタリア語ネイティブ1）の非常勤講師が授業を担当し、まずはイタリア語で書かれたテキストを正確に読解する訓練を施す。それだけでなく、作文や会話の面でも現代イタリア語の運用能力がしっかり身に付けられ

るよう、カリキュラムを組んでいる。学生は各自の関心に従い、専任教員と協議しつつ、卒業論文のテーマを選ぶことになるが、その幅は、中世末の韻文からファシズム期以降の小説までと限りなく広い。毎年、平均では、教養課程から進学する者、学士入学する者、大学院に進む者、それぞれ1から2名である。学部卒業後の進路はさまざまであるが、大学院を修了したのち、研究職に就くだけでなく、翻訳業で活躍する者もいる。

本研究室における研究活動は、紀要『イタリア語イタリア文学』に収斂する。この学術誌は、年1回発行、査読付き、伊語もしくは日本語での執筆が可能である。国内外の研究者が訪れては、夏季集中講義、講演会やシンポジウムを行っている。近年では中国温州キーン大学のTommaso Pepe講師、米バード・カレッジのFranco Baldasso准教授、仏リヨン第3大学のAlessandro Martini教授らが客員研究員として滞在した。イタリア文学とはいえど、特に東アジア圏での連携をまずは研究者同士で図っていくことを当面の課題としている。

## ○ イタリア語イタリア文学について

イタリア語は、ラテン語の故地で形成された言語だけあってラテン語の風格をよく保っている。最古文献の作成された年は西暦960年（モンテカッシーノ修道院の所領地をめぐる裁判記録の中に見いだされる）であり、フランス語の初出文献より120年ほど遅れるが、これは西欧中世の共通文語であったラテン語が、イタリア半島の文化に深く根づいていたためである。

イタリア語（俗語）を用いた文学作品は13世紀初頭より現われるが、同世紀末より14世紀にかけて**ダンテ**（叙事詩）、**ペトラルカ**（抒情詩）、**ボッカッチョ**（散文）というイタリア文学史の最高峰をなす作家の輩出をみる。その背景に他の西欧諸国に先駆けてイタリアに興りつつあったルネサンス運動のあったことはいうまでもない。トスカーナ地方出身のこれら三大作家の功績により、イタリア標準文語の実質的な形成が14世紀になされたことは特筆すべき事柄である。以後今日に至るまでイタリアの標準文語の基本的性格は大きくは変わっていない。

14世紀以後も、叙事詩（**アリオスト**等）、抒情詩（**レオパルディ**等）、劇詩（**メタスタジオ**等）、戯曲（**ゴールドーニ**等）、小説（**マンゾーニ**等）、批評（**クローチェ**等）、思想（**ヴィーコ**等）など、イタリア語を用いるあらゆるジャンルで活発な活動が展開されてきた。また、地方文化の多様性を特色とするイタリアでは、標準語と同じくラテン語から派生したとはいえ、標準語とは様相を異にする方言が全土で根強い生命を保っている。方言を用いた文学作品にもみるべきものが少なくない。

イタリア語は西ヨーロッパ文化圏において有数の豊饒さを誇る文学を生み出し、

イタリア文学はその文化的先進性によって、他地域の文学に大きな影響を及ぼしてきた。イタリア語イタリア文学を学ぶことは、近代西欧文化の根底に触れ、その行き届いた理解を得る上で重要な契機となる。

## ○ イタリア語イタリア文学の授業について

講義を通して、できるだけ多様な作家・時代・ジャンルに触れられるようカリキュラムが組まれている。

講義を担当する専任教員2名（詳しくは後述）のうち、ネイティブ教員のロレンツォ・アマートが、実践的なイタリア語運用能力（話す、聞く、書く）を育むレッスンのみならず、専門のルネサンス文学における諸ジャンル（韻文・説話・評論文）それぞれについての講読授業を担当している。対象作家には、ダンテ、ボッカッチョ、ペトラルカがかならず含まれる。近年、ミュンヘン大学とボローニャ大学で招聘客員教授を経験している。もうひとりの専任教員である、近現代文学を専門とする土肥秀行が、近現代のイタリア文学史を講じ、20世紀小説（パズリーニ）や前衛芸術（初期未来派）における言語表現の講読を行う。近年、ボローニャ大学とリヨン第三大学で招聘客員教授を経験している。

非常勤講師の面々は、人文主義の中心に位置するアルベルティ（横田太郎）、18世紀の劇作家アルフィエリ（大崎さやの）、19世紀最大の詩人レオパルディ（古田耕史）、初期リアリズム文学を代表するヴェルガ（倉重克明）といった、思想史・文学史上重要な文人を専門としており、授業でもしばしば扱う。くわえてイタリア語学を専門とする講師（土肥篤）が、イタリア語史と文学の関係を講じる。

## ○ 3名の専任教員の紹介

卒業論文と大学院生の研究に関して、専任教員が積極的にサポートを行う。

教授の**ロレンツォ・アマート**は、ルネサンス期のフィレンツェで書かれた16世紀韻文を扱う文献学者として、未刊行の資料をアーカイブから掘り起こしている。過去には、フィンランドのユヴァスキュラ大学ではイタリア語とイタリア文学を教えた経験をもつ。北欧から南欧までに広がる古典学の国際的な研究者ネットワークの一翼をなし、国際学会に定期的に参加、また国内でのシンポジウム開催を年に数度催している。

もうひとりの教授の**土肥秀行**は、20世紀文学を中心に研究を行ってきた。なかでも映画で知られる詩人パズリーニのフリウリ方言詩、日本の詩歌の影響で短詩形を試みたウンガレッティ、ヨーロッパ前衛のはしりである未来派の宣言文を扱ってきた。授業では、現代文学のほかに、日本であまり研究されることのないバロック文

学、詩人マリーノを取り上げている。イタリア、アルゼンチン、アジアのイタリア研究者との連携を深めるシンポジウムやセミナー活動を行っている。

専任の助教である長野徹は、研究室運営に携わる一方、現代イタリア文学と児童文学の数多くの作品を訳してきた。ディーノ・ブツァーティ『動物奇譚集』の訳業により、2023年に須賀敦子翻訳賞を受賞した。

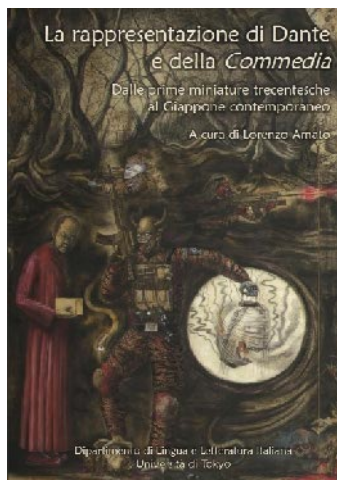
## ○ 進学を考えている人へ

進学者は、教養学部において、イタリア語の授業（初修クラスあるいは第3外国語初級・中級その他イタリア語関連の授業、土肥も「外国文学」枠で伊文学を講じる）を履修した人が中心となるであろうが、やる気さえあればイタリア語未習でも構わない。本研究室では、スペイン語やポルトガル語の授業も開講しているので、旺盛な好奇心でチャレンジしてもらいたい。またラテン語（できれば併せて古典ギリシャ語）の知識は、イタリア語との近さから、イタリア文学を理解するのに役に立つ。文学部では、多様な世界文学に浸るだけでなく、思想や歴史や社会学といった諸分野への無限な広がりをも存分に味わう2年としてほしい。

少人数でなされることの多い授業は、学び甲斐があるだろう。教員側としては、できるだけ風通しのよい研究室運営により、様々な声があげやすくなるよう心掛けている。



ヤコポ・ペザレージ氏講演会風景



研究室論文集『イタリア語イタリア文学』  
第10号の表紙

## 現代文芸論

### ◇教員◇

教 授 柳原孝敦、阿部賢一

准 教 授 藤井光

助 教 須藤輝彦

### ◇学生◇

学部 25名 修士課程 12名 博士課程 25名

### (1) 現代文芸論はどんなところで、どういう人に向いているか？

現代文芸論は2007年に発足した、比較的新しい研究室です。この研究室が何を目指し、どういう人に向いているか、最初に簡単に説明しておきましょう。

現代文芸論は、世界の文学を、日本文学も世界文学の一部として視野に入れながら、現代的な観点から研究する場所です。きちんとした枠組みによって規定され「できあがった」ディシプリンとはまだ言いにくいかもしれませんが、私たちが目指しているのは、新しいディシプリンの確立というよりは、むしろ、伝統的な一国一言語別の「縦割り」を越え、様々な言語や作家たちの声が響き交わす出会いの場を作り出すことです。そういった研究室の精神を反映して、雰囲気はとてもオープンで、他専修課程の学生の皆さんや、様々な国の研究者が研究室に常時出入りしています。

そして、様々な分野に挑戦する学生・院生たちの交流の場を作るために、現代文芸論研究室では年に一回研究合宿を行うほか、作家や詩人や他大学・外国の研究者をゲストとして招いてシンポジウムや講演会などを活発に行っています。このように活気ある新しい研究室の輪郭をいっそう魅力的なものにしていくのは、私たち教員とともに、従来の枠組みを越えて開かれた可能性を探求していく学生のみなさんひとりひとりです。ぜひ、目の前に開ける未踏の沃野の開拓者となってください。

現代文芸論研究室の創設の出発点となったのは、広く世界の文学のありかたを視野に入れ、現代の文芸研究の成果を踏まえて広く世界の文学を研究する場を文学部に作る必要があるという認識でした。誤解のないように強調しておけば、この専修課程名はもっぱら「現代文学」を扱うという意味ではありません。20世紀の越境的な文学・文化研究の成果を踏まえ、21世紀の現代の観点から文学に新たな光を当てたいという意味で「現代」なのであって、近代以降の文学全般が視野に入ります。したがって、ここで扱い得る具体的な研究対象（作家、言語、地域、時代など）は

多様です。

そのため現代文芸論での勉強は単位選択の幅も広く、とても自由だとも言えますが、その反面、広い選択の幅の中で自分なりの研究の筋道を作っていくかねばならないだけに、他の専修課程よりも自律性を求められることも覚悟してください。私たちの専修課程は、既存のディシプリンの枠にはまらない領域に挑戦しようという意気込みのある学生を歓迎します。また、文学を研究したいのだけでも、まだどれか一か国に専門を絞りきれない、といった皆さんに対しても、現代文芸論は門戸を開いています。

## (2) 現代文芸論の発足

現代文芸論専修課程は、西洋近代語近代文学専修課程（以下「西近」と略記）を基礎にし、それを改組して2007年度に発足しました。これにともなって、「西近」の略称で親しまれてきた専修課程はなくなりましたが、実質的に西近の研究・教育内容はそのまま現代文芸論専修課程に引き継がれています。それまで西近は、専任教員を持たず、他専修課程の教員の兼任によって運営されてきましたが、現代文芸論は専任教員を持つ、完全に独立した専修課程です。

また、西近には大学院課程がありませんでしたが、2007年4月には人文社会系研究科欧米系文化研究専攻の中に、現代文芸論専門分野の修士・博士課程が新設されることになりました。これは学部の現代文芸論専修課程の上に直結した大学院課程で、その趣旨や基本的な教授陣は学部の場合と同じですが、欧米のバックグラウンドから近現代日本文学を研究対象として視野に入れることも可能になるので、大学院課程では日本文学研究を目指す外国人留学生を積極的に受け入れる点が、これまでと異なる大きな特徴になっています。

## (3) 授業カリキュラムと研究分野

具体的な授業カリキュラムについて言えば、従来の西近の基本的な枠組みを受け継ぎ、西洋近代を中心に、複数の言語や地域にまたがって世界の文学を幅広く見ることを基本方針としています。そして、欧米の近現代文学の研究を基礎としながらも、伝統的な一国一文学の枠内に収まらないような分野や、既存の専修課程で扱いきれないような言語・地域なども視野に入れてカリキュラムを編成します。

授業の履修のしかたについて言えば、現代文芸論の専任教員による演習や講義が中心になるのは当然ですが、それ以外に、各自の興味と専門に応じて欧米文学および日本文学に関する様々な他専修課程の授業を履修し、一定程度まで卒業に必要な必修科目として認定を受けることができます。このように柔軟な「認定科目」制度を設けている点は、西近以来受け継がれてきた大きな特徴です。また現代文芸論の

学生は、従来の西近と同様、広い知見を養うため、三言語以上の分野にわたって学習することが求められます。

具体的には、以下のような分野を積極的に扱うのが、現代文芸論専修課程の特色と言えるでしょう。

- ・ 翻訳論——その理論と実践
- ・ 批評理論
- ・ 欧米の一国一言語に限定されない視点からの文学研究全般（亡命文学、越境的な文学、世界文学論、文学におけるバイリンガリズムなど）
- ・ ラテンアメリカ文学、広域英語圏文学、中東欧文学など、既存の専修課程の枠内では専攻できない言語文化

専任教員の専門をごく簡単に紹介すれば、**柳原孝敦**教授はラテンアメリカ文学・広域スペイン語圏文化を扱います。**阿部賢一**教授はチェコを中心とした中欧文学論、ボヘミア文学概説、比較文学の観点からは現代文学論、文化批評などの授業を担当します。**藤井光准**教授は現代英語圏の小説の読解と翻訳の授業を担当します。**須藤輝彦**助教は20世紀チェコおよび中央ヨーロッパ、そして啓蒙期のフランス文学を中心とした授業を通じて学生指導の一翼を担うとともに、学務上の事柄全般について研究室の要となります。

その他、文学部内からの協力教員として、英文の阿部公彦教授・仏文の王寺賢太教授が批評に関する演習を受け持ちます。

ただし、現代文芸論の扱う範囲は非常に広く、文学部のスタッフだけでは扱い切れない分野については学外からの非常勤講師の方々に補っていただいています。非常勤講師陣による授業が多彩で充実していることも、本専修課程の特色の一つです。過去数年の実績の中から、非常勤講師による授業をいくつか選んで挙げてみましょう。

「バスクの言語と文化」	「アルジェリア文学入門」
「島嶼文学論」	「文芸批評」
「Creative Writing and Reading」	「ジェンダー、クィア理論で読む日本文学—古典文学から震災文学まで」
「チベットの言語と文化」	「ベルギー・オランダ語圏の言語と文化」
「現代アラブ文学への招待」	「文学と翻訳」
「アイマラ語とアンデス文化」	「世界の中の日本」
「イディッシュ語と東欧ユダヤ人の文化」	「英語で書かれた現代小説を訳す／読む」
「現代日本のポップカルチャー」	「フィンランドの言語と文化」
「書物と読者の近代」	「日系ブラジル移民の芸能と文学」

「アイルランド古今詩歌集を立ち上げる」	「語学文学と翻訳」
「ブラジルの文学と音楽」	「リトアニアの言語と文化」
「ケアと文学」	「現代文学とトラウマ」

これらの授業の多くは、文学部の既存の枠組みの中ではなかなか学ぶことのできない分野を扱っており、現代文芸論の学生に限らず、文学部の他専修課程の様々な学生の興味と必要に応えるものになっています。現代文芸論では、今後も多彩な授業メニューを充実させていくことを重要な課題と考えています。

#### （４）専修課程の理念と歴史——西洋近代語近代文学から現代文芸論へ

もともと「西洋近代語近代文学専修課程」（西近）は、文学部の言語文化系の中でも異色の存在でした。外国語外国文学を専攻する場合、一か国・一言語に限定して研究するのが常道であり、そうでなければ研究のディシプリンが成り立たないと考えるのが普通ですが、「西近」の場合は、特定の一言語に視野を限定せず、複数の言語（三言語以上）にわたって学習することを前提に、近代ヨーロッパ諸国の言語や文学をヨーロッパ的全体の広がりの中でとらえ、研究しようとしてきたからです。

その背後には、ヨーロッパは多様でありながら互いに多くの共通性を持った文化共同体だという考え方がありました。その全体像を視野に入れるように努めることが、「西近」の基本的な理念だったといえるでしょう。私たちは様々な国を十把一絡げにして便宜上「西欧」と呼んでしまうことがしばしばありますが、その実体は決して英独仏等の国々の単なる寄り合い所帯ではなく、一か国に限定されない広い視野で研究して初めて見えてくるヨーロッパの姿というものがあるはずです。現代文芸論では、このような考え方を受け継ぎながら、ヨーロッパからより広い現代世界に観点を拡張し、世界の文学を（近代日本も視野に入れ）理論と実践の両面から幅広くとらえることを目指していきます。

どのようにしてこのユニークな専修課程が生まれたのか、ごく簡単に沿革を振り返っておくと、西洋近代語近代文学専修課程は、昭和38年（1963年）度に文学部の語学文学系が第三類として再編成されたとき、西洋古典学専修課程と同時に創設されました。もともと専任教員を持たず、欧米語学文学系学科の共同運営という基礎の上に成り立った課程でしたが、昭和55年（1980年）度以降、運営の主体をロシア語ロシア文学（現在のスラヴ語スラヴ文学）専修課程に置くことになりました。「西近」だけを本務とする専任教員を持たない状態のまま、文学部には珍しいインターディシプリナリーな専修課程を維持・運営するのは、必ずしも容易なことではありませんでしたが、主としてスラヴ文学の川端香男里教授および栗原成郎教授の努力のおかげで「西近」は従来の伝統的なディシプリン間の空隙を埋める専修課程とし

て定着しました。さらにそれを発展させて沼野充義教授と柴田元幸教授が発足した現代文芸論に、野谷文昭教授を迎え、文学部の新しい伝統の一環を担うことになりました。

なお、現代文芸論専修課程についてより詳しい情報は研究室のホームページ (<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/genbun/>) を参照してください。授業の時間割や行事の案内なども掲載されています。

### (5) 勉強のしかたと卒論

現代文芸論の授業は、専修課程間の枠をできるだけ越えて、異なった分野どうしの相互乗り入れを可能にすることを目指しながら行われています。現代文芸論に進学した学生のみなさんは、文学部のすべてを——文学だけに限らず、哲学、歴史、美学なども——自分の庭として自由に出入りするくらいの意欲を持って、文学部を探索していただきたいと思います。

また授業履修に関するもう一つの大きな特色は、前述したように、英・独・仏・スラヴ・伊・国文など他研究室の講義・演習の多くを必修科目に代わる「認定科目」として履修できるということです。選択の幅は広いので、各自の興味にあわせて勉学の方向づけを自由に決めていくことができます。

授業履修の際には、三言語（日本語も含む）以上の分野にまたがって学ぶことを原則としていますが、誤解のないよう一言付け加えておくと、三言語を同様にマスターすることが要求されているわけでは決してありませんし、そんなことは決して現実的ではありません。ここで求められているのは、一つの言語（例えば英語）を中心に研究し、もう一つの言語（例えば西・仏・独・伊・露など）を補助的に学び、さらに古典語（ギリシャ語かラテン語）の初歩を西欧文化研究の基礎教養として身につける、といったプログラムを各自が自分の興味と研究主題に応じて考え、実践するということです。それなら誰にでも十分実行可能でしょうし、そうすることによって研究を狭く一か国に限定した場合には見えてこないような世界文学の豊かな広がりにつなげることが必ずできるものと思われまます。

卒業論文の研究テーマも、この専修課程の趣旨を反映して、非常に選択の幅が広がっています。参考までに、**最近の卒論のテーマ**をいくつか挙げてみましょう（卒論は研究室で保管しており、閲覧可能です）。

・ピランデッロ『作者を探す六人の登場人物』の翻訳論
・テキストの存在論的、読者論的考察——円城塔『Self-Reference ENGINE』を題材に
・アダプテーションから論考するストルガツキー兄弟『ストーカー』
・テロという「悲劇」を描く—ジョナサン・サフラン・フォア『ものすごくうるさくて、ありえないほど近い』

・娘たちの群像—イサク・ディーネセン『冬物語』をめぐって
・Tim O'Brien "Going After Cacciato"—想像力のゆくえ
・水村美苗『私小説 from left to right』における「私小説」の意義
・『ペンギンの憂鬱』における動物・病・犯罪への表象
・リチャード・ブローティガン『西瓜糖の日々』における死とアレゴリー
・川端康成とヘミングウェイ—老いと性の問題
・『バートルビーとジモン 拒否の戦略』"Bartleby and Simon The Strategy of Refusal"
・安部公房『砂の女』における性的問題について
・カズオ・イシグロ『日の名残り』論—ジョークに見る物語の二重性
・ジャン＝ジャック・ルソーの『ピグマリオン』とジョージ・バーナード・ショーの『ピグマリオン』におけるピグマリオン表象
・世界文学としてのカート・ヴォネガット—『猫のゆりかご』を例に
・忘れられた子ども時代—『小公女』における翻訳の変容と受容
・演劇的視点から分析する『若草物語』—小説および映画を比較して
・ロベルト・ボラーニョ『チリ夜想曲』の語りの設定
・映画『ドライブ・マイ・カー』における『ワーニャ伯父さん』について
・「修行の果てになにがあったのか——松浦理英子『親指Pの修行時代』」
・「カルロス・フエンテス『アウラ論』—幻想性と間テキスト性の観点から」
・「多和田葉子作品における言葉と身体の間わり——『献灯使』を中心に」

## (6) 進路——就職と大学院進学

卒業生の就職について言えば、西近時代から卒業生は一般企業・マスコミ・出版社・金融などの分野で活躍しています。卒業生が働く分野はこのように様々ですが、専修課程で一国一言語の枠を越えて文学を研究することを通じて得られた幅広い知見や柔軟なものの方が、就職の際に評価され、職場でも歓迎されています。

また卒業生のかなりの数が大学院に進学し、研究者への道を歩んでいます。大学院には、現在、修士・博士課程をあわせて40人ほどの大学院生が在籍しています。中国、韓国、ポーランド、スロベニア、香港、英国など、様々な国や地域からの留学生も大学院で学んでいます。現代文芸論以外の様々な他分野に「転進」していく能力を伸ばせるのも、現代文芸論の特徴と言えるでしょう。現代文芸論の学部課程を修了して、他の専門分野の大学院に進学することも、また他の専修課程を修了した人たちが現代文芸論の大学院を受験することも、どちらも歓迎します。つまり現代文芸論は、学部から大学院へという進路に関しても自由で開かれた場を作り出すことに貢献したいと考えています。

## (7) 国際交流と多彩なイベント

現代文芸論研究室は、学生・研究者の国際交流にも積極的に携わってきました。これまでワルシャワ大学、マンチェスター大学との学術交流・留学生交換の世話役

を務めてきた他、ハーバード大学のデイヴィッド・ダムロッシュ教授が主宰して世界各地で行うInstitute for World Literatureというサマースクールにも提携校として参加しています。2018年7月には現代文芸論研究室が受け入れ役となって東京大学で開催されました。文化庁の日本文学翻訳プロジェクトJLPPや東京国際文芸フェスティバル、ヨーロッパ文芸フェスティバルにも、現代文芸論研究室の教員が協力しています。

また、当研究室は、作家や外国の研究者など、様々なゲストを呼んでシンポジウムや講演会などを積極的に行い、文学の出会いの場を作ってきました。2011年11月にはダムロッシュ教授を迎えて世界文学に関する国際シンポジウムを、2013年3月には世界各国から100人以上の研究者を集めて、「グローバル化時代の世界文学と日本文学」という国際会議を主催しました。2015年には、千葉市幕張で開催された第9回国際中欧・東欧研究協議会世界大会という、50か国から1300人以上の研究者が集まる巨大会の事務局をつとめ、多くの大学院生も学会の準備・運営に参加し、国際学会活動を体験しました。

その他、リービ英雄、多和田葉子、バルガス＝リョサ、レベッカ・ブラウン、ボリス・アクーニン、ミハイル・シーキン、山崎佳代子、エステルハージ・ペーテル、川上弘美などの作家をゲストとして招いています。普段の授業の枠を越えたこの種の活動も現代文芸論研究室の大きな特徴であり、研究・教育の重要な一環として位置づけられています。学生や院生の皆さんには、こういった行事の準備や実施に参加していただくことによって、知見を広め、また研究室を担う一員であるという自覚を深めてもらいます。

#### （8）研究室誌『れにくさ/ Renyxa』

現代文芸論研究室では、研究室論集『れにくさ/ Renyxa』を原則として年1回刊行しています。これは通常の論文集・紀要の枠を超えた、自由な編集方針に基づく文学・文化研究総合誌です（2026年3月に第16号を刊行）。現代文芸論の教育・研究内容の多彩さと幅の広さを実感していただくためには、この雑誌をまず見ていただくといいかもしれません。

東京大学学術機関リポジトリ（UTokyo Repository）でオンライン公開もされているので、「人文社会系研究科・文学部」→「現代文芸論研究室」からご覧ください。

## 西洋古典学

### ◇教員◇

教 授 日向太郎

助 教 松浦高志

### ◇学生◇

学部 4名 修士課程 4名 博士課程 9名

### (1) 西洋古典学とは

西洋古典学は、今日まで伝わっている古代ギリシア語およびラテン語で記されたあらゆる文字資料を対象とする学問である。これに加えて、さまざまな考古学資料、遺跡などが考察の範囲に入ることもある。また、すべての文字資料と言ったが、印刷された校訂本はもとより、写本、パピュルス、碑文も含まれる。そして、古代ギリシア語およびラテン語そのものを体系的に、歴史的に、分析的に研究することももちろん我々の学問の根幹をなしている。

まとまった形で残っている古代ギリシア語の最古の文献は、ホメロス叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』である。ただし、両作品の成立過程は今なおヴェールに包まれている。伝統的にアオイドスやラプソドスと呼ばれる朗唱者によって口演されてきたと考えられるが、いつ頃文字に記録されて書物となったのか。いまだ結論は出ていない。とはいえ、ホメロス叙事詩はジャンルを超えて韻文全般に影響を及ぼし、哲学者に引用されて議論の俎上に載せられ、歴史家たちの考証の対象ともなった。いわば、最古の古典にして、古典のなかの古典と言ってよいであろう。アオイドスやラプソドスが単に朗唱に携わるのみならず、作品を解釈し聴衆に解説する役割を担っていたのだとすれば、彼らは我々にとっての始祖である。

そして紀元前3世紀から2世紀にかけて、ヘレニズム時代には、各地に流布していたホメロス叙事詩の写本がエジプトはアレクサンドレイアの図書館に集められ、本文批判が行われた。それは、真正なるホメロスの言葉とは何かを探究する営みであり、ここに我々の研究の原点がある。現在我々が手にするホメロス叙事詩の校訂版は、このときの編集事業に拠るところが大きいと思われる。

ヘレニズム時代には、重要な文学的思潮も生み出された。それ自体緻密なホメロス研究とも大いに関わっていると思われ、カッリマコスという学者詩人に帰される一種の文学綱領である。カッリマコスは、ホメロスに追従して大作を手掛けることやその安易な模倣を戒め、学殖に基づく機知と諧謔に富む洗練された小品を推奨した。

さて、ラテン語で作られた最古の文学作品は、リウィウス・アンドロニクスの『オデュッセイア』のラテン語訳である（ただしまとまった形では現存せず、断片的に伝わるのみ）。ラテン最古の作品が『オデュッセイア』であることは、ホメロス作品がいかにか人々の心を魅了していたかを物語っている。ラテン語文化圏でも、ホメロスは古典のなかの古典として崇拜と憧憬の対象となった。その一方で、カッリマコス主義もラテン語韻文に影響を及ぼし、それはとりわけ紀元前1世紀の古典期の作家に認められる傾向である。だからこそ、ウェルギリウスは『イリアス』や『オデュッセイア』の両作品を徹底的に研究して、カッリマコスの理想にも敬意を払いながら、建国叙事詩『アエネイス』を創作することになったのである。

もちろん、ラテン語作家の手本や研究対象になったのはホメロス叙事詩ばかりではなく、ギリシアの抒情詩、悲劇、喜劇、諷刺詩、哲学、歴史、弁論、自然科学もローマ人に大いなる影響を与えた。しかし、だからといってローマ文化をギリシア文化の亜流に過ぎないと考えるのは、誤りである。そのような見方が優勢になった一時期もあったが、現在ではそれは乗り越えられている。ラテン語作家の営為は、いわば換骨奪胎を基本とする創造的模倣である。翻訳のみを通じて観察した場合、それはたしかに見えにくいが、こうした模倣の試みは、言語の別を越えて中世以降のヨーロッパ文学の神髄となったと思われる。そして、ギリシア文化の多大な影響を受けたローマ文化は、ヨーロッパ中世において古典として長いあいだ尊重され、受け継がれてきたのである。

とくにラテン語は、知識人のあいだの共通語だった。ヨーロッパの大学では、長いあいだこの言語で授業が行われ、口述試験がなされ、式典が祝われた。学術書や文学作品もラテン語で書き続けられた。公共の文書もごく私的な書簡もまた同様である。カトリック教会は、20世紀まで典礼の言葉として用い続けた。ラテン語が浸透していたのは、学問の世界だけには留まらない。

つまり、伝統的に、中世以降のヨーロッパ人にとっては、厚みのあるローマ文化の方がずっと近くて親しみ深く、ラテン語の著書のはるか向こうにギリシア文化を仰ぎ見る、というような古典語文化との接し方が定着したのである。

欧米文化圏においては西洋古典学の研究と教育の伝統はこのようなものとして、今日まで長く受け継がれてきた。しかし、ひとたびこの文化圏の外に出れば、事情は異なる。たとえば、日本から見れば、上述のようなギリシア文化とローマ文化との距離差はない。二つの文化はともに遠い距離にあるように感ぜられるかも知れないが、どちらがより近いということもない。本学において西洋古典を学ぶ積極的な意義は、そのような距離感覚にしたがって、欧米の研究教育機関で学ぶのとは異なった視点を自ずと得られることにある。さらに言えば、日本文化を視野に入れながら、西洋古典学に貢献する可能性も開かれている。

また、古代ギリシア語もラテン語も、我々にはまぎれもない外国語であるが、今日この外国語を母語とする人はいない（もともと母語のように解し、操る人は皆無ではない）。二つの言語は、いわゆる「ネイティブ」がいない言語なのである。もちろん程度の差はあるが、現在生きている人の誰にとっても、「外国語」には違いない。その点にも、この両言語を学ぶ面白さがあるだろう。

## （2）本専修課程について

このように、ホメロス叙事詩を出発点として、我々が研究対象とすべき文献は幅広い。じっさい本専修課程に所属する学生たちの興味の範囲も様々であり、卒業論文のテーマもまた多様である。しかし、すべての研究において基礎となるのは、**古代ギリシア語とラテン語**を理解する能力である。このため、学部でも大学院でも、授業においては伝統的に講読に力を入れている。古代ギリシア語・ラテン語、さらに韻文・散文に偏ることなく学習できるように、両言語による**韻文講読**と**散文講読**の授業をS、Aの両 Semester にわたって開講するように配慮している。ほとんどの授業は大学院と共通であるが、学部生は大学院生や上級生とのレベルの差について、決してひるむことなく、また遠慮することなく受講して欲しい。前期課程において両言語の初等文法を一通り学び終えていることは望ましいが、それは決して進学のための要件ではない。文学部においても初級の授業を受講することは可能である。また、文学部では、哲学、美学、西洋史の各研究室が毎年古典語文献を用いた授業を開講している。教養学部の後期課程においても、複数の教員が古典語講読の授業を行っている。このような、本研究室が開講母体となっていない西洋古典関連の授業を受講することも可能である。

この他、本専修課程には、学生同士の交流を深めるために、「**クラシカルセミナー**」という主に大学院生たちが自主的に運営する研究発表や討論の場がある。ひと月に1回もしくは2回くらいの頻度で行われるこの会合が、他の学生や教員の前で自分

の研究について語る機会となる。他の人々が自分の研究をどうとらえるか、反応を知りこともできる。通常では、博士論文、修士論文、卒業論文を抱えている人の中間報告（や事後報告）の機会、さらには学会発表の予行練習の機会として利用されている。あるいは、新しく進学した学部3年生の自己紹介の場として、入学した大学院生が自己紹介を兼ねて自分の取り組んでいる研究について語る場としても機能している。このような意味で、本研究室において、「クラシカルセミナー」は教員が行う授業以上に大切な研鑽の場であり、また情報交換の場である。ここ5年くらいは、主にオンラインで行われているが、年度末などにオンライン・対面併用で開催されることもある。

(1)でも述べたように、西洋古典学は長く欧米で研究されてきた経緯があるから、想像以上に多くの研究者が欧米文化圏をはじめとして、世界の至る所に遍在している。現在世界は感染症やさまざまな紛争を抱え、先行きは不透明ではあるが、可能な限り国内外から研究者を招聘し、活発な学術交流が実現するように心がけている。また、2025年度よりイタリアのサン・ダニエーレ・デル・フリウーリの市立図書館主催の写本文献学のサマースクールが再開した。本学をはじめ、ウディネ大学、ボローニャ大学、米国オハイオ州立大学の研究者が参加し、文献学の方法を実践的に学び、学術交流を行っている。本研究室からは大学院生を中心に数名が参加している。

### (3) 卒業後の進路

卒業後は、企業に就職する人、官公庁に入る人、起業を志す人と様々であるが、ここ数年は大学院進学希望者が増加する傾向がある。また、大学院進学後に大学のみならず、中学校、高等学校で教職に就く人もいる。あるいは、海外の大学に留学する人も少なくない。

### (4) 最後に

(2)でも述べたが、古代ギリシア語やラテン語を学んでいることは進学の必須条件ではない。授業や卒業論文作成で利用することになる注釈書や研究書には、英語以外ではイタリア語、フランス語、ドイツ語などヨーロッパの言語で記されたものが多いけれど、こうした言語を初修外国語として、あるいは第3外国語として学ぶことに拘る必要もない。そして、進学前の段階で、時間をかけて取り組んできた勉学や勉学以外の諸活動や経験が無駄になることもない。何故ならば、我々の学問は広大無辺であり、懐が深く、およそ人間の様々な営為で西洋古典学と無縁なものは何一つないからである。

## 心理学

### ◇教員◇

教授 今水寛、村上郁也  
准教授 鈴木敦命、浅野倫子  
助教 田中拓海

### ◇学生◇

学部 50名 修士課程 14名 博士課程 2名

### (1) どういう心理学を学ぶのか？

ものが見えるのはどうしてなのでしょう？ 人ごみの中でも誰が話しているか分かるのはなぜなのでしょう？ どのようにして自分の手足をスムーズに動かせるようになったのでしょうか？ 年齢を重ねると他人に対する評価はどのように変わるのでしょうか？ 私たちの専修課程で研究しているのは、こういった問題です。

ものを見たり、手足を自由に動かしたり、言葉を話したりすることは、物心ついたときには自然にできるようになっていることが多いので、なんとなく「簡単なことだ」と思ってしまいがちです。しかし、因果関係を発見したり、人の気持ちを読み取ったりする高度な思考の働きはもとより、多くの場合「できてあたりまえ」と思っていることも、実はその原理がまだ十分にはわかっていない、非常に複雑な情報処理に支えられています。コンピュータやロボットが発達した現在、コンピュータが人間と同じように言葉を理解したり話したりしているように見えたり、ロボットが人間のようなスムーズな動きを実現する例も現れています。しかし、コンピュータやロボットは、人間と同じ意味で言葉を「理解」しているわけではありませんし、人間のように多様な状況に柔軟に適応しながら動くことは依然として簡単ではありません。人工知能の技術開発が著しい昨今だからこそ、その学習や進歩の基盤となっている人間の知的・情緒的な営みの仕組みや特徴・バイアスを理解することが、ますます重要になっています。また、人工知能と人間を比較することで、人間に対する理解を深めることもできます。

私たちの専修課程では、視覚、感覚間協応、注意、言語、感情、人物認知、運動学習といった人間の情報処理、認知・行動制御プロセスを対象として、科学的な方法にもとづいて先端的な研究をしています。具体的な研究方法は、研究テーマに応じて様々です。最も多いのは、パソコンの画面に何か課題を提示して判断をしても

らうという実験です。その課題をいろいろと工夫することで、頭の中でどのような情報処理や認知・行動制御が行われているのかを知ることができます。他にも、MRI（magnetic resonance imaging: 磁気共鳴映像法）という装置を使って脳の働きを調べる神経科学的な実験から、インターネットを介してリモートで行うオンライン実験、アンケート用紙にペンで回答を記入してもらった質問紙実験まで、多種多様な実験を実施しています。

**心理学専修課程に進学**すると、こうした実験の方法と、そこから得られた様々な知識を学びます。2年生のA Semesterには、まず、実験演習の授業で、心理学の代表的な実験をいくつも体験します。実験者の立場で実験を実施したり、実験参加者の立場で課題に取り組んだりしてデータを集め、それを統計的な手法で分析し、レポートにまとめて報告する訓練をします。この実験演習を補助する授業として、心理学研究法や統計についての授業もあります。

「統計」と聞くと尻込みする人がいるかもしれませんが、恐れるには足りません。数理統計学を究めるわけではなく、統計的手法の意味と使い方を学ぶことがメインの目的ですから、文系の人でも、心理学の学生向けに用意された統計の授業に出席してきちんと勉強すれば、充分、身につけることができます。現代社会では、企業運営や市場調査、金融取引など、ありとあらゆるところで統計の知識が必要になるので、大学院に進学する人はもとより、就職を目指している人でも、学生時代に統計を学んでおいて無駄になることは決してないでしょう。

**本郷に進学**してからは、もう少し高度な実験演習の授業があり、心理学の教科書に載っているような、結果が知られている実験ではなく、どういう結果になるかわからない最先端の実験に参加することになります。一方、講義を通じて心理学の知識を広く身につけ、ゼミを通じて特定の分野の知識を深めていきます。専任の教員が行う授業だけではなく、毎年、外部から非常勤講師を招いて、発達心理学、動物心理学、認知神経科学、人間工学など、バラエティに富んだ講義を提供しています。

**4年生**になると、卒業論文に取り組むことになります。心理学専修課程の卒業論文は科学論文であり、実証的な研究を行い、その研究の背景や目的、方法、結果やその解釈を記します。多くの場合、自分自身のアイデアを教員や大学院生らと相談しながら膨らませ、実験を実施します。卒業論文のデータが、その後、国際的な学術雑誌に掲載された論文のなかで報告されることもしばしばあります。

文学部の心理学専修課程は、1903年に日本で初めて設立された心理学実験室を起

源としています。ここから、東京大学の各所に、それぞれ特色のある心理学関係の研究室が分かれていきましたが、文学部の心理学専修課程は、現在に至るまでずっと実験心理学の手法に基礎をおいて研究を続けてきました。「日本で最も古い」とは言っても、古くさい心理学をやっているわけではありません。実験心理学の分野で世界の最前線に位置する研究を進めています。

心理学研究室ホームページ <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/psy/>

## (2) 教員はどういう研究をしているのか？

### ◆ 今水寛 教授

近年、人工知能は身近な存在となり、人と自然な会話をを行いながら、(時に間違えることはあるものの) 予想外の知識も提供してくれるようになりました。身体を持たない人工知能に、ロボットという身体を持たせる試みも多く行われています。しかし、人間のように多様な状況で巧みに動作できるロボットは、未だに存在しません。人間と機械の大きな違いは柔軟な学習能力にあると言われていました。人工知能は膨大なデータを必要としますが、人間はわずかな経験から多くを学ぶことができます。生まれてから数年もたてば、無数の筋肉を上手にコントロールし、ロボットより遙かに器用に動作できるようになります。私たちの研究グループでは、運動や認知におけるヒトの優れた学習機能が、どのような仕組みで実現されているかを調べています。研究方法としては、心理・行動実験、fMRIなどの脳活動計測、計算理論などを用いています。また、研究の成果をリハビリテーション、ブレインマシンインターフェース、ニューロフィードバックによる機能回復などに役立てることに取り組んでいます。『認知心理学ハンドブック』(有斐閣)、『認知科学への招待』(研究社)、『認知心理学 第1巻: 知覚と運動』(東大出版会) に分担執筆しています。

研究グループのホームページ <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~imamizu/>

### ◆ 村上郁也 教授

私たちは網膜像そのものを意識化しているわけではなく、網膜像情報その他の生体信号が複雑な多段階の処理を経ることで、生活環境に適応し体制化された視覚世界がつくられているのです。本研究室では主として心理物理学の実験、副次的に機能的脳計測を行っています。特定の視覚刺激を観察して生じる知覚を実験参加者に報告してもらい、刺激と反応との関数関係を記述していくことで、脳活動を直接計測せずに脳内処理の様子を明らかにできます。視覚系を「誤作動」させる錯覚図形は特に重要なツールです。専用装置で眼球運動や身体運動などの生体計測を行った

りして、知覚におよぼす影響をみることもしています。『イラストレクチャー認知神経科学』（オーム社）、『心理学研究法1 感覚・知覚』（誠信書房）、『Progress & Application 知覚心理学』（サイエンス社）という3冊の基礎心理学入門教科書の編著、『感覚・知覚心理学ハンドブック 第三版』（誠信書房）という基礎心理学専門書の編著、そして『カラー版 マイヤーズ 心理学』、『脳と時間：神経科学と物理学で解き明かす〈時間〉の謎』という2冊の心理学概説書の翻訳に携わりました。

研究グループのホームページ <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~ikuya/>

#### ◆ 鈴木敦命 准教授

私たち人間は、他者に関する様々な推論や評価を普段から行っています。例えば、目の前の人物が誰なのか、何を感じているのか、どんな性格なのか、といった多岐にわたる内容を、正誤は別として、その人の外見、振る舞い、過去の経験などから日常的に判断しています。そうした他者に関する認知（人物認知）にはどのような特徴があり、その背後ではどのような情報処理が行われているのでしょうか。本研究室ではこうした疑問をめぐる研究を進めています。主な研究方法は行動実験ですが、脳活動計測も共同研究で行うことがあります。また、人物認知のエイジングないし年齢差について調べることで、世代間交流・理解を促進するヒントを得ることも目指しています。『顔の百科事典』（丸善出版）、『感情心理学ハンドブック』（北大路書房）などに分担執筆しています。

研究グループのホームページ <https://sites.google.com/site/atsunobusuzukilab/>

#### ◆ 浅野倫子 准教授

例えば今あなたが目にしている文字は、考えてみれば単なる線のかたまりです。それなのに文字だと分かり、読めて、意味が伝わるのはなぜでしょう。また、文字や物体を見たり、音を聞いたりしたときに受け取る情報は、誰でも全く同じなのでしょう。普段私たちが何気なく行っている「物事を認識する」という行為は、実は複雑で謎に満ちています。本研究室では、この謎の解明に、主に認知心理学や実験心理学の研究手法を用いて取り組んでいます。特に、文字を含めた物体認知、言語の認知処理、注意、多感覚処理、共感覚などのテーマを扱っています。言語機能とその他の認知処理機能（知覚、注意など）の関係にも興味を持っています。『共感覚』（勁草書房）、『言語と身体性』（岩波書店）、『有斐閣 現代心理学辞典』（有斐閣）、『人工知能学大事典』（共立出版）などに分担執筆をしています。

研究グループのホームページ <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~asano/>

### (3) 卒業生はどういう方面に進んでいるか？

1～4割ほどの学生は、人文社会系研究科の心理学専門分野をはじめ、心理学あるいは心理学に関連する他の分野の大学院に進学しています。大学院に進学した卒業生の多くは研究者になり、東京大学をはじめとする全国の大学や研究所で心理学関係の研究・教育に携わっています。海外の有名大学の教授になっている卒業生も少なくありません。また最近では、大学院を修了してから民間企業に就職する卒業生も増えてきています。

学生の多くは、民間企業や官庁に就職しています。就職先は様々で、特に決まった進路というものはありません。金融業、製造業、出版業など、多岐に渡っています。最近では、IT関係の職業に就く卒業生が増えています。変わり種としては、卒業してから他大学の医学部に進学して医師になった卒業生や、国会議員から大臣になった卒業生がいます。調査会社や広告代理店、官庁などに就職した場合には、心理学の知識や手法が直接活かせることもあるようです。厚生労働省や法務省などは、人間科学職の採用もしています。近年、多くの企業で、文科系と理科系の両方のセンスを備えた人材が求められるようになっており、本専修課程卒業生は、その点で歓迎されることが多いようです。

#### 文学部の扉 ポスターアーカイブ



#### 「AIと人文科学展 —AIのある研究生生活—」

人工知能(AI)の利用が「日常」となったいま、人文科学の研究者はこの変化をどう受け止めているのか。研究者たちが今まさに経験している「AIのある研究生生活」とは。(第24回ホームカミングデー文学部企画シンポジウム「AIと人文科学」との連動企画)

主催：文学部・人文社会系研究科  
 協力：人文社会系研究科文化資源学研究専攻  
 期間：2025.10.14～10.31

## 社会心理学

### ◇教員◇

教授 村本由紀子、大坪庸介、石井敬子

准教授 稲増一憲

助教 鈴木啓太

### ◇学生◇

学部 47名 修士課程 5名 博士課程 8名

社会心理学は、社会的な環境の中における人々の行動と、その背後にある心的過程および社会・文化構造との関わりについて研究する実証科学である。研究対象は、社会的状況の理解過程やそれを支える情報処理過程、対人行動、集団の一員としての行動、組織における人間行動、文化的歴史的な影響過程など幅広い。社会心理学研究室の学部教育においては、さまざまなテーマに及ぶ社会心理学の基礎的知見や理論を学ぶための概論、特定のテーマに関して深く掘り下げた議論を行う講義、実証的な研究手法を学ぶための実験実習や社会調査法実習、統計学の授業が開講されている。また、隣接科学としての心理学、社会学はもとより、政治学、経済学、哲学、言語学、文化人類学、生物学、脳科学、情報科学、精神医学などの幅広い知識が役に立つことが多く、これらの授業への参加を積極的に勧めている。

研究方法論の習得プロセスは妥協を排した厳しく長い訓練を伴うが、それは学生どうし、また学生と教員との和気あいあいとしたジョイント・プロジェクトでもある。関心を同じくする仲間と知的刺激に満ちたディスカッションを重ね、心と社会に関わるさまざまな問題にアプローチすることの楽しさを、ぜひ体感してほしい。

各教員の研究領域および担当授業の概要は以下のとおりである。

### 村本 由紀子 教授

主として集団心理学・文化心理学の領域を専門とし、マイクロな個人の心とマクロな社会環境とのダイナミックな相互構成関係を解き明かすことを目指している。特に、集団規範や文化の生成・維持のプロセスを探究することに関心をもち、実験室内にミニマルな行動の連鎖を作り出すことを目指した心理学実験と、社会の現場における慣習や思考様式の変化を継時的に追跡するフィールドワークという方法論を両輪として、一連の研究に従事している。現在取り組んでいる主な研究テーマは以下のとおり：①多元的無知による集団規範の維持過程、②共有信念の文化差の

規定因、③文化的慣習の社会生態学的基盤、④組織文化・風土をめぐる諸問題、など。

例年の主な担当科目は、「社会心理学概論Ⅰ」（概ね隔年担当）、「社会心理学実習Ⅲ」および「社会心理学演習」である。概論では、組織・集団・文化に関わる種々の社会現象を題材として取り上げ、社会心理学や関連領域の知見を用いてそれらの現象を多面的に読み解く。実習では、研究室において現在進行形の研究プロジェクトに受講生も加わり、研究計画の立案からデータ収集と分析、考察に至るまでの一連の研究プロセスを体得していく。演習では、心の文化差、文化的慣習や集団規範の生成・維持過程等に関する社会心理学の基本研究を概観したうえで、先行研究の限界を超えた新たな研究枠組みや方法論を多面的に検討し、理解を深める。ただし2026年度については、管理職業務に専念する必要上、4年次向けの社会心理学演習（卒業論文指導）のみを担当する。

### 大坪 庸介 教授

人々の社会行動・社会的認知の適応的基盤と適応的エージェント同士の相互作用が生み出すマクロなパターンに関する研究に取り組んでいる。例えば、進化ゲーム理論では、自己呈示とその知覚のような2つの現象はシグナリング・ゲームのシグナル送信者の行動と受信者の認知として統合的に分析することができる。つまり、どのような自己呈示とそれをどのように知覚することが進化的に安定な状態になるかを理論的に検討することができる。このような進化ゲーム理論等のモデルを取り入れつつ、近年は①赦しと謝罪を通じた和解研究、②評判と信頼にもとづく協力システムの維持に関する研究、③幼少期の経験による生活史戦略の調整に関する研究等を行っている。

主たる担当科目は、「社会心理学概論Ⅱ」（概ね隔年開講）、「社会心理学実習Ⅲ」、「社会心理学演習」である。社会心理学概論では基礎学問としての社会心理学の意義について論じる。社会心理学実習では、オンライン実験の実施に必要なプログラミング、データ分析、論文・報告書の作成スキルを学ぶ。演習では社会心理学だけでなく動物行動学、進化ゲーム理論、エージェント・ベース・モデル等の分野をカバーする学際的な文献を扱う。

### 石井 敬子 教授

人は、日常生活を通じてさまざまな文化的慣習に参加している。同時に文化的慣習への参加は、その慣習のみならず、文化の中で優勢な価値を維持し、時には変えていくことになる。このように文化と人は切っても切れない関係であることを踏まえ、私の研究では、①人の心の性質、特に認知や感情の認識はどの程度文化的慣習の影響を受けるか、②文化的な慣習や価値はどのように伝達され、変容されるかを

明らかにしていくことを目指している。また、いくつかの国際比較のプロジェクトに協力し、幅広い視点から心の性質の社会・文化依存性を探求している。認知や感情の認識の文化差を理解することは、異文化間コミュニケーションや異文化の受容といった今後重要性を増す多くの実用的分野にも貢献できると思われる。

主な担当科目は、「社会心理学概論Ⅰ」（概ね隔年担当）、「社会心理学実習Ⅲ」、「社会心理学演習」である。概論では、社会心理学の中核的問題ともいえる社会・文化環境と心との相互構成過程に関し、その環境の影響が脳や遺伝子にまで至る可能性を探る文化神経科学のアプローチに基づき概観する。実習では、認知や感情認識に関する実験を通じ、実験デザインの設定、データ分析、その結果に基づく論文作成といったプロセスとそのスキルを学ぶ。演習では、社会的認知研究に関する論文講読を通じて、特にその知見に基づく社会政策への貢献、限界点、今後の展望について議論する。

### 稲増 一憲 准教授

人々の世論形成過程やそれに対するメディア・コミュニケーションの影響を中心に、現代の社会問題に対して社会心理学の観点からアプローチする応用的な研究を行っている。人間の普遍的な傾向を扱うことの多い心理学と、国や社会制度等の文脈を踏まえた議論を行うことの多い政治学や社会学との架橋を目指し、政治学者や社会学者たちとの共同研究を行っている。近年取り組んでいる具体的な研究テーマとしては、①多様化するメディア環境における人々の価値観の変容についての研究、②世論を分断する対立軸の解明、③ナショナリズムの功罪についての実証的研究などである。

主な担当科目は、「社会心理学概論Ⅰ」（概ね隔年担当）、「社会心理学実習Ⅱ」および「社会心理学演習」である。概論では、他者との相互作用が人々にどのような影響をもたらすのか、集団やマクロな社会関係に置かれた人々がどのように行動するかを社会心理学の知見に基づいて概説する。また、逆に人々の行動が集団やマクロな社会をどのように変化させるかについても扱う。実習では、仮説生成から研究計画の立案、データ収集と解析、論文等でのアウトプットといった一連の過程を身に着ける。演習では、現代社会における問題を扱った文献を取り上げ、考察・議論を行う。取り上げる文献は必ずしも社会心理学分野の論文に限定されないが、これらの文献に対する批判的検討から、社会心理学的考察へと繋げる。

最後に、卒業生の進路は、大学院の他、民間企業、情報産業、官庁など多岐にわたっている。社会心理学を学ぶことで身につけたデータ分析の考え方や問題解決への道筋は、将来どのような進路に進む人にとっても、役に立つものとなり得るだろう。

# 社会学

## ◇教員◇

教 授 赤川学、出口剛司、小林真理、本田洋、金成垣、祐成保志、  
井口高志

准教授 瀧川裕貴、高谷幸、米澤旦

助 教 塩谷昌之

## ◇学生◇

学部 124名 修士課程 25名 博士課程 26名

### (1) 研究室

銀杏並木に面した法文2号館の1階に社会学の研究室がある。地階にはコピー・センター、アーケード側を出ると学部事務室や生協が近く、地の利はすこぶるよい。中は4つのブロックに分かれていて、その一つが学部生用の読書室になっている。初夏にはまばゆい緑、晩秋にはあざやかな黄が窓の外をかざる。壁の書架に並んでいる古くからの図書の背表紙が部屋をとり囲み、まん中は、大きなテーブルが主のように占拠している。雑然とした賑やかさは、多様な研究領域をかかえる社会学を象徴しているのかもしれない。いかにも往時の学生の勉強部屋といった感じのこの部屋は、昔から学生同士のさまざまなコミュニケーションの広場として活用されてきており、学部生による自主的な研究会や勉強会が頻繁に開かれている。情報基盤センターの端末をはじめ、ネットワーク・コミュニケーションも盛んになっている。

文学部最大の200名近くもの学生・院生をかかえる社会学にとって、研究室は貴重な共同空間であり、外国語図書、雑誌、資料が置かれているほか、事務連絡、教材とゼミ報告資料のコピー、端末操作、情報交換など、さまざまな活動の結節点となっている。この共同研究室を中心にして、その周辺（同一階、地階、向かいの法文1号館4階）にいくつかの実習室、機器室、そして教員室が存在する。

社会という現象は悠久の昔から現在にいたるまで、人間の生活するすべての空間において存在してきた。かつて、社会学という学問が19世紀西欧社会において台頭してきた時代、コントやスペンサーやマルクスは、「近代社会とはなにか」という問いに答えようとする営為のなかで、包括的で一般的な総合的社会理論をめざした。さすがに今日では、かれらの理論がそのまま保持される状況にはない。しかも、通

常の社会学研究の営みは、より特定の限定された対象領域におのずから専門分化せざるをえなくなっている。とはいえ、社会学は今でもそうした個々の経験的研究を通じてつねに「社会とはなにか」「社会と個人とのよりよい関係はどういうものか」という基本問題への現実的な関心に貫かれている。建物は古いけれども、研究室の中はそうしたいつまでも若々しいテーマが息づいている。

## (2) 授業

現代において社会学の研究領域は、家族、組織、農村、都市、国家、国民社会、国際社会という社会集団の類型による区分、教育、社会福祉・医療、政治、法、経済、社会階層、産業・労働、社会運動、社会思想、社会意識、という現象の特性に基づく区分などによって個別的に分かれている。さらにまた、ミクロ自我論、行為論、マクロ・システム論、歴史社会学、社会変動論、研究法として計量社会学、社会調査法などの領域も存在する。その中で**東大文学部の社会学**は、つぎの領域を中心として教育・研究体制の充実を推進してきた。それは、**学説、理論、階層、公共性、福祉、社会政策、科学、技術、環境、リスク、文化、社会意識、家族、ジェンダー、人口、セクシュアリティ、コミュニティ、社会問題、臨床、計算社会科学、移民**などである。さらに、大学院韓国朝鮮文化研究専攻から文化人類学、社会学の専門家に社会学演習の担当教員として加わっていただいている。学生はこれらの中から、授業や読書や研究会を通じて、自分自身の特定化された問題関心を醸成させていくことになる。既存の研究や資料がしっかりと踏まえられているのであれば、発見的で斬新な課題に挑戦することもできる。

演習は3年生と4年生が一緒に、あるテーマにそって個人ないしグループで発表をしたり、文献を読んで討論したりするタイプのものが多い。かならず一つの演習に主ゼミとして参加するほか、熱意があればもう一つを副ゼミとして参加することもできる。それぞれの演習のテーマは多少広めに設定されるので、どの演習でもある範囲内で各人の関心に沿って積極的に参加することができる。

必修ではないが、「調査実習」や実習をとまなう授業も設けられており、どこかの町や村に（しばしば泊りがけで）出かけて、質問紙調査やインタビュー調査を行なう。帰ったあとは、コーディングの共同作業やパソコンによる分析の仕事が待っているけれども、「社会」を肌で感じる貴重な体験となる。また、4年生や院生も加わった研究室内の縦断的な協同事業である点も意義深い。

学生数の多い社会学専修課程では、一人一人が自立した目的意識をもって研究室に参加することが期待されている。その意味で、卒業論文を執筆すること、またそれにむけて探求し続けることが最も重要視される。卒業後の進路のいかに拘わり

なく、人生とは自分で課題を見つけ自分で解いていくという試行錯誤の連続であるはずで、卒業論文はそうした態度の形成のために文学部が用意している最大の学習機会であるといえる。社会学の卒業論文はA4サイズ50枚(40字×40行)を標準としており、自ら設定した問題領域に関する参考文献を読破してテーマを掘り下げ、資料やデータを収集・分析し、新しい発見を説得的に語らなければならない。その過程では、主として所属する演習の教員による指導と助言を受けることになるが、基本的には一人一人の学生の個人的な研究活動である。

### (3) 教員たち

#### 赤川学教授：

言説社会学、セクシュアリティ研究、猫社会学を専門としているが、「社会調査のなんでも屋」を目指している。『セクシュアリティの歴史社会学』(1999)、『明治の「性典」を作った男』(2014)で取り組んだセクシュアリティの歴史社会学研究をライフワークとしつつ、『子どもが減って何が悪いか!』(2004)、『これが答えだ!少子化問題』(2017)、『少子化問題の社会学』(2018)で行った人口減少社会の構想を20年展開してきたが、今後は、猫と人間の関係の深化を、インタビュー調査や言説調査によって浮かび上がらせ、質的統合法(KJ法)や言説の知識社会学的アプローチ(SKAD)によって分析する猫社会学を中心にしたい。演習参加者に関しては、理論だけでなく、具体的な意味世界や社会問題を経験的に探求することを必須条件とする。参加者一人一人の問題設定が、討論の過程で相乗的に発展していくことを期待したい。

#### 出口剛司教授：

社会学理論、社会学史研究を専門とする。主としてフランクフルト学派の批判理論を中心にコミュニケーション論、承認論、批判的文化研究に取り組んでいる。その一方で、日本を代表する社会学者の仕事を発展的に継承し、「恥じらい」「やさしさ」などの感情文化に関する社会学的考察を行っている。社会学において、理論は社会や人間存在の様々な側面を常識を裏切る形で多様に映し出すプリズムのような働きをもっている。しかし、そうした多様な見方ができるようになるためには、理論を通して現実を見る力を養う必要がある。そこで演習の参加者には、社会学理論を学びかつ、社会文化、コミュニケーション論、相互行為論、社会的自己論に関する具体的なテーマを見つけ、各自でオリジナルな分析を行うことが期待される。むろん、学説史や純粋理論の研究をめざす学生も歓迎する。各自が選び取ったテーマに即した研究報告とディスカッションを取り入れ、社会学的な思考、表現、討論の

力を身につけることをめざす。

#### 祐成保志教授：

専門は**コミュニティと住まい**の社会学である。コミュニティ研究は社会学のなかでも伝統ある分野の一つであるが、従来は地域社会とそこで活動する集団に焦点をあてた研究が中心であった。現在、コミュニティをめぐるのは、地理的な近接性や境界線の揺らぎが指摘される一方で、心身の安全を保障する居場所の必要性が論じられる。こうした状況を踏まえつつ、従来の蓄積を批判的に継承しながら、コミュニティ研究の方法を再構成することが目下の課題である。『コミュニティの社会学』（2023）は、都市、村落、福祉、社会運動、環境問題など分野横断的な共同作業として、この課題に取り組んだものである。コミュニティと密接なかかわりをもつ「住まい」（ハウジング／ホーム）は、生活構造の基盤であると同時に社会制度の結節点でもある。歴史社会学的研究から出発し、フィールドワーク、国際比較、政策志向の研究に参画してきた。演習は、理論的関心と実証的方法、「量的」手法と「質的」手法、歴史的資料と現代的事象の間を自在に行き来しうる柔軟な研究態度の獲得を目標としている。

#### 井口高志教授：

**ケア・支援の社会学、医療社会学、臨床社会学**などを専門とする。研究の出発点として、家族介護を中心に、介護・ケアという行為の特性と、それに対する社会的支援のあり方を、インタビュー調査などの質的方法を通じて明らかにすることに取り組んできた。その後、特に認知症（dementia）という現象に注目するようになり、現在は、介護・ケアの領域を含みつつ、それを越えた認知症の排除や包摂の問題、病いや障害の語り、当事者との共同、認知症概念の日常生活への効果などの課題に取り組んでいる。以上の研究プロセスの一端は『認知症家族介護を生きる』（2007）および『認知症社会の希望はいかにひらかれるのか』（2020）を参照して欲しい。また、ケア・介護研究を足場に、より実践志向の強い社会政策・社会福祉や看護学の研究者、血友病・薬害HIVの当事者などとの共同研究にも取り組んできた。そうした試みの中での社会学のスタンスや発信のあり方を考えていくことも課題とする。演習では、現場の具体的な課題と社会学理論や方法との接点を考えることを中心に、講読や各自の具体的なテーマの探求を行う。

#### 瀧川裕貴准教授：

**理論社会学、数理社会学、計算社会科学**を専門とする。数理モデルと計算的手法という一般性の高いツールを武器にしながら、デジタル化・AI化した現代社会を

特徴づけるさまざまな社会問題に関わるトピックに取り組んでいる。例えば、ソーシャルメディアと分極化、パンデミックと社会的格差、人工知能と社会的不平等、デジタル文化と社会階層といった諸問題である。ビッグデータや機械学習・人工知能・自然言語処理等の計算的手法は、これらの社会学的問題に対して、新たな解決を与える可能性を秘めている。コミュニケーションや相互行為のダイナミクスを捉えるにはビッグデータやデジタルトレースといわれる人々のデジタル上の行動記録が欠かせない。人工知能に基づく自然言語処理は人々の複雑な意味世界や文化的世界を定量的に明らかにすることができる。また、デジタルな手法を用いた実験は、社会システムの因果メカニズムの解明への道を切り開いている。演習ではデジタル化・AI化した現代社会を社会学的に考察するための基礎的文献の講読とそれに基づく討論を行う。数理モデルや計算的手法の習得は前提としないが、それらを用いた研究の講読も演習に含まれるため、最低限の関心を持つことが望ましい。

#### 高谷幸准教授：

専門は、**移民研究、国際社会学・グローバル社会学**。国際社会学・グローバル社会学は、国民国家の枠には収まらない社会現象を扱う分野だが、自らの研究としては、主に日本における移民・外国人、とりわけ非正規移民や移民女性を対象に、インタビューや参与観察など質的調査による研究を行ってきた。社会のなかで、どのような境界や線引きが作動し、誰がどのような形で排除されたり、周縁化されるのか。あるいはそうした境界が超えられ、異質な人びとの間に結びつきや連帯が生まれるのはどのような契機によってなのか。さらには、社会のメンバーシップは、どのような価値や規範にもとづいているのか。これらの問いが示すように、社会学のアプローチによって移民研究を行うことは、移民を通じて社会の動態や存立基盤を探求することでもあると考えている。著作としては『追放と抵抗のポリティクス：戦後日本の境界と非正規移民』、編著に『移民政策とは何か：日本の現実から考える』がある。演習では、基礎的な文献の講読や各自の研究報告および参加者間での議論によって、社会学的な視点を習得し、自らの問いを立て、その問いに迫る力を身につけることを目指す。

#### 米澤旦准教授：

**社会政策論、組織社会学**を専門とする。現代社会で社会保障政策と労働政策を主軸とする社会政策は、人々の生活を維持、支える生活保障の役割を担っている。第二次世界大戦後に産業化社会では福祉国家と呼ばれる包括的な社会政策の諸制度が整備され、行政部門が人々の生活保障のために重要な役割を担うようになった。福祉国家の危機を経た現代社会では、株式会社、非営利組織、社会的企業などの民

間組織の役割がより重要な意味をもつようになっている。就労支援分野における、社会的企業と呼ばれる新しく注目される組織に関して、それらの組織が構想する規範の多様性を示し、組織群が共通の目的のもとで活動するような「業界」を作り上げる過程を明らかにした研究として『社会的企業への新しい見方：社会政策のなかのサードセクター』（2017）がある。演習では、文献輪読やフィールドワークを通じて、生活保障にかかわる制度の客観的な観察・理解と、社会問題の具体的な現れや改善に向けた実効的な方策を思考することを重視する。このようにして習得される社会学の視点と方法は、おそらくは個人の問題状況を理解や改善につながるはずである。

#### （４）進路

卒業後の進路で、まず伝統的に多いのが、新聞、放送、出版、広告などのマスコミ関連企業への就職である。その他の民間企業では、情報、商社、金融、ほかに民間の研究リサーチ会社への就職も少なくなく、メーカーへの就職も見受けられる。国の省庁や都庁など地方自治体の公務員の道を選ぶ者も毎年数人いる。研究者を志す人は、年によって異なるが、5人～10程度あり、社会学の大学院へは5人前後、その他の大学院（他専攻、他研究科、他大学など）にも5人程度進学を予定している。いうまでもなく進路状況は学生個々人の志望に依存するので、毎年、多少変動する。

大学院へ進学する場合を除けば、現代日本の企業社会では、社会学で何をどの程度勉強したかは進路先にあまり影響しないかも知れない。社会学という学問それ自体は、必ずしもビジネスマンやマスコミ関係者を養成することを目的とするものではない。むしろそうした産業社会の直接的な諸目的からは一歩距離をとって、しかも対象とする社会現象を経験科学的に考察するということに、経済学や法学でもなく、また哲学や文学でもない、社会学らしさがあるともいえる。そして、20歳台前半の2年間にこうした社会的視点を経験することは、どんな進路を歩むにしても、一人一人のその後の人生にとって貴重な財産となるだろう。

なお、社会学専修課程では、全員が共通に受講する必修科目として「**社会学概論**」「**社会学史概説**」および「**社会調査**」（それぞれ4単位）の3つがあり、このうち「概論」と「調査」は2年次のAセメスターに開講される。さらに、「**社会学演習**」を8個ターム8単位以上、「**社会学特殊講義**」の中から12単位以上を履修しなければならない。ほかに、卒業論文12単位、他の専修課程の授業、共通科目、他学部の授業などを含め、合計で76単位を取得することが卒業の要件となっている。



---

# 大学院独立研究専攻



---

## 文化資源学

### ◇教員◇

教 授 中村雄祐、小林真理、高岸輝、西村明、吉田寛

准教授 松田陽、野村悠里、大向一輝

特任教授 バーバラ・ガイルホン

助 教 渡邊麻里

### ◇学生◇

修士課程 25名 博士課程 18名

### (1) 文化資源学とは何か

文化資源学研究室は2000年度に創設された。百年を超える長い歴史を有する文学部としては比較的新しい研究室である。正しくは文化資源学研究専攻といい、大学院のみで、学部に対応する専修課程を持たない。文化資源学と文化経営学の2つのコースから成る。

2コースに再編されたのは2015年度からのことであり、それ以前は文化経営学、形態資料学、文字資料学（文書学・文献学）で構成されていた。後2者を統合して文化資源学コースとし、文化経営学コースの前に置く構成はつぎのように発想された。

世界には、「かたち」と「ことば」の膨大な蓄積がある。文書とは書かれた「ことば」、文献とは書物になった「ことば」である。多くの人文学・社会学系の学問は、もっぱらこれら「ことば」を相手にしてきた。ところが、現代では学問領域があまりにも細分化されたばかりか、情報伝達技術の発達が「ことば」とそれを伝えるメディアとの関係を希薄なものに変えてしまった。大学では「ことば」を読むことの訓練は盛んに求められてきたものの、肝心の「ことば」を過去から、あるいは遠方からわたしたちのもとへと伝える「文字」や「文書」や「書物」などのメディアそのものに対する関心が希薄になりがちである。

しかし、「文字」が発明された時点から、「ことば」はメディアの具体的な「かたち」と無縁ではなかったはずだ。両者を切り離して考えることはできない。「かたち」は「ことば」を拘束するが、一方で、それらの伝達や保存に対してさまざまな可能性を与えるからだ。「ことば」に向き合おうとするならば、「文書」や「書物」という物体、紙や石や木という物質、筆やペンやコンピュータという道具にも目を向ける必要がある。

一方、「かたち」をもっぱら研究対象とする既存の分野は、文学部においては美術史学と考古学ぐらいだが、いったん学問領域が設定されると、そこからは美術作品ではない、あるいは考古遺物ではないという理由で、無数の「かたち」が視野の外へと追いやられてしまう。

そこでは「ことば」をめぐる学問とよく似たことも起こる。すなわち、「かたち」をめぐるでも、それを現実に作り出している物質や物体に対する関心が希薄になりがちなのだ。絵画を例にとれば、描かれた画像は絵画本体を離れて、版画や写真や印刷物、テレビやインターネットなどのメディア上をいくらでも移動可能である。そうした画像のみを論じることも大切な研究である。しかしまた、絵画の形態（壁画、襖絵、天井画、掛け軸、絵巻、絵馬、額装画など）や物質的な側面は、そもそも絵画とは何であるかを考える重要な手掛かりとなる。絵画の形態は、それがそれぞれの時代にそれぞれの場所でどのような役割を果たしていたかを教えてくれるからだ。

文化資源学では、さらに「**おと**」の問題も視野に入れている。ここでは「おと」という目には見えないものが、どのような「かたち」（身体、楽器、音符、楽譜、音楽学校、コンサートホール、レコード、テープレコーダー、CD、音楽配信サイトなど）をともなって生まれ、伝わるのかをも考えようとしている。

文化資源学とは、いわば既存の学問体系の側に立つことよりも、体系化のもとになった資料群の中に分け入ることから始まる。文化を根源に立ち返って見直し、資料群から多様な観点で新たな情報を取り出し、社会に還元することを目指している。

あえて「資料」ではなく、「**資源**」を使う。資源は英語でresourcesという。sourceの第一義は水源であり、川や流れの始まる場所である。そこにreが加わることにより、水源に臨むという意味が強められている。源泉からもう一度考え直そうというわけだ。

また、「資源」を用いることには、「文化財」という概念から少し距離を置くという意識がある。日本では、1950年に文化財保護法が制定されて半世紀を優に超えた。この間に文化財という言葉はすっかり定着したが、それは国や地方自治体による価値評価＝指定制度の定着でもあった。一方で指定制度の弊害も顕在化し、指定されないものの再評価も求められている。1996年に登録制度が新たに導入され、2005年に文化的景観というカテゴリーが生まれたのはこのためである。近年ではまた、ユネスコの世界遺産に刺激されて文化遺産という言葉もよく使われている。

すでに価値の定まった「文化財」でも「文化遺産」でもなく「文化資源」を用いるのは、現代の社会、現代の文化に目を向けようとする意志の表明でもある。

このようにして「源泉」に立ち返って得た知識や情報を、今度は社会へと還元させることが「文化経営学」にほかならない。具体的には、史料館、文書館、図書館、

博物館、美術館、劇場、音楽ホール、文化政策、文化行政、文化財保護制度、著作権制度などの過去と現在と未来を考え、そのことを通じて文化資源を活用しようとするものだ。

ここで強調しておきたいことは、あくまでもこうした「かたち」と「おと」と「ことば」に関する思考、研究の上に立脚して、文化経営の在り方を探究するという姿勢である。形態資料は博物館や美術館や劇場に、文字資料学は文書館や図書館につながるものの、はじめに「かたち」や「おと」や「ことば」ありきであって、決してその逆、はじめに博物館や音楽ホールや文書館ありきではない。それら文化施設のマネジメントを身につけるためには、経営技術の習得のみでは不十分で、「かたち」と「おと」と「ことば」が織り成す文化に通暁する必要がある。

文化資源学コース、文化経営学コースの順番にはこのような意味がある。ただし、入学後はいずれもいっしょに学んでいくと考えてほしい。

## (2) 文化資源学ならではの講義

10人の担当教員（文化資源学＝中村雄祐教授、野村悠里准教授、高岸輝教授〔美術史学と兼任〕、西村明教授〔宗教学宗教史学と兼任〕、吉田寛教授〔美学芸術学と兼任〕、文化経営学＝小林真理教授、松田陽准教授、大向一輝准教授〔次世代人文学開発センターと兼任〕、さらにバーバラ・ガイルホン特任教授、助教＝渡邊麻里）の専門分野は、文化資源学が既成の学問領域を横断するトランス・ディシプリナリーな性格を有することを反映して、文書学、書物学、美術史学、宗教学宗教史学、美学芸術学、文化政策・文化行政論、文化経営論、文化遺産論、国際協力論など多彩である。

さらに、学内では史料編纂所、総合研究博物館、東洋文化研究所、埋蔵文化財調査室と連携し、学外に対しては、国立西洋美術館、国文学研究資料館から兼任教員を、他機関等から非常勤講師を招いている。今後は、学外の研究機関・文化機関との連携をさらに充実させていく構想である。

ここでは、文化資源学ならではの講義を、2つのコースからいくつかを紹介することにしよう。

文化資源学コースでは、文字、写真、映画、デザインなど、文学部の他の研究室があまり扱わない資料や問題を積極的に取り上げる。いずれもそうした事物をどのように文化資源学として論じることができるか、いいかえれば文化資源化できるかを検討することから始める。

さまざまな事物が研究対象となりうる。中村雄祐教授はこれまでに蓄積されてきた声の文化や紙の文書の読み書きに関する先行研究を踏まえ、現在展開しつつある文系の学問とデジタル技術の邂逅について考える。野村悠里准教授は書物史および

読書史の先行する研究を踏まえながら、書物の装幀・製本史研究に取り組み、文化資源学的資料の保存修復の問題やそれを支える職人技術について考察を行っている。**高岸輝**教授の授業は、日本の古代から中世にかけての美術史における権力と絵画制作の関係を追究しつつ、日本の文化財保護や美術館における古美術の展示についても考察する。**西村明**教授は、宗教と戦争などの複雑なテーマがミュージアムという世俗空間においてどのように取り扱われているかを考察する。**吉田寛**教授は、現代のメディア環境下における人間の感性のあり方やその変容を、認知科学や工学といった関連諸科学とも連携しつつ、哲学的に探求しており、最近ではとくにデジタルゲーム（コンピュータゲーム、ビデオゲーム）を主な研究対象としている。**遠藤基郎**教授・**井上聡准**教授（史料編纂所）による授業は、テキストとしての解説に加えて、物質としての古文書や関連する物質文化へのアプローチを行い、文字資料の新たな資源化を試みる。

文化経営学コースでは、**小林真理**教授が文化政策・文化行政を理論的に研究し、実践でどのように活かすかを考察する場が文化経営学演習（文化経営学の射程、文化経営学の方法）であり、また非営利の文化施設をめぐる制度と運営方法について、文化施設経営論において展開する。さらに、社会学演習においては、地域とアートマネジメントの問題を扱う。**松田陽准**教授は、文化遺産という概念が世界の異なる地域において、いつ、どのように形成・受容されたのか、また今日、文化遺産に関連する様々な社会現象に法制度や政治力学がいかにかに影響を与えているかを探究する講義を行っている。**大向一輝准**教授は、人文学研究を対象とした情報技術の導入や、デジタルアーカイブの構築手法に関する講義を行う。**バーバラ・ガイルホン**特任教授は、日本の古典文化におけるジェンダーと権力の関わり、東日本大震災での福島は文化においてどのように表現されたのか、日本演劇ではどのように現代社会を描いているのか、そして日本における地方演劇と芸術祭について考察する。

2005年度から文化資源学に関心を持つ学部生に向けて、「文化資源学入門」という講義を開設している。2025年度の「入門Ⅰ」は小林真理教授が担当し、さらに松田准教授が「入門Ⅱ」で文化資源学の導入部分を紹介している。また、博物館や美術館の現場から文化事業を考察する場が、**遠藤秀紀**教授・**森洋久准**



小林真理教授「社会学演習」  
（文化観光の社会学）の授業風景

教授ら（総合研究博物館）、**酒井敦子**准教授（国立西洋美術館）によって用意されている。

### （3）大学を開く

修士課程のみで始まった教育活動も2002年度からは博士課程が加わって本格化し、これまでに34人が博士号を取得している。また、文化資源学研究室は社会人に対して大きく門戸を開いている。入学試験には修士課程、博士課程ともに一般選抜と社会人選抜があり、定員の約半数を社会人選抜としている。これらは大学を社会に対して開こうとする意志表示であり、人文社会系研究科にあつては文化資源学研究室がその最先端にある。

多くの社会人学生が図書館や美術館・博物館、国際文化機関や出版社を職場としている。それらは単なる学生の所属先で終わらず、これからは研究室を含めた相互の関係がインターネットのように増殖してゆくに違いない。高校から学生を受け入れ、社会へと送り出すという大学の常識的な役割が、ここでは通用しない。学生の職業も経験も年齢も多種多様であることが、他の研究室にはない活気をもたらしている。社会人が大学に逆流し（リカレント教育）、反対に学生が在学中から社会の現場に出るという仕組みを積極的に構築したい。後者については、国文学研究資料館が実施する「アーカイブズ・カレッジ」に参加することで、アーキビスト養成の現場を体験できる。

文化資源学研究室は、2001年度から毎年「**文化資源学フォーラム**」を開催し、文化資源に関する様々なテーマを考察するとともに、その成果を広く社会に発信してきた。2003年度以降は、学生が中心となってフォーラムの活動を推進している。研究室ホームページに各年のフォーラム開催記録が掲載されているので、ぜひともご覧いただきたい。

2002年には、本研究室が中心となって文化資源学会を設立した。現在、約300人の学会員がおり、定期的に研究会と見学会（遠足と呼んでいる）を開催し、研究雑誌を毎年刊行している。本研究室以上に、開かれた研究の場となっている。

2021年には、東京大学文化資源学研究室編『**文化資源学——文化の見つけかたと育てかた**』（新曜社）を刊行した。文化資源学研究室という船はまだ港を出たばかり、この先のさまざまな寄港地から乗船が可能である。

## 韓国朝鮮文化

### ◇教員◇

教授 六反田豊、本田洋、金成垣

准教授 伊藤智ゆき

特任准教授 曹瑞妍

助教 李美姫

### ◇学生◇

修士課程 9名 博士課程 19名

### 1 研究室の概要

韓国朝鮮文化研究室は、学部学生の定員をもたない大学院のみの独立専攻である。1993年4月に文学部附属文化交流研究施設に設置された朝鮮文化部門を母体として、2002年4月に開設された。日本では最初の韓国朝鮮文化に関する専門的な教育・研究組織である。

韓国朝鮮文化研究室は、文学部を離れて、赤門前の赤門総合研究棟の7階にある。文学部学生の利用にはいささか不便な位置だが、日本で最大規模の韓国朝鮮関係図書を所蔵しており、韓国朝鮮に関心をもつ諸君には宝庫のようなところである。本研究室は、前身が研究施設の一部門ということで、研究と国際交流が活動の中心となってきた。この間、意欲的な資料収集を続け、研究文献や史料の集積は短期間で日本有数のコレクションをもつに至った。とりわけ韓国の学術雑誌については、日本最大の所蔵を誇っている。日本における韓国朝鮮研究の中心として、共同研究や資料収集のために日本国内のみならず外国から訪れる研究者も多い。

朝鮮半島と日本列島という地理的に近接した2つの地域は、古代から現代に至るまで、政治・経済・社会・文化という、人間生活のさまざまな分野で深い交流を結んできた。日本列島で人々が作り出してきた歴史と文化が、朝鮮半島のそれと分かちがたく結びつき、今日もなお続いている。その重要性をいち早く認識したのが東京大学であり、すでに1916年、全国の大学にさきがけて文学部に朝鮮史講座を設置し、本格的な研究と教育を始めた。朝鮮文化研究室はその伝統のよき部分を受け継いでさらに発展させ、韓国朝鮮文化研究専攻の開設へとつながった。韓国朝鮮文化研究専攻は、歴史学・考古学・社会学・思想史・科学史・言語学・文学・文化人類学など、多方面から韓国朝鮮の社会と文化を総合的に研究することを目的として開設され、韓国朝鮮歴史文化と韓国朝鮮言語社会の2つの専門分野で構成されている。

韓国朝鮮文化研究専攻は他研究室と異なり、所属する学部学生がいない。そのため学部学生諸君からはその姿が見えにくいことと思う。しかし、東洋史学、中国思想文化学、言語学、社会学など、専門的に関係の深い各専修課程と密接な協力関係をもって、韓国朝鮮文化に関する学部授業を担当している。講義と演習は関連各専修課程の必修科目に認定されており、文学部各専修課程に所属しながら韓国朝鮮文化研究室教員の指導を受けて卒業論文を書き上げ、韓国朝鮮研究者への道を歩む学生も多い。韓国朝鮮に関心をもつ学生であれば、専門に関係なく、訪れてほしい。研究室の扉は常に皆さんに向かって開かれている。

## 2 教員と授業

### 六反田豊 教授

中近世（高麗・朝鮮時代）史研究を専門としている。韓国精神文化研究院（現韓国学中央研究院）での留学経験をもち、韓国の学界と太いパイプをもっている研究者である。最近の著書に『東アジアと東南アジアの近世 15～18 世紀（岩波講座世界歴史 12）』（共著、岩波書店、2022 年）、『朝鮮史 1 先史～朝鮮王朝』（共著、山川出版社、2017 年）、『朝鮮王朝の国家と財政』（単著、山川出版社、2012 年）などがあり、また論文に「興原倉小考—その所在地と移転問題—」（高倉洋彰編『東アジア古文化論攷』1、中国書店、2014 年）、「朝鮮初期三浦倭料の調達方式と財源」（『年報朝鮮学』20、2017 年）、「朝鮮初期の財政制度と鄭道伝」（『韓国朝鮮の文化と社会』17、2018 年）などがある。近年では朝鮮半島における「水環境」の歴史学的研究に関心をもち、漢江や洛東江流域などの現地踏査も進めている。講義では朝鮮時代の税制や国家財政を扱い、演習では朝鮮時代史の基本史料である『朝鮮王朝実録』などを講読する。授業は東洋史学・日本史学・西洋史学・中国思想文化学の各専修課程で必修科目に認定されている。

### 本田洋 教授

社会・文化人類学を専門とし、主として韓国の地域社会を対象とする民族誌的研究に従事している。当初は韓国南西部南原地域の農村での長期の滞在調査に基づいて、産業化と都市化の過程における農村社会の変化を研究していたが、その後は歴史人類学的視角をも合わせ、多岐にわたる研究を行うようになった。近年では、都市から農村への移住者とコミュニティ形成を主題とした調査研究も行っている。主たる著書・論文に、『東アジアにおける文化の多中心性』（三尾裕子と共編、風響社、2001 年）、『東アジアからの人類学：国家・開発・市民』（宇田川妙子・中村淳と共編、風響社、2006 年）、「韓国の帰農：智異山麓山内地域の事例から」（『韓国朝鮮文

化研究』11、2012年）、『有志と名望家：韓日地域社会構造に対する民族誌的比較』（韓国語、林慶澤と共著、イメジン、2013年）、『韓国農村社会の歴史民族誌：産業化過程でのフィールドワーク再考』（単著、風響社、2016年）等がある。文学部授業科目として、社会学概論・特殊講義・演習（社会学専修課程）、韓国朝鮮文化特殊講義・演習、文化人類学（いずれも共通講義）を担当している。

### 金成垣 教授

社会学を専門とし、失業・貧困問題や少子高齢化問題などの社会問題、そしてそれに対応するための雇用・社会保障政策や家族政策などの社会政策＝福祉国家政策について研究している。韓国や日本、中国を中心としたアジア諸国・地域を主な対象とし、歴史比較分析を通じて今日の状況を明らかにし、国際比較分析を通じて各国の現状を明らかにすることを目指している。これをふまえ、今後の課題や展望を考える政策論についても関心をもっている。近年では、雇用不安定化や少子高齢化、多文化社会化といった社会変動とそこにおける福祉国家の変容をテーマとして研究を進めている。主たる著書に、『後発福祉国家論——比較のなかの韓国と東アジア』（単著、東京大学出版会、2008年）、『現代の比較福祉国家論——東アジア発の新しい理論構築に向けて』（単編著、ミネルヴァ書房、2010年）、『福祉国家の日韓比較——「後発国」における雇用保障・社会保障』（単著、明石書店、2016年）、『アジアにおける高齢者の生活保障——持続可能な福祉社会を求めて』（共編著、明石書店、2017年）、『韓国福祉国家の朝鮮』（単著、明石書店、2022年）等がある。文学部授業科目として、社会学概論・社会学演習（社会学専修課程）、韓国朝鮮文化特殊講義・演習（共通講義）を担当している。

### 伊藤智ゆき 准教授

韓国朝鮮語の音韻論・音声学・歴史言語学を専門とし、特に韓国朝鮮語の歴史的発展と類推変化、音素配列、借用語適応、韓国朝鮮語発話の音響音声学的分析に関心をもっている。具体的には、中期朝鮮語～現代韓国朝鮮語諸方言におけるピッチアクセントの変化とバリエーション、中期朝鮮語の語幹構造に基づく朝鮮語祖語再構、複合語濃音化、英語・日本語・中国語からの借用語に見られる適応パターン分析、朝鮮漢字音研究、現代韓国朝鮮語方言（特に延辺朝鮮語）の喉頭素性三項対立に関する音響音声学的研究などを行っている。個々の言語事象を詳細に検討することで、言語変化の背後にあるメカニズムを明らかにすることを目指している。主たる著書・論文に、『朝鮮漢字音研究』（汲古書院、2007年）、“Korean accent: Internal reconstruction and historical development” (*Korean Linguistics* 15(2)、2013年)、“A sociophonetic study of the ternary laryngeal contrast

in Yanbian Korean” (『音声研究』21(2)、2017年) “Iterated learning models of language change: A case study of Sino-Korean accent”, (Naomi H. Feldman と共著、Cognitive Science、46(4)、2022年) 等がある。

### 曹瑞妍 特任准教授

韓国朝鮮文化研究室では、毎年1名ずつ外国人客員教授を招聘して、最先端の研究を紹介してもらっている。本年度の曹瑞妍特任准教授のご専門は、韓国文学である。

## 3 研究室事業

### (1) コリア・コロキウム

これまで公益財団法人住友財団の助成を受け、毎年5回のペースで、原則として3番大教室(2020年度はコロナ禍のため中止、2021年度はオンライン)で木曜日夕刻から開催してきたが、昨年度から研究室単独でのハイブリット開催に変更した。今年度は2~3回の開催を予定している。オンラインでの参加は自由である。変動する朝鮮半島の現在と過去を把握するために、内外の専門家に自由な立場から話してもらっている。韓国語・英語話者の場合は、日本語通訳もついている。

### (2) 韓国朝鮮研究文献コレクション

日本における韓国朝鮮研究関係文献センターとなることをめざして、各種史料・研究文献の収集と整理作業を行っている。基本史料や研究図書の収集が中心となるが、韓国の学術雑誌、とりわけ大学・学会が出版したものの重点的整備を行っている。また、故末松保和学習院大学名誉教授の御遺族から同教授収集の朝鮮関係図書約3,000冊、韓国文化交流財団から語学関係学術新刊図書約1,000冊、韓国学中央研究院から同研究院発行図書など、多くの寄贈も受け入れ、韓国・米国など各国の大学・研究機関・学会と出版物の交換を行っている。

### (3) 国際交流

東京大学や人文社会系研究科を代表して、ソウル大学校(韓国)、イリノイ大学(米国)、高麗大学校(韓国)、成均館大学校(韓国)と交流協定を締結し、学術交流や学生交換を行っている。

### (4) 外国人研究員

国際的な研究交流を行うために、日韓文化交流基金や国際交流基金の助成などを受けて、外国人研究員を随時受け入れている。



---

次 世 代 人 文 学  
開 発 セ ン タ ー

---



## 次世代人文学開発センター

### ◇教員◇

#### 〔文化交流学部門〕

- 教 授 小島毅、芳賀京子  
准 教 授 松田陽（兼務）  
助 教 張博（地域連携担当）  
特任助教 李貞善（尊厳学担当）

#### 〔国際人文学部門〕

- 教 授 鎌田美千子、鈴木淳（兼務）、納富信留（兼務）  
助 教 吉田（入里）夏美（留学生特別講座プログラム担当）、  
笠原真理子（ヒューマニティーズ・リエゾン担当）、  
ニーナ・ハビャン・ビジャレアル（大江文庫担当）、  
朴燦鎬（情報メディア室担当）

特任助教 加藤靖子（東京大学百五十年史編纂担当）

#### 〔人文情報学部門〕

- 教 授 中村雄祐（兼務）、小林正人（兼務）、高橋晃一（兼務）、  
高橋典幸（兼務）、高岸輝（兼務）  
准 教 授 大向一輝  
講 師 塚越柚季  
助 教 小川潤

### （1）次世代人文学開発センターについて

本センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行っている。センターに籍を置く学生はいないが、授業や論文指導等を通じて教育も担当している。

センターの前身は、昭和41年度に創設された文化交流研究施設で、地域間の文化の交流や複数の文化領域にわたる総合的な研究を行うことを目的としていた。その後、平成5年度に朝鮮文化部門、平成6年度に東洋諸民族言語文化部門が増設され、従来の組織である基礎理論部門とともに、3部門からなる研究組織になった。平成14年度には朝鮮文化部門が韓国朝鮮文化研究専攻として独立し、同年7月から寄附研究部門「文化環境復元」が新設された。平成17年度からは組織名を現在のセンターの名称とし、その下に従来の基礎理論部門を継承した先端構想部門のほか、創成部門、萌芽部門を置いた。創成部門の死生学拠点（平成24年度に死生学・応用倫理センターとして独立）、萌芽部門のデータベース拠点・大蔵経（のち創成部門、現在の人文情報学部門）のような、現在にまで続く研究拠点がここから生み出されている。平成30年度、センターの3部門は文化交流学部門、国際人文学部門、人文情報学部門に改組され、現在

に至る。令和4年度には、センター内に「人文学応用連携推進室」が設置された。

## （2）次世代人文学開発センターの特色

センターは、大学組織の上では研究科と研究所の中間的な存在と位置づけられている。すなわち、学内の独立した附置研究所とは異なり、人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行うものと規定されている。センター長は、研究科長が兼任する。専任の基幹教員に加えて、個別のプロジェクトを推進する兼務の流動教員を、人文社会系研究科の研究室から受け入れている。

### 「文化交流学部門」:

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、「先端構想部門」の時期を経て、現在の名称になった。複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行いつつ、それらを公開発信していくことを目的とする。前身である文化交流研究施設や先端構想部門には、専攻を異にする様々な分野の教員たちが着任し、それぞれの専門学問領域に基礎を置きながら、多分野・複数文化に関わる研究を行ってきた。歴代主任には、旧文化交流研究施設創設時の吉田精一教授を初代に、美術史学の秋山光和教授、チベット語・チベット史の山口瑞鳳教授、古代ローマ美術史・考古学の青柳正規教授、西洋中世史の高山博教授、西洋美術史の小佐野重利教授らがいる。平成27～29年度には集英社高度教養寄付講座、平成27～令和2年度には東京大学ビジョン2020推進事業「Sustainabilityと人文知」研究プロジェクトが置かれた。令和3年度以降は地域連携プロジェクトの本部も兼ねる。

教育面では「文化交流特殊講義」と「文化交流演習」を開講しており、その内容に応じて専修課程の必修科目に認定されていたりするので、文学部便覧の各専修課程の「授業科目および認定科目一覧」や、文学部の「授業科目一覧・授業時間割」次世代人文学開発センターの項を参照してほしい。

### 「国際人文学部門」:

留学生教育や国際交流、後期教養教育、各種プロジェクトへの参画を通して人文学の国際化を推進し、東京大学を世界に向けた学術研究の発信拠点にすることを目的とする。

人文社会系研究科・文学部には、諸外国から来た留学生が数多く在籍している。勉学及び研究に必要な高度な日本語運用能力の習得に向けて日本語及び日本文化の教授法開発を行うとともに、帰国後に大学教員を目指す留学生や将来日本語教員を目指す学生のニーズに応じて日本語教師教育に関する研究も進めている。教育面では、学生が日本語教授法とその関連分野の知見を考究する場として「文化交流演習」を開講している。

加えて、百五十年史編纂、ヒューマニティーズ・リエゾン、大江健三郎文庫のプロジェクトにも参画し、かつ国際人文学プロジェクトを推進している。

### 「人文情報学部門」:

人文社会学の基盤となる知識の保存・発信の方法がデジタル媒体へと大規模に転換され、進化する情報技術の影響に曝されるなか、人文社会学が培ってきた伝統的な研究方法と研究成果とを将来にわたって活かす、あらたな研究モデルの構築を人文情報学 (Digital Humanities) として目指している。

平成20年4月に、当時の萌芽部門に次世代人文学データベース拠点が設置され、「SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース」と「言語資料データベース」とを柱としながら、あらたな人文学の基盤形成と研究方法の本格的模索がなされた。このうち前者は「SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース」を基礎としながら、仏教研究遂行に必要な発展的研究情報アーカイブを構築し、あらたな学術空間の創出を図るもので、平成25年度から人文情報学拠点へと拡大発展し、創成部門に移行した。平成30年度の改組に伴い、拠点の名称を部門名とするようになった。

### (3) 教員について

#### 「文化交流学部門」:

本部門の専任教員は、小島毅教授、芳賀京子教授、張博助教である。小島教授は東アジア海域の思想文化交流を専門とし、芳賀教授は地中海域の形象文化交流を専門としている。張助教は日本中世文学を専門とし、地域連携プロジェクトを担当する。李特任助教は科学研究費学術変革領域「尊厳学の確立」の運営を担当する。また、兼務教員として松田准教授 (文化資源学) が所属し、「鳥取県淀江町一帯を含む考古学的・文化資源的研究の支援プロジェクト」を担当している。

#### 「国際人文学部門」:

本部門の専任教員は、鎌田美千子教授、吉田 (入里) 夏美助教、笠原真理子助教、ニーナ・ハビャン・ビジャレアル助教、朴燦鎬助教、加藤靖子特任助教である。鎌田教授は日本語教授法開発と日本語教師教育を専門とし、人文社会学系研究科・文学部日本語教室室長を務めている。吉田助教は留学生特別講座プログラム (通称「留学生のための特別講座」) を担当している。笠原助教はヒューマニティーズ・リエゾンとの研究連携を担当している。ビジャレアル助教は大江文庫の運営を担当している。朴助教は情報メディア室の運営を担当している。加藤特任助教は東京大学百五十年史編纂を担当している。兼務教員として鈴木淳教授 (日本史学) が東京大学百五十年史編纂を、納富信留教授 (哲学) が国際人文学プロジェクトを担当している。

#### 「人文情報学部門」:

本部門の専任教員は大向一輝准教授、塚越柚季講師、小川潤助教である。兼務教員としては、中村雄祐教授 (文化資源学)、小林正人教授 (言語学)、高橋典幸教授 (日本史学)、高岸輝教授 (美術史学)、高橋晃一教授 (インド哲学仏教学) が所属している。

#### (4) 授業について

##### 「文化交流学部門」:

文化交流学部門は、共通講義として「**文化交流特殊講義**」「**文化交流演習**」を開講している。令和8年度は、小島毅教授が東アジア思想文化史、芳賀京子教授が古代地中海美術史、非常勤の新居洋子講師が中国とヨーロッパの文化交渉史、奈良澤由美講師が地中海域の装飾史、中村のい講師が古代ギリシア美術史、中西啓太講師が日本近代史について開講している。

##### 「国際人文学部門」:

国際人文学部門では、「**文化交流演習**」を開講し、日本語教授法に関する授業を行っている。令和8年度は、鎌田美千子教授による「文化交流演習V」（日本語教育学概説）、「文化交流演習VI」（日本語教育学演習）を開講している。

##### 「人文情報学部門」:

人文情報学部門が開講する科目は「**人文情報学概論**」「**人文情報学特殊講義**」で、「人文学フロンティア教育プログラム」に位置づけられ、文学部の各専攻の壁を横断し、デジタルという地平から人文社会学全体の課題を俯瞰できる授業を提供している。「人文情報学概論」は全学大学院に向けて発信されるデジタル・ヒューマニティーズ教育プログラムの中心科目でもあり、文・理の壁を超えて学生・院生が集い、あらたな人文社会学知の形態を考察する貴重な場となっている。令和8年度は大向一輝准教授、塚越柚季講師、小川潤助教による「人文情報学概論I」「人文情報学概論II」のほか、「人文情報学特殊講義研究」I～IVが専任および兼務教員、非常勤講師により開講されている。

#### 文学部の扉 ポスターアーカイブ



#### 「東大が掘る、東大を掘る」

イタリア、ナポリ近郊のソルマ・ヴェスヴィアーナにおける古代ローマ遺跡／東京大学本郷キャンパスにおける加賀藩前田家江戸藩邸の発掘

主催：東京大学文学部・人文社会系研究科

共催：東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター

協力：東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構地中海地域研究

期間：2026. 1. 20～2. 19

# 特別教育プログラム

## 死生学・応用倫理教育プログラム

### ◇教員◇

堀江宗正 鈴木晃仁 井口高志 富澤かな 古荘真敬 乗立雄輝  
会田薫子 (以上、死生学・応用倫理センター運営委員)  
鴨下顕彦 齋藤幸平 中澤栄輔 芳賀猛 福永真弓 森崎真由美  
米村滋人 伊吹友秀 澤井敦 廣田佳典 轟孝夫 早川正祐  
北條勝貴 村上靖彦 山田慎也 吉永明弘

「死生学」は、死を免れない生命のあり方を見つめ、とりわけ人間の生の意味を問い直す学問です。死、死にゆく過程、死後、死別や悲嘆、自殺、戦争、災害、医療をめぐる経験と、広い対象を範囲とします。臨床系の研究と人文社会系の研究の双方を含む、学際的な分野です。

また、「応用倫理」は、生命倫理や環境倫理や技術倫理などに代表されるように、科学の発達とともに社会のなかで発生している具体的な問題を対象とする研究です。哲学的な倫理学説の単なる応用 (applied ethics) にとどまらず、現場の実践の中で生じる葛藤や困難な判断を分析し、指針の形成に参入する実践的な倫理 (practical ethics) として展開されています。

科学と技術は、医療、情報通信、エネルギー開発などの領域で、私たちの生活を大きく変えてきました。その一方で、生命操作、環境破壊、資源の枯渇といった新たな問題も生み出しています。こうした状況のもとで、科学技術は人間にとって何であるのか、どのように用いられるべきなのかが問われています。また、生きることと死ぬことは、人間にとってどのような意味を持つのかも、あらためて問い直されています。これらの問いから、「死生学」と「応用倫理」は展開してきました。いずれもその性格上、哲学、倫理学、宗教学、歴史学に加え、社会学、心理学、教育学、さらに医学、看護学、法学、工学、環境学やサステイナビリティ研究など、幅広い分野に関わります。

こうした死生学と応用倫理の問題関心を、学際的に学ぶ機会として、2011年に発足した人文社会系研究科「死生学・応用倫理センター」は、学部横断型の「死生学・応用倫理教育プログラム」を開設しました。本プログラムは、各学部・部局で個別に開講されている関連授業を体系的に履修できるようにし、修了証の授与を通じて学修の成果を可視化するものです。これにより、死生学と応用倫理に関する学際的な知識と視野を備えた学生の育成を目指します。関心を有する学生の積極的な参加

を歓迎します。

「死生学・応用倫理教育プログラム」は必修科目（概論）、必修選択科目（演習）、選択科目の3種類の授業からなります。必修科目は「死生学概論」「応用倫理概論」の2講義4単位、必修選択科目は「死生学演習」「応用倫理演習」のうちから2単位、選択科目は6単位、計12単位以上の履修により、修了が認定されます。修了者に対しては、東京大学教育運営委員会より修了証を付与します。



## 【2026年度開講科目】

### 必修科目

担当教員	科目名	単位数
堀江宗正 他	死生学概論（死生学の射程）	2
鈴木晃仁	応用倫理概論（応用倫理入門）	2

### 選択必修科目

担当教員	科目名	単位数
鈴木晃仁	死生学演習 I（患者の歴史と倫理 I）	2
富澤かな	死生学演習 II（共存の論理と食・生命）	2
会田薫子	応用倫理演習 I（質的研究法入門）	2
鈴木晃仁	応用倫理演習 II（患者の歴史 II）	2
井口高志	応用倫理演習 III（ケアと生の社会学(1)）	2
富澤かな	応用倫理演習 IV（共有の論理とオリエンタリズム）	2
井口高志	応用倫理演習 V（ケアと生の社会学(2)）	2
堀江宗正	応用倫理演習 VI（環境思想研究）	2

## 選択科目

担当教員	科目名	単位数
会田薫子	死生学特殊講義Ⅰ（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅺ）	2
会田薫子	死生学特殊講義Ⅱ（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅻ）	2
会田薫子	死生学特殊講義Ⅲ（臨床死生学特論）	2
早川正祐	死生学特殊講義Ⅳ（受容性から考える倫理的な生の諸相：ケアの倫理を起点として）	2
乗立雄輝	死生学特殊講義Ⅴ（死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの考察）	2
古荘真敬	死生学特殊講義Ⅵ（死生をめぐる実存哲学の諸問題）	2
堀江宗正	死生学特殊講義Ⅶ（死生学入門）	2
山田慎也	死生学特殊講義Ⅷ（葬送儀礼の変容と死生観）	2
冨澤かな	死生学特殊講義Ⅸ（インドから考える共存と生命）	2
澤井敦	死生学特殊講義Ⅹ（死と不安の社会学）	2
池田真理	医 家族と健康（家族と健康）	2
中澤栄輔	医 生命・医療倫理Ⅰ	2
鴨下顕彦	農 技術倫理（食・生活・生産を中心に、現代の科学技術と社会との接点において、価値判断を伴う意思決定が求められる場面を取り上げる）	1
芳賀猛	農 生命倫理	1
伊吹友秀	養 応用倫理学概論（科学技術論コース）	2
伊吹友秀	養 応用倫理学概論（グローバル・エシックス）	
米村滋人	法 特別講義 医事法	2
米村滋人	法 医事法演習	2
齋藤幸平	養 現代思想（「正統性の危機」を考える）	2

## 原典を読む

### ◇教員◇

柳原孝敦、前田佳一

「原典を読む」は、東京大学の全ての学部の学生を対象に、日頃から関心は持ってはいてもなかなか紐解く機会のない、古今東西の古典や重要文献を講読形式で味読することを目的に開かれています。これを機に、一行一行をじっくり解釈しながら読み解いていく快樂を味わってみてください。

この科目は、もともとは2001年度までの「**外国文学講読**」を発展させたもので、文学部が専門課程における教養教育の一環を積極的に担うこと、具体的には理科系ないし社会科学系の学部<sup>1</sup>に在籍する学生諸君に、外国文学の講読を通じて幅広い人間教育を行うことを目的にしていました。もちろん、文学部の学問は、外国文学だけに限られているわけではありません。哲学、思想、歴史、社会学や心理学などの幅広い分野が研究対象です。しかも、そこに共通するのは、それらの学問の基本が広義の文献学、すなわちテキストの解読であることです。そこで、2002年度からこの科目の開設を文学部全体に広げ、名称も「**原典を読む**」に改めることにしました。したがってここに言う「原典」とは**外国語文献**だけでなく、**日本語文献**や時には**翻訳文献**も含まれることとなります。

テキストの解読は決してたやすいことではありません。日本語文献であっても、「日本語なのだから、読めばわかるだろう」式の安易な姿勢で接すると、大きな間違いをしでかします。テキストを解読するには、一定の方法に従いながら、きちんと筋道を立て、その上で内容を解釈していく地道な作業が求められます。そうした作業を実践的に学んでいくことが、ここでの目標となります。慣れないうちは面倒と感じるかもしれませんが、はまり込むとそれが愉悅に変わります。文学部の学問の楽しさはそこにあります。教員との人間的な触れあいが得られるのも、この科目の魅力といえます。担当するのは、すべて文学部の専任教員です。少人数向けというのが原則ですから、ずいぶんと贅沢なことかもしれません。マスプロ授業の経験しかない諸君は、ぜひ一度こうした手作りの授業を味わってみてください。

なお、以上のような趣旨で開設される科目ですので、文学部所属の学生諸君は聴講に制限のある場合があります。詳細は、授業を担当する各教員に確認してください。

### 参考：2026 年度開講科目

- ・ロベルト・ボラーニョ『2666』を読む（柳原孝敦）
- ・ヘルマン・ヘッセを読む（前田佳一）

# アカデミック・ライティング

## ◇教員◇

Catherine Dale、David Taylor、中邑啓子

インターネットの普及等により、学術研究の成果の共有が時空を超えて瞬時にできるような時代が到来しています。学術研究における国際化の流れのなかで、母語が異なる世界中の人々と共通の基盤を持ち、情報を公開し合い、相互理解に基づく批判的な検討や質疑応答が学術研究を進展させる大きな推進力になっています。このような状況の中で、今後学術研究の一端を担おうとするためには、それなりの能力の養成がこれまで以上に必須となります。

2002年度より、学術研究の成果を今や世界の共通語である英語を使って広く国際社会に公開できる能力の養成をめざして、人文社会系研究科・文学部では、学部・大学院共通で半期2単位の「アカデミック・ライティング」という授業が開講されています。受講生のレベルを考慮し、年度を重ねて開講科目が整備され、2005年度からは、学術研究への意欲を持つ学部学生の基礎力養成を目指す「Academic Writing I, II (Introductory)」、大学院・学部共通で、基礎力の向上を目指す「Academic Writing III, IV (Intermediate)」、学術研究の成果が公表できるような能力の発展を目指す大学院専用の「アカデミック・ライティング 1, 2 (上級)」というようにレベル別に授業が開講されています。手紙や伝言等を含む日常生活にかかわる比較的短い文章や調査報告や研究概要等を含む研究レポートの作成が英語で書けるような能力が修得できていないと思われる学生は、まず共通講義の「英語後期 (Writing, Speaking)」を受講して基礎力を十分に養成してください。そのような基礎力の裏付けがあることが、「アカデミック・ライティング [英語]」を受講するための前提条件となっています。

授業は、(1) 学術論文の構成等に関する講義、(2) 受講生による論文の作成および口頭発表、(3) 受講生同士による発表論文についての討議、(4) 教員による批判的講評という形態で進められ、これらはすべて英語で行います。特に(2)については、与えられた課題について小論文を数回作成し、それらについて(3)、(4)の過程で学んだことに基づき、学期末には受講生が専攻する分野での研究の成果を学術論文として作成し、実践的能力の養成に努めます。1クラスの受講者数が20名を超えるとこのような形態の授業は効果的に行うことができないので、受講希望者は、上記の要件を満たしていることを前提として、初回の授業の折に、担当教員が面接等を行って受講者を決定します。受講機会の均等化を図るため、当該年度に受講できるのは原則1クラスのみとします。

なお、大学院のみの科目ですが、フランス語とドイツ語、中国語の授業も開講されています。

文学部教員によるエッセイ

# 私の選択

歩きだしてしまった方角

八尾 史（インド哲学仏教学）

抗いがたい魅力につかまってしまった話

木下 華子（日本語日本文学（国文学））

流されながらの選択

松田 陽（文化資源学）

このコーナーでは毎年、文学部の先生方をお願いして、今専門にしている学問との思い出などを語っていただいています。文学部ホームページに掲載されているバックナンバーでは、過去の先生方のエッセイを読むことができます。以下は最近5年間に掲載されたエッセイのタイトルです。タイトルだけみても、文学部の先生方の学問との出会い方、つきあい方が実に多種多様であることが感じられるのではないのでしょうか。

2025年	
吉田 寛 (美学芸術学)	新たな学問を創造できる場所
島田 竜登 (東洋史学)	図書館の書庫
塩塚秀一郎 (フランス語フランス文学)	「役立ちたくないので数学者と文学者に憧れている」
浅野 倫子 (心理学)	結果オーライにする (現在進行形)
2024年	
加藤 隆宏 (インド哲学仏教学)	「私の選択？」
長屋 尚典 (言語学)	人とは違う道
藤井 光 (現代文芸論)	気がついたときには、もう選択は終わっていた
堀江 宗正 (死生学)	「私の選択？」
2023年	
西村 明 (宗教学宗教史学)	圧倒的な現実にもとばを与える
根岸 洋 (考古学)	考古学を選んだこと
佐藤 至子 (国文学)	読めば読むほど
土肥 秀行 (南欧語南欧文学)	日伊間の博士号ダブルディグリーの仕組みを創設する
2022年	
菊地 達也 (イスラム学)	せっかくだし
井島 正博 (国語学)	認識の仕組みを求めて
小林 真理 (文化資源学)	自分の直感を信じる。
芳賀 京子 (次世代)	女の一生と人生の岐路
2021年	
納富 信留 (哲学)	不東一日本を出るという決断—
梶原三恵子 (インド語インド文学)	学生時代のいくつかの選択の記
塚本 昌則 (フランス語フランス文学)	フランス語を学ぶことで新たな自分と出会う
出口 剛司 (社会学)	敵前を、大事なものを抱えてきわどくすり抜けていくやり方

<https://www.lu-tokyo.ac.jp/teacher/essay.html>

## 歩きだしてしまった方角

八尾 史 (インド哲学仏教学)



私の選択、と呼べるようなことを大学に入ってこのかたした記憶がありません。歩きだしてしまった方角へ先も見えずに歩いているうちに二十何年経っていて、いまだに先が見えません、などというぱっとしない話をするのもためらわれるのですが、それでも進路に迷っている人の考える材料になることが多少はあるかもしれませんので、思いつくままに来歴を書きます。

仏教の勉強をすることと研究者になることは、高校二年のときに決めていました。それでいて仏教学が何を学ぶ学問なのかは知りませんでした。というより、仏教学と呼ばれる学問が存在することを知りませんでした。もちろん、研究者が何を学ぶ人なのかも知りませんでした。

埼玉県公立の公立中学、高校に通っていた十代のころ、宗教や思想にかかわるものを読んだり見聞したりするのが好きで、記紀神話や『ハディース』やエル・グレコの宗教画もおもしろかったのですが、とりわけひきつけられたのが仏教でした。何がきっかけだったのかはわかりません。というより、単一のきっかけなどはなかったのでしょうか。日本文学を読めば仏教はごろごろ出てきますし、宮沢賢治は特別好きな作者の一人でした。中学の修学旅行以来広隆寺の弥勒菩薩像にとりつかれていて、ついでにそれを生んだ弥勒信仰の、五十六億七千万年後の救済というむやみなスケールの大きさにもとりつかれていました。高校の修学旅行で京都を再訪してからは病膏肓に入るで、世界の終わる日には大秦にいなければならぬ（その日に東海道新幹線が動いているかどうかは問題だ）などと本気で考えたりしていました。そのうちエチベットの仏教関連の本を読みあさってこれはたいへんなものだという事になり、仏教を知らねばならぬ、という思いいれができあがったのだと思います。調べたら東大文学部にインド哲学仏教学専修課程というものがあったので、そこへ行けば仏教の勉強ができるのだろうという単純な考えで文科三類を受験しました。

入学後はせっせとサンスクリット語の授業に出たり、いろいろな分野の講義を楽しく聴いたりしていましたが、一年の秋学期に本郷で開講されていた下田正弘先生

の学部・大学院共通の講義に出たのが、今から思えば研究という世界を垣間見たはじめだったように思います。それは仏教研究についての講義でした。近代の仏教学が19世紀ヨーロッパで生まれた学問であることを知って仰天し、神のいない宗教に出会った西洋人の驚きを追体験し、その後の授業も刺戟の連続でした。おもしろいと同時に難しくもありましたが、必死にノートをとるうちに漠然と理解しはじめたのは、学問をするということは学問の名で自分が何をしているかを問うことでなくてはならない、ということでした。とはいえ仏教学なるものの内実はわたしにはいまだ曖昧模糊としていました（文献学という言葉を知ったのはもう少し後で、それはもっとわかりませんでした）。

「印哲」はやめといた方がいい、と駒場の理工系の先生に言われたのはたしかそのころです。進学先どうするの、と授業後の飲み会で聞かれたときのことで、印哲です研究者になろうと思いません、と答えたらそう言われたのでした。就職先がないというのが理由だったと記憶します（よくある誤解です）。親切心からの助言だったにちがいませんが、言われた方は馬耳東風で、迷わずそのまま印哲に進学しました。

就職のことは何も考えていませんでした。

そんなふうに進学に躊躇はなかったのですが、しかし本郷で行われていたことのごわさは想像を超えていました。毎日サンスクリット文献講読の予習に明け暮れ、学部の二年間くらいではちつとも読めるようにならず、仏教のことは勉強すればするほどわからなくなっていくような気がしながら大学院に進学しました。

院には入ったものの、修士論文で何を研究したらいいのかわからず途方に暮れました。先輩から「根本有部律（こんぽんうぶりつ、インド仏教の僧院規則文献）」の中の経典というテーマを勧められ、何の考えもなく「それやります」と答えたのが因縁のはじめで、今にいたるまでそれをやっています。博士論文では根本有部律の「菓事」という章をチベット語訳から日本語訳することになりました。これは苦行でした。全部で四百葉（フォリオ）ほどある「菓事」の葉番号を一枚の紙に印刷し



研究室での授業 学生とサンスクリット写本を読む

て、毎日進んだところまで印をつけることにしましたが、半葉しか訳せない日もよくありました。ただただ混沌とした説話の羅列に頭が麻痺していくようで苦痛でならず、人類の叡智に触れている気はさらにせず、論文を提出しても達成感はありませんでした。提出の翌々日に夜行バスに乗って隠岐に行き、三日ほど海をながめていました。水は透き通ってきれいで、コピーして持っていった『後鳥羽院御口伝』はちんぷんかんぷんでした。

博士号取得後は、あちこちの公募に落ちたり拾われたりしながら研究員の職を転々としました。カナダでポスドクをした三年間を含め、研究に専念できる環境に長くいられたことは幸運でした。「薬事」との因縁は続いていて、それというのも呪われたことに今度は英訳を始めてしまったからでしたが、そうやってしつこく読んだおかげで、この奇妙な文献の中で何が起きているのかが段々薄皮をはぐように



ポスドク先のマクマスター大学を再訪（2026年4月）

見えてきました。五里霧中で和訳をしていたときには素通りしていたチベット語訳と漢訳の重要な違いや、一見無秩序でいて何か意味がありそうでひっかかっていたエピソードの配列の中に、「薬事」編纂者が何をしていたのかを示す手がかりが隠れていたのです。

一方、思いがけない幸いでとりかかることになった「薬事」サンスクリット写本断片の解説という仕事がありました。細かくちぎれてばらばらになった写本でしたので容易ではありませんでしたが、作業自体は苦にはならず、むしろ中毒になるくらい没頭していられました。うんざりするほどチベット語訳を訳して内容が頭に入っていたからできた部分もありました。読み取れた僅かな文字列から新しいことがわかると嬉しく、それを学会発表や論文にして人に伝えるのも楽しくなりました。

後から考えると、「留学」と「写本」は学生時代に敬して遠ざけていたことでした。前者の理由はわたしの英会話能力がお話にならなかったからで、後者についても、興味関心はありながら、自分が何かできるとは思っていませんでした。しかしどちらもいざ直面してみると、しないという選択肢はありませんでした。そして得るところは数えきれないほどありました。

その後就職をして教育にも携わるようになりましたが、字数も尽きました。誰か迷っている人の参考とはいわず、励ましにでもなればさいわいです。

## 抗いがたい魅力につかまってしまった話

木下 華子（国文学）



私の専門は、日本の中世文学、平安時代後半から鎌倉・南北朝・室町時代という動乱の時期の文学である。なぜ、中世文学の研究者になったのか。どういう選択を重ねてここに至ったのか。それを問われているのだと思うのだが、大きなきっかけがあって、何かに感銘を受けて、選択を行ってきたわけでもないように思う。後になって、「ああそうか」「だから私はこうしたのか」と納得することのほうが多い。そんな私でも研究者を続けていられるのだから、それでよいのかもしれない。

国文学を学びたいというのは選択するまでもなかった。幼少期からいわゆる本の虫で、物語の類いが大好き。本を選ぼうと本棚を見ているうちに、その場に座り込んで読み始めてしまい、気が付いたら辺りが暗くなっているような子どもだった。中学・高校になると、水がさらさらと流れるように古文に惹かれ始め、大学は文学部、学ぶのは国文学と自然に定まっていったように思う。

最初の岐路らしきものは、本郷に進学した後に訪れた。3年生の前半くらいまでは、中古文学、『源氏物語』で卒論を書こうくらいの気持ちだっただろうか（駒場の期間に他の時代や作品を勉強していなかっただけかもしれない）。しかし、授業、特に演習を経験する度に、異なる感覚が大きくなっていったのである。中世文学の演習が楽しくてしかたない。3年次の演習で読んだ作品は、鴨長明の『無名抄』。『方丈記』の作者が書き記した、歌論・歌学の書である。私の担当は「ますほの薄」という章段であり、登蓮法師という人物が、「ますほの薄」という歌語を知る人を訪ねて、雨の夜に京都から摂津（大阪）まで蓑笠もなしに走り、その秘伝を手に入れて後に長明に伝えるというものだった。この人は何をしているのだろうか、と思ったのだ。雨が止むのを待てばいいではないか。なぜ夜の危険をおかしてまで何十キロも進むのか。それを書きとめて共感している作者は何を考えているのか。ただただ不思議だった。その不思議なことが成立する背景、必然性を知りたくて、卒論のテーマとし、おのずと中世文学研究に分け入ることになったのである。ただ、さすがに安直かなと思い、3年生の春休みに総合図書館で上代から近世までの作品を叢書で読んだ。今思えば、私が惹かれているのは中世文学だと納得するための実感のよう

なものがほしかっただけだろう。案の定、卒論のテーマは維持されたのだった。



梅沢記念館旧蔵東京国立博物館蔵『無名抄』より  
「マスホノスゝキ」の章段の写真  
出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム  
([https://colbase.nich.go.jp/col/lection\\_items/trm/B-3181?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/col/lection_items/trm/B-3181?locale=ja))

いう思いだったのだろう。そこで、改めて件の『無名抄』を読み、曲がりなりにとも研究の手付きで調べ始めたのだった。

結果、また、楽しくなってしまったのである。しかも、今度の楽しさは深かった。これまで教わってきた研究の手順を踏んで作品に向き合くと、今まで見えなかったものが見えてくる。私はよく、言葉の向こう側に景色が見えるという言い方をするのだが、その感覚を得た最初の経験だったかもしれない。新しい景色が見えること、その景色が重なりながら道筋や世界が立ち上がってくることがぞくぞくするほど楽しくて、次へ次へと手を進めたくなっていた。私は文学研究の魅力（魔力？）につかまってしまったらしい、そう感じたことをはっきり覚えている。

こうなると、またまた直線的な思考で研究を続けたいと思うものである。第二の岐路はこのあたりなのだろうが、選択した感覚はない。もう逃げられないと覚悟したというのが近いだろう。中世文学とそれを研究することに、私は抗いがたい魅力を感じているらしい。逃げたところで、結局つかまってしまう。ならば、無駄な抵抗はやめて、手放すなんて思わないで、正面から向き合おう。何のことはない、悩める若者がようやく自分と向き合うことができた、自分に正直になっただけの話である。

そのようなわけで、研究の道で生きていこうと腹をくくり、今に至っているのだが、もちろん紆余曲折も逆境も経験した。あんなに本が好きだったのに、活字一つ読めなくなってしまった時期もある。ただ、どのような折も、研究をやめるといふ選択肢は現れなかった。もはや、研究は選択する対象ではなく、私を支えてくれる存在になっていたからだろう。

さて、好きなだけでは限界が生じるもので、大学院進学後は見事に打ちのめされた。できない、かなわないのである。勉強と経験が足りないだけなのだが、若い時というのは思考が直線的なのか、研究者は無理だからやめようと思った。実家の両親にも、修士課程を修了したら就職すると宣言したほどである。そうは言っても、やめるにしても、修士論文はちゃんと書こう。ずっと好きだった道から離れるのだから、けじめをつけなければと

さて、振り返ってみると、私の研究人生のうち、選択らしきものはたった一つ。卒業論文をどうしようか迷っていた3年生の終わり頃、中世文学を選んだというものである。ただ面白かった、好きだったからなのだが、この段階では、それがなぜ中世文学なのかはわかっていない。だから、この選択も、主体的に選んだものではなく、するすると引き寄せられたというのに近い。ただ、最近になって、少しだけ、私が惹きつけられた理由、中世文学を選択した理由がわかったような気がする。

周知のごとく、日本の中世文学は「無常」という言葉で象徴される。中世は「無常」の時代、中世文学に宿るのは「無常観」。確かに、中世は、数多くの戦乱によって、社会のシステムが何度も再構築される激動の時代であった。おそらく、日本の歴史の中で、一定期間に最大数の戦乱が生じた時代と言って差し支えないだろう。人々が数多くの困難や社会変動に直面せざるを得ない中で、物事は永続しないという「無常」の感覚と、そこに対してどのような姿勢でのぞむべきかという自覚、いわゆる「無常観」が醸成し、中世文学のそこここに現れるのも道理である。

しかし、中世文学に向き合うと気付くのだが、作品もそれを担う人々も、明るく、たくましく、したたかなまでに躍動している。和歌・連歌、説話、軍記、能・狂言、御伽草子、様々なジャンルの文学が、前代からの革新を遂げ、互いに連関し合って、縦横無尽な展開を見せる。「無常」が充満する時空間において、困難を受けとめ、乗り越えて、新しさを拓く骨太のエネルギー。奪われてもひしがれても、めげることなく、ひこばえのように芽吹く言葉の数々。なるほど、私が惹きつけられてやまないのは、「無常」の時代におけるたくましい生命力としなやかな創造力なのだろう。私は、この不思議な矛盾を、その必然性と機構（メカニズム）を解き明かしたいのだ。研究のとば口に立って30年、ようやく自分と自分の好きな対象を識ったということだろうか。

3年生の時の選択は間違っていなかったようである。好きな理由も、それで何ができるかもわからない。それでも、惹きつけられてやまないもの。そんな抗いがたい魅力——中世文学研究——につかまって、しがみつきながらここまでやってきて思うのは、「これでよかった」である。



1番大教室での「国文学特殊講義（「無常」からの創造—中世文学を考える）」の授業風景

## 流されながらの選択

松田 陽（文化資源学）



人は、実にたくさんの選択をしながら生きていくが、私が今の専門にたどり着く上で決定的となった選択は何だったか。開陳して誇れるようなものがあればよいのだが、出てこない。自分自身が選んだというよりも、環境や状況が選んだ、という思いの方がはるかに強いからだ。

今に至るまでの道のりが川だとすると、舟に乗って、流されながら下ってきた。大河ではなく小川。舟も、笹舟のように小さい。たくさんの石にぶつかって進路が変わり、風雨を受けて進路が変わり、流され、流されつづけて、今の地点にいる。主体的に生きることが重んじられる今日の風潮を考えると情けない航路かもしれないが、本当なのだから仕方ない。

とは言え、自ら笹舟に乗り込んだのだし、小さな棹を幾度か思いきり突いたことも事実だ。それらは選択と言えるかもしれないので、そうした感覚のある思い出をたどってみる。

高校時代、受験勉強をしているうちに、世界史が面白いと感じるようになった。社会や文化、国、文明といったものの栄枯盛衰を引きおこしたものが何かを考えることに夢中になり、大学で学びたいと思った。『マスターキートン』の影響もあったかもしれない。こうして文学部の門を叩くことになったのだが、受験の目標を下げるつもりか、と叱られたことを覚えている。それでも、自分が学びたいことを見つけた喜びを実感していたので、貫いた。

大学に入り、西洋史学専修課程に進学した。興味深い文献をたくさん読んだが、二年間学ぼうちに、文字情報だけから過去を考えることへの限界を感じるようになった。と、格好つけて言ってみたが、忍耐力がなかっただけである。同期の佐藤昇の話聞き、こういう優秀な人のための学問だと痛感したことも大きい。

ともあれ、文学部での学びが霞を食うことのように思えてきて、自分はずっと実社会なるものを知らねばならないと考えた。そこで民間企業に就職する。が、実社会を知り始めると再び学びたくなくて、大学院人文社会系研究科に戻ることにした。

ここで好奇心が湧き、古代ローマ遺跡の発掘調査に参加することになる。文字ではなく、遺構や遺物といったモノ資料から過去を考えたいと思ったからだ。文学部

時代に強めた古典考古学や美術史学への関心にも後押しされた。



古代ローマ遺跡の発掘調査

イタリアで参加したこの発掘調査が、たいそう面白かった。さまざまな意味で、脳天をガツンと叩いてくれるような経験だった。そこで、ローマ考古学を専門にしようと考えたが、イタリアで仲良くなったドメニコ・エスポジト、通称ミンモと話していて、打ちのめされる。幼少期からポンペイの遺跡内で遊んでいたというミンモは、ローマ考古学の道をまっしぐらに突き進んでい

た。ローマ考古学の隅から隅まで知っているこんなやつに、自分は絶対になかない——勝手にそうしてしまった。いかにも青臭いが、どうせやるなら世界で一番になれるようなことをしたいと、本気で思っていた。

この敗北感が、新たな道をひらく。その時までには私はすっかりローマ遺跡に魅了されていたのだが——杉山浩平兄さんと一緒にたくさんの遺跡を訪れたものだから——こうした遺跡を現代社会にもっとうまく位置づける方策を研究しようとするようになった。これなら、ミンモにも負けず、世界の第一線で勝負できると思えた。

ちょうど、人文社会系研究科に文化資源学研究室が創設される時期だった。現代社会で遺跡という文化資源をいかに保全・活用していくのかを考える場が、運良く目の前にあらわれた。加えて、英国留学用の奨学金をもらえることになり、以後、東大とユニバーシティ・カレッジ・ロンドンという二つの大学にて、修士課程と博士課程の学びを修めることになる。途中、パリのユネスコ文化遺産部でインターシップとコンサルタントの仕事をし、またイタリアでの発掘調査にも毎年夏参加したので、ずいぶんと濃密な時間だった。自分の専門は、考古学と現代社会との関係を探究するパブリックアーケオロジである、迷いなく言えるようになった。

この間、持ち金が底をつき、将来の見通しも立たず、お先真つ暗という辛い思いもした。昼食代をいかに2ポンド以内におさめるかに日々苦慮したものだ。英国時代は、私のキャリアにとって断トツに最良の期間であったが、人生のどん底を経験したのもこの時である。考古学には過去はあるが、未来はない——とよく言った。そこそこウケた。

ここで、セインズベリー日本藝術研究所に拾われる。ポストドクならぬ、ミッドドクターとでも呼ぶべきフェローシップをいただき、人生初の研究イコール仕事という経験をロンドンでした。実力で勝ち取ったというよりは、人の縁で授けてもらっ

た、という感覚だ。

フェローシップに救われて博士号を取得した後、英国の大学に就職したいと願うようになった。研究を続けたかったからであり、英国の大学がどのように意思決定をしているのかを内部から見たいと思ったからでもある。ありがたいことに、この願いも人の縁によって叶い、美しい歴史的都市ノリッチにあるイーストアングリア大学で教鞭を取るようになった。

大学就職をしたところ、専門を広げる必要を感じ、パブリックアーケオロジーに加えて、文化遺産研究の看板をかかげるようになった。文化遺産研究であれば、人間社会と過去との幅広い関わりを探究できると考えたからだ。こうして、建築、美術工芸品、文書、用具、祭礼、技術、景観、出来事、慣習のように、「歴史的」や「伝統的」といった言葉を前につければ成立するおおよそすべての事象を考察対象にするようになった。考えること、調べることが無限に出てきて、研究に飽きることがなくなった。イーストアングリア大学が珠玉の大学博物館を擁していたこともあり、博物館研究も手がけるようになった。



イーストアングリア大学

そうしているうちに東大より声をかけてもらい、2015年から文化資源学研究室にて奉職することになった。文化を「ことば」と「おと」と「かたち」を手掛かりに根源に立ち返って見直そうとする文化資源学は、文化遺産研究と親和性があり、自然と古巣に戻ることができた。

以上、今の専門にたどり着くまでの過程を、「私の選択」がなるたけ浮き彫りになるように振り返ってみたが、何がどこまで主体的な選択であったのかは、やっぱりよくわからない。笹舟に乗って川を流されてきた、という私の実感も、少しはおわかりいただけたのではないと思う。

私の選択は、この拙文を読む若い方々にはあまり参考にならない気がする。いかにも型のない道を進んできたものだと、我ながら思う。でも、人のキャリア選択なんて、意外とそんなものかもしれない。

生きている中で、人は無数の小さな選択をし、またいくつかの大きな選択をするのだろうが、どこまでが本当に自分の選択であるのかは曖昧だ。「悔いのない人生を過ごそう」などとよく言うが、私の実感からすると、どのような選択をしようと悔いは残るし、それが人間だ。それでもやっぱり、各々の場面で選択をしつづけていくしかない。

# 文学部情報館

さらに詳しく知るために  
専修課程への問い合わせ  
卒業生の進路状況

## さらに詳しく知るために

この『PROSPECTUS』は、文学部の各専修課程に関する説明を中心に構成されており、文学部のすべてについて紹介するものではありません。文学部についてもっと知りたいと考えている方も、少なくないでしょう。そういう皆さんには、以下のようなものが用意されていますので、ぜひ活用してください。

### (1) 人文社会系研究科・文学部ホームページ

<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/>

文学部教員が自分の研究を語るエッセイ集「文学部のひと」や、卒業生へのインタビュー記事も掲載していますので、文学部での学びや進路を考えるうえで参考になるでしょう。便覧、授業科目一覧・授業時間割、留学、インターンシップの募集など、在学生向けの情報は在学生ポータルに掲載しています。

### (2) 『東京大学文学部便覧』

[https://www.l.u-tokyo.ac.jp/student/undergraduate\\_binran.html](https://www.l.u-tokyo.ac.jp/student/undergraduate_binran.html)

4月にその年度の版が公開されます。文学部の規則や授業日程、認定科目一覧、教員免許や学芸員資格を取得する方法、教室・研究室案内図、電話番号一覧、総合図書館などの本郷の諸施設の利用案内といったものを網羅しており、これをみれば、文学部で学生生活を送るのに具体的に必要な事柄はたいていわかると言っても過言ではありません。

### (3) 『東京大学文学部授業科目一覧・授業時間割』

<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/student/schedule.html>

文学部では、800近い講義と演習が開講されますが、その科目一覧と時間割が記されています。文学部の講義は毎年内容が変わるので、来年進学する皆さんがそのまま使うことはできませんが、文学部でどのような授業をしているか、そのアウトラインはつかめると思います。授業の詳細はUTASでシラバスを見てください。

#### (4) 『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 教育・研究年報』

<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/schema/annual.html>

これは隔年刊で、最新版は2025年2月に刊行されました。文学部所属各教員の紹介のために大部分のページを割いています。それぞれの教員ごとに、略歴、研究課題と概要、著作・論文等の研究業績（最近2年間）、学内外での活動が記されています。皆さんが本郷に進学して教えを受けることになる文学部教員が学問的にどのような活動をしているかは、この最新版とバックナンバーによっておよそわかりますから、それをたよりに、図書館で教員の著作や論文を読んでみるのもよいでしょう。

#### (5) 文学部の扉

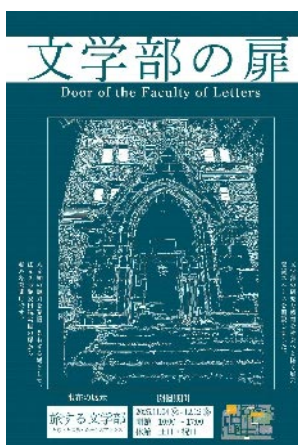
<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/tobira/index.html>

文学部の研究や教育を社会へと拓く展示・交流スペースとして、2025年3月に開設されました。法文2号館の安田講堂側の広場に面した扉からアクセスできる小さなスペースで、研究科で行われてきた教育・研究を、学内外に向けて発信・共有・交流する場となっています。

人文知の形成過程を教育・研究の側面から実験的に見せる場として、人文知の多様な世界を新たな形で見せる方法を模索しています。

最新の情報はホームページでご確認ください（過去の展示情報も掲載中です）。

#### 文学部の扉ポスターアーカイブ



#### 「旅する文学部

—とき・ところ・かたちのアトラス—

文学部教員が訪れた研究フィールドを写真と解説文で綴る

主催：東京大学文学部・人文社会系研究科

共催：東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻

監修：高岸輝 教授（美術史学、文学部広報委員長）

期間：2025. 11. 4～12. 12

## 専修課程への問い合わせ

### (1) 講義に参加する

文学部の多くの専修課程は、「**持ち出し専門科目**」（教養学部2年生を対象とする文学部の専門科目）や、「**総合科目**」「**展開科目**」「**主題科目**」（教養学部1・2年生を対象に文学部教員が担当する前期課程科目）を開講しています。また、「**体験活動プログラム**」にも参画しています。関心のある専修課程の講義や演習、プログラムに参加して、担当教員に直接質問するとよいでしょう。著作を通して厳格な印象を与える教員が、話してみると実に気さくな人だったりして、意外な発見があるかもしれません。怖がらずに近づいてみましょう。

### 前期課程で文学部が開講する科目の例

#### 総 合 科 目

世界哲学	世界哲学とは何か
外国文学	イタリア文学へのいざない
外国文学	フランス文学のエチュード
外国文学	英米文学への誘い
外国文学	生成文法統語論研究
美術論	美術史学入門
比較思想	イスラーム・宗教・日本
比較思想	宗教と生と死（と性）
比較思想	初期仏教の聖典とその思想
東洋思想史	中国思想入門
世界史論	近代世界とアジア・日本
言語文化論	構造と意味
言語文化論	言語の多様性から考える言語学
言語文化論	中国を読む——古代文字から現代文学まで
歴史と文化	中国古代史論
歴史社会論	歴史の中のイスラーム社会

展開科目（人文科学ゼミナール）	
ことばと文化	イスラム思想アラビア語原典講読
哲学・科学史	東洋医学の根本経典『黄帝内経』を原典で読む
哲学・科学史	「解釈学的方法」の理論と実践
歴史学	考古資料から過去を読む
主 題 科 目	
全学自由研究ゼミナール	江戸時代の史料を読む
全学自由研究ゼミナール	漢籍を読む
全学自由研究ゼミナール	ドイツ文学への誘い
全学体験ゼミナール	オホーツクの自然と文化遺産に学ぶ
学術フロンティア講義	西洋史学へのいざない

### 体験活動プログラムの例

総 合 科 目
陶板複製名画美術館における学芸員体験
お米の未来を考えようーおいしい庄内米つや姫のふるさと鶴岡市藤島地区を訪ねて
北海道の遺跡博物館における学芸員体験と冬のオホーツク文化体験
聖地熊野の歴史文化と自然を体験し、地域振興を考える
インドを深く学ぶ旅一日印学生交流を中心として
芸術の都フィレンツェで文化財保護を学ぶ

※開講科目・プログラムは年度により異なります

## （２）メール・電話で問い合わせる

各専修課程には、学生の皆さんの質問に応じるための体制ができています。

専修課程のメールアドレスや電話番号は、文学部ホームページに掲載されています。遠慮なく連絡するとよいでしょう。ただし、多くの専修課程では、夏休み中（7月下旬から9月上旬）の研究室開室が毎週一回程度になりますので、注意してください。

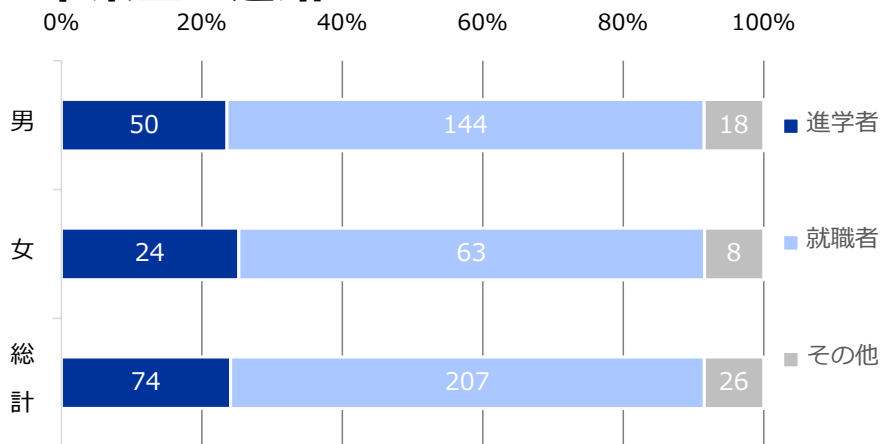
## （３）進学関係イベント

毎年5月と12月に開催される**進学ガイダンス**では、文学部所属の教員や学生が各専修課程・研究室の様子を紹介したり、みなさんからの質問にお答えします。

5月には約一週間にわたり全研究室が参加する**文学部オープンハウス**が開催され、研究室訪問や講義・演習の見学受け入れ等を行います。興味・関心のある研究室の様子をぜひ実際に見に来てください。

# 2025年3月卒業生の進路

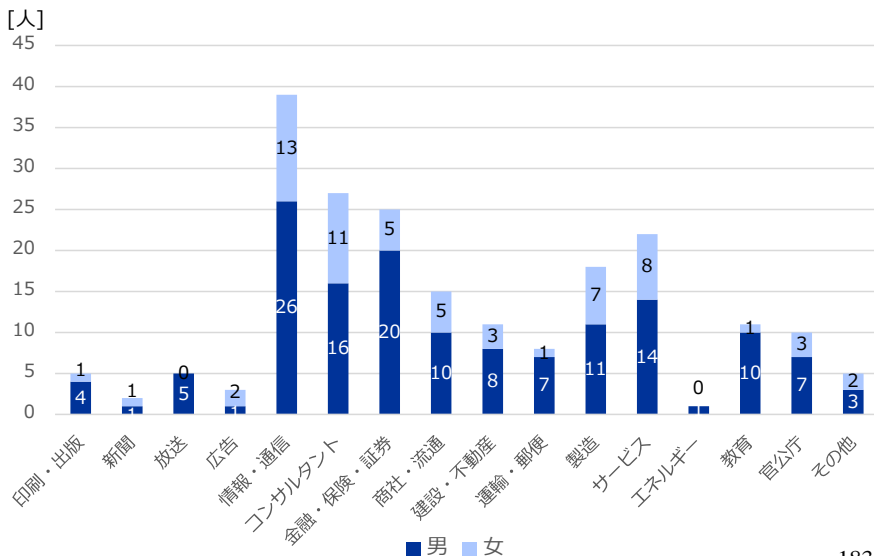
## I. 卒業生の進路



グラフ中の数字は人数を示す

その他 : 大学院入学試験準備、資格試験勉強等

## II. 就職者 業種別人数内訳



### Ⅲ. 業種別 就職先一覧

印刷・出版	Gakken、TOPPAN、光村図書出版、集英社、東洋経済新報社
新聞	中日新聞社、読売新聞東京本社
放送	NHK、フジテレビジョン
広告	電通、毎日広告社
情報・通信	baton、Cygames、Emosy、nid、SHIFT、Sky、TKC、U-NEXT HOLDINGS、Yondemy、イー・ガーディアン、インフォテクノ朝日、カディンチェ、カブコン、キャピタル・アセット・プランニング、ケアリッツテクノロジーズ、サイバーエージェント、ジーニー・スクウェア・エニックスソフトバンク、データX、デロイトトーマツアクト、レバレジーズ、一般財団法人日本航空協会、楽天グループ、日鉄ソリューションズ、日本テクノストラクチャア、日本総合研究所、富士通、野村総合研究所
コンサルタント	AKKODISコンサルティング、BCG、EYストラテジー・アンド・コンサルティング、PwCアドバイザリー、Re-grit Partners、アクセンチュア、アビームコンサルティング、クニエ、シグマクシス、シンプレクス、フロンティア・マネジメント、ペイカレント・コンサルティング、ボストン・コンサルティング・グループ、マッキンゼー&カンパニー
金融・保険・証券	SMBC日興証券、みずほフィナンシャルグループ、みずほ銀行、丸井グループ、広島銀行、三井住友カード、三井住友海上火災保険、三井住友銀行、三菱UFJ銀行、証券保管振替機構、大和証券、東京海上日動火災保険、日本政策投資銀行、日本生命保険、農林中央金庫
商社・流通	カクヤス、グロープライド、ハビネット、ファーストリテイリング、伊藤忠丸紅鉄鋼、伊藤忠商事、三井物産、三菱商事、住友商事
建設・不動産	GAテクノロジーズ、JPMC、NTT都市開発、三井不動産、三菱マテリアルテクノ、鹿島建設、森トラスト、西武不動産、大成建設
運輸・郵便	J-AIR、オーシャンネットワークエクスプレスジャパン、ロジスティード、阪急阪神ホールディングス、西武ホールディングス、東海旅客鉄道、東日本旅客鉄道、日本通運
製造	kuraray、SHARP、SMC、コカ・コーラ ボトラーズジャパン、サントリーホールディングス、ソニー・ホンダモビリティ、ディスコ、トヨタ車体研究所、旭化成、丸大食品、三菱重工業、住友化学、住友電気工業、川崎重工業、富士フイルム
サービス	EY新日本有限責任監査法人、mode、PwC有限監査法人、アクトインディ、クリエイティブヨーコ、コーエーテクモゲームス、ジャストシステム、タイミー、デロイトトーマツサイバー、パーソルキャリア、バンク・オブ・イノベーション、プシロード、フロンティアインターナショナル、みのりデザイン制作所、リヴァンプ、楽天、LEADERS.INC、東京ドーム、東宝、日本旅行、有限責任監査法人トーマツ
エネルギー	マイスターエンジニアリング
教育	ACフォルテ、STEP、さなる、スプリックス、トライリンガルインターナショナル、育伸、高宮学園代々木ゼミナール、国立大学法人電気通信大学、埼玉県立大宮高等学校、湘南ゼミナール、臨海
官公庁	経済産業省、警察庁、国立国会図書館、静岡県庁、東京国税局、東京都庁、日本年金機構、農林水産省、文部科学省

専修課程別進路状況（全体）

2025. 3卒業者

専修課程名	卒業生 総数	大学院 等進学	外国の 学校	就 職				進学 就職 以外	不明者
				企業	官庁	教育	他		
哲学	24	7		6	1	2		8	
中国思想文化学	1			1					
インド哲学仏教学	3	1		1	1				
倫理学	2					1		1	
宗教学宗教史学	12	5		5		1		1	
美学芸術学	36	8	1	23		1	1	2	
イスラム学	3	1		1		1			
日本史学	24	8		12			2	2	
東洋史学	4			3				1	
西洋史学	9		1	7		1			
考古学	6	3		2	1				
美術史学	10	6		3	1				
言語学	26	5		14	2	2		3	
日本語日本文学（国語学）	13	2		9	1	1			
日本語日本文学（国文学）	18	2		12	1			2	1
中国語中国文学	1	1							
インド語インド文学	1							1	
英語英米文学	13	2	1	10					
ドイツ語ドイツ文学	2	2							
フランス語フランス文学	6	2		3		1			
スラヴ語スラヴ文学	1							1	
南欧語南欧文学	1							1	
現代文芸論	6	1		4				1	
西洋古典学	1			1					
心理学	22	5		16	1				
社会心理学	17	2		12			2	1	
社会学	45	8		36	1				
文学部総計	307	71	3	181	10	11	5	25	1
23.1% 1.0% 59.0% 3.3% 3.6% 1.6% 8.1% 0.3%									

進路調査票データに基づく

専修課程別進路状況（就職者の内訳）

2025.3卒業者

専修課程名	就職者数	出版印刷	新聞	放送	広告	情報通信	コンサルタント	金融保険	商社流通	建設不動産	運輸郵便	製造	サービス	エネルギー	教育	官公庁	その他
哲学	9					1	3					1	1		2	1	
中国思想文化学	1											1					
インド哲学仏教学	2					1										1	
倫理学	1														1		
宗教学宗教史学	6	1				1		2	1						1		
美学芸術学	25	1		2	1	7	3	1				1	7		1		1
イスラム学	2						1								1		
日本史学	14		1			2		2	3	1	1	2					2
東洋史学	3							1	1				1				
西洋史学	8						1	2	2	1		1			1		
考古学	3			1						1							1
美術史学	4						1		1				1				1
言語学	18				1	6	2	2	1		1		1		2	2	
日本語日本文学（国語学）	11	1				4		1				1	1	1	1	1	
日本語日本文学（国文学）	13					5		1			1	1	4			1	
中国語中国文学																	
インド語インド文学																	
英語英米文学	10					1	1	3	2	2	1						
ドイツ語ドイツ文学																	
フランス語フランス文学	4											2	1		1		
スラヴ語スラヴ文学																	
南欧語南欧文学																	
現代文芸論	4	1				2				1							
西洋古典学	1										1						
心理学	17			1		3	2	2	3	1		4				1	
社会心理学	14	1			1	3	1	2			2		2				2
社会学	37		1	1		3	12	6	1	4	1	4	3			1	
文学部総計	207	5	2	5	3	39	27	25	15	11	8	18	22	1	11	10	5
		2%	1%	2%	1%	19%	13%	12%	7%	5%	4%	9%	11%	0%	5%	5%	2%

進路調査票データに基づく

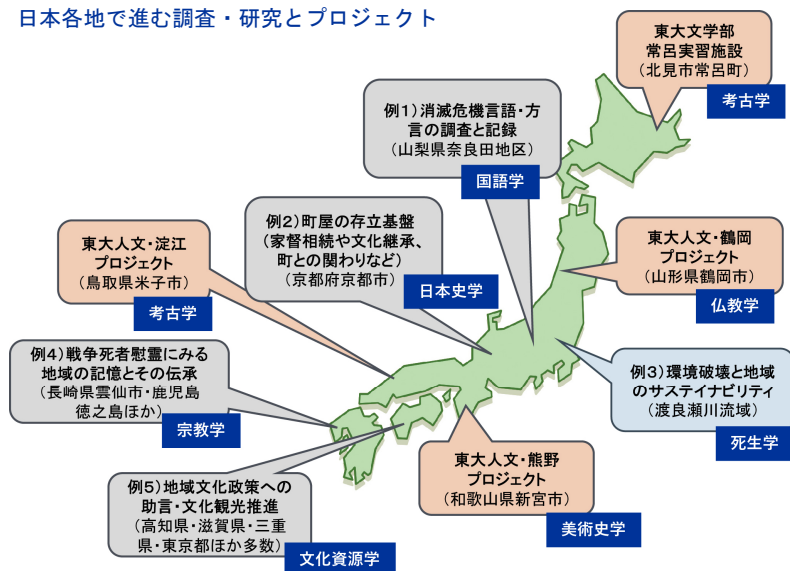
## 多様化する文学部の研究フィールド

文学部の研究フィールドは本郷を拠点に日本各地そして世界へ。  
2025年にオープンした「文学部の扉」から多様な研究・教育の成果を発信します。



文学部の扉「旅する文学部:とき・ところ・かたちのアトラス」(2025.11-12月展示)

### 日本各地で進む調査・研究とプロジェクト



## 世界に広がる研究フィールド



- 1 アメリカのパルプ・フィクション
- 2 ベトナム戦争戦没者慰霊日（アメリカ）
- 3 スピノザ「遺稿集」ラテン語版（哲学研究室所蔵）
- 4 ライプツィヒのマルクト広場（ドイツ）
- 5 オスロ郊外の湖（ノルウェー）
- 6 オーストリア国立図書館
- 7 ダマスカス新市街の日常（シリア）
- 8 インドの英人墓地より
- 9 通州張家湾鎮の城門と運通橋（中国）
- 10 台湾朝天宮の祭礼
- 11 西之京瑞饋神輿（京都府）
- 12 奈良田のおぼこ人形（山梨県）
- 13 屋久島の夕景（鹿児島県）

文学部カレンダー2024, 2025  
特集「人文学のまなざし」より

PROSPECTUS 2026  
東京大学文学部 進学ガイダンス

発行：2026年5月 東京大学文学部 編集：文学部学生支援チーム（学部担当）  
〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 Tel. 03-5841-3709 <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/>

東大文

PROSPECTUSはこちらからもご覧いただけます。

在学生ポータル | 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科  
<<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/komaba/prospectus.html>>

